

寅十二月二十八日有馬兵庫頭え上る

大岡越前守

七八二

同八年正月八日

於町中輕き身上之者火事に逢候て當日を送り兼及餽命可申體之もの有之候は、訴出前廣に帳面に記置可申候然らば火事に逢候儀度々幾度にては妻子共に御救可被下置候事

但帳面に附置候以後身上取直し候様又は他國えも参り或は奉公に出候類有之は其段訴出帳面消可申事

右之趣相心得名主五人組申合相互に致吟味書面之通りの者在之候は、早速可訴出候若打捨置脇より相知候は、可爲越度候以上

享保八年卯正月

卯正月八日有馬兵庫頭殿え上候處書面之通町觸可致旨兵庫頭殿翌九日御申聞候付翌十日樽屋藤左衛門え申渡す

同十八年正月廿三日

一 米高直にて町方致困窮候に付此間惣名主寄合相談之上左之願書を以御月番大岡越前守様え御願可罷出段申合候處當廿一日白米江戸表え出し候儀不若之御觸有之候に付白米之一ヶ條相除昨廿二日罷出候處増御評定有之御聞不罷成候に付今日罷出候筈に申合候處今明け六半時越前守様御番所え町中名主可罷出旨昨廿二日配符參候に付又々相延候處今日越前守様にて御救米被下置候段被仰渡候に付此御願差止候得とも格別之訴狀に付記置候

乍恐以書付御訴申上候

一 惣町中名主共申上候段々米高直に有之其上不商にて町々至極困窮仕候に付此間町人共御願にも數度罷出申候乍恐支配之内吟味仕候處困窮人多難儀至極仕候依之左之通御願申上候事

一 米屑買置無用に仕候様御觸被成下其上米屋に不限所々藏々御改被下候様奉願上候御事

一 陸付米諸廻船入津井白川白米前之通御當地え手廣く米入込候様奉願候御事

一 武家方近年米段々高直に有之候得共諸色代金御拂無御座必至と難儀至極仕候此義も何卒御拂被遊被成下候様奉願候御事

一 此度町方困窮仕別て裏々之者諸職人日用其日稼之者必至と難儀仕罷在候に付御救に御普請等被仰付被下置候は、難有奉存候御事

一 惣て相對勸化等當前之内御止被下置候様奉願候御事

右之通町中困窮に付品々以書付御願申上候趣御慈悲を以被爲聞召被下置候は、難有奉存候尤此上存付候義も御座候は、追而御願可申上候以上

享保十八年丑正月

惣町中

名主共

丑正月廿三日

大岡越前守様御番所え町中名主被召出稻生下野守様御列座にて被仰渡町年寄衆出席

一 米高直に付及飢候者爲御救御米被下置名主共え御渡可被置候間當日給兼及飢候者致吟味とらせ可申候尤委細御書付奈良屋市右衛門殿にて請取可申旨被仰渡候末つ同日奈良屋え相越候様左之御書付一組え一通宛被相渡尤御米は淺草御藏より市右衛門殿え御渡被成候間近日四日市土手藏にて名主共方え可被相渡旨被申聞候

但御米高凡五千俵を御割渡に候間追而割付之書付可被相渡旨被申聞候

此度飢人爲御救御米相渡置候割

男一日壹人二合宛

第三款 周

急

七八三

女一日壹人一合宛

但十五歳以下之子供は女之部え入

右之割を以當日給兼及飢候者致吟味とらせ可申候

但其町に飢人無之其次之町に飢人多町へは支配違候共請取置候御救米送り遣候様可申合事

一 飢人之儀無油斷取計可申候

一 慮妄無之相互に名主申合飢人不死様に可仕候家主等慮妄之儀も有之は遂吟味可申出候此儀に付ては觸書も差出候事

丑正月

此度町々其日を給兼候飢人えとらせ候ため名主共御米相渡置候此儀に付而名主共は勿論家々等迄慮妄之儀有之歟若又油斷にて飢人多有之は其所より早速可申出候右之通町中可觸知者也

正月

右之通被仰渡候間町中不殘可被相觸候以上

正月廿三日

町年寄

三

人

同廿四日

御救米渡方之儀年番名主寄合左之通申合候

及飢候者相改御米頂戴爲致候仕様

一 亭主稼申候者妻子計に御米相渡亭主は相除可申候病人に有之候は、其心得にて可相渡候

一 兄弟にて稼兩親有之候は、御米相渡不申候

一 當人稼兩親計有之候には御米可相渡候

右之類之内にて年寄懸り人有之は掛り人には御米吟味之上可相渡候

右之通今日年番寄合之上申合候以上

丑正月廿四日

覺

一 新材木町名主吉左衛門 一 堺町名主治郎兵衛 一 幸町名主嘉左衛門 一 本八町堀町名主十左衛門 一 南銀

町名主孫市

右御救米之儀に付用事有之間右一組切に申合明廿五日五時奈良屋所え可被參候以上

正月廿四日

町年寄

三

人

同廿五日

右に付申合奈良屋え相越候處近日御救米可被相渡候間右五人引受帳面之通組合名主え相渡旨被申渡御米高割付之帳而被相渡尤御米請取書付は五人より一紙に認差出組合名主より右五人え請取書付取置候様被申渡候

二番組

一 御救米高三百七十一俵

百四拾六俵 新材木町堺町組

二百廿五俵 靈岸島八町堀組

御救米割付之覺

- 一 拾二俵 北新堀町
- 一 拾二俵 南新堀町 平次郎
- 一 拾二俵 靈岸島四日市町 市兵衛
- 一 拾二俵 靈岸島町 平七
- 一 八俵 南新堀 請負屋敷
- 一 拾二俵 東湊町 長兵衛
- 一 拾八俵 南銀町 孫市
- 一 拾八俵 南茅場町 甚七
- 一 廿七俵 南八町堀町 市藏
- 一 拾八俵 幸町 嘉左衛門
- 一 拾八俵 本八丁堀 町十左衛門
- 一 拾八俵 上柳原町 善三郎
- 一 拾二俵 南小田原町 作右衛門
- 一 拾二俵 舟松町 忠兵衛
- 一 八俵 北紺屋町上け地 月行事
- 一 八俵 同所拜領屋敷 月行事
- 一 八俵 水谷町上け地 月行事
- 一 八俵 金六町上け地 月行事
- 一 二百二拾五俵

右に付左之通請取書付認置候  
覺

一 俵數三百七十一俵

右は同御救米御渡被成儲に奉請取候以上

丑正月廿何日

右 五 人 之 名 主

名 判

同廿六日

奈良屋え右五人之名主被呼明廿七日五時四日市町土手藏にて御救米帳面高之通五人え被相渡候間其心得いたし尤請取書付を持右刻右之場所え參候様被申渡候

右に付組合寄合相付町々月行事人足を連明廿七日期五時前四日市土手藏え參候様可申渡尤大茶船二艘履靈岸島分八町堀鐵砲洲分一艘宛に積分月事致世話名主居町向寄之河岸口へ御來上させ候様可申渡旨申合せ候

同三月廿七日

今朝五時前四日市土手藏え相越候處奈良屋市右衛門殿手代連被出御割付之通請取書付と引合御米被相渡則舟積に致し申合通組合名主え相渡請取書付取置候

同廿八日

右に付組合町々名主月行事一紙之書付を以兩御番所え右之御禮申上候尤町年寄衆三ヶ所えも相越候

同日

組合寄合御救米渡方申合せ候

組合申合之覺

一 飢におよひ候體之者家主五人組立合吟味之上名主方え書出可申候其上名主致吟味可及飢儀相違無之候は、御米可相

渡事

御救米相渡候類

- 一 亭主一人にて稼父母妻子養兼候類は父母妻子之分可相渡事
- 一 店主病身にと稼にも不出類は可相渡事
- 一 夫婦掛向にて亭主年寄又は病身にて女房稼養候は一人分ん可相渡事
- 一 道心者親兄弟なと懸り人有之類其身病にも有之敷雨天抔積候節は見合可相渡事

右之外共に申候は、遂吟味可申候

丑正月

奈良屋にて年番名主え被申渡

一 飢人御救米此間名主え請取候義に付飢人も無之場所にても銘名家主え割取飢人にて無之地借えも致配分候場所も有之或は御米請取候は當廿七日に而候御奉行所にて被仰渡候は廿三日にて候處廿三日より之日積を以家主抔え請取御米不請取前家主より致合力候米を右御救米を以差引致候様之事も在之申に候

右之儀會而有間敷事に候御米は名主方え預り置吟味致し飢人相應に相渡候答之事に候當分飢人無之場所は名主方に御米請取置候事にて町々え致配分相渡候事に而は無之候間不埒無之様に可致候

一 一町之間敷長短により御米之請取方に多少有之候に付家主地主他町に引くらへ申分にも有之由に候一町之間敷之長短により割合候員數に而は無之候間飢人多有之御米不足に候は、隣町へ申達飢人無數方之御米配分を可請候飢人無數所之名主も其段相心得不足之町えは請取候内之御米を配分致し可遣候不埒有之候は、急度可被仰付候段先達而御奉行所より被仰渡候事に候間左様可相心得候此段早々同役え可被申達候以上

三月朔日

同五日

奈良屋へ町々名主被呼先月廿七日御救米請取候節之船賃車賃等書付差出候様被申渡候

同五日

右に付左之通書付差出候

覺

二番組

一 御救米三百七拾一俵

此引取賃錢七貫五拾六文

右は四日市町土手藏河岸より町々へ御米引取候舟賃車力賃錢高相違無御座候以上

丑二月五日

- 南茅場町甚七 本八町堀町十左衛門 南八町堀町市藏 船松町忠兵衛 上柳原町善三郎 南小田原町作右衛門
- 幸町嘉左衛門 東湊町長兵衛 長崎町平七 南銀町孫市 南濱町市兵衛 南新堀町平次郎 北新堀町(人名)北
- 紺屋町水谷町 上地拜領地共に月行事與四郎彌兵衛 葺屋町庄左衛門 堺町治郎兵衛 住吉町庄右衛門 乗物町
- 善左衛門 田所町平藏 橋町平助 村松町理右衛門 小網町伊兵衛 新材木町吉左衛門 堀江六軒町月行事源七
- 同新道宗助甚左衛門長兵衛

同二月十四日

今日稻生下野守様御白洲え具足町名主治郎左衛門御用有之罷出候處外に被仰渡候は御救米之儀名主共え御渡取置飢人えとらせ候様被仰渡候處月行事抔え相渡置不吟味成致方之者も有之由不埒に候間名主共吟味仕困窮人えは致無用飢人え計

とらせ可申候尤飢人之義も可及餓死程之者又は袖乞等に出席之者斗えとらせ可申旨外名主えも申繼候様被仰渡候旨通達有之候先達而年番寄合にて頂戴爲致様申合之義は了簡違も有之候間右被仰渡之通相心得可申旨年番通達

同四月五日

奈良屋にて年番名主え被申渡

御救米不殘相渡候分并殘有之分且又飢人無之御米其儘有之分右委細明後七日迄に名主支配限に書付差出可申尤未相渡し候分は書出に不及候旨被申渡候

同五月十九日

御救米四日市土手藏より引取候節之船賃車力賃錢被下置今日奈良屋にて被相渡候

同年二月朔日

一 御堀浚御救御普請被仰付候に付左之通今日稻生下野守様御番所え年番名主願書差上候得は御白洲え被召出御尋之上大岡越前守様え御内談可被成段被仰聞願書御留被置候

乍恐以書付奉願上候

一 惣町中年番名主共申上候飢人共御救之儀被仰出飢人は不及申上一同に難有奉存候此上之御救之義町人共奉願候義乍恐左に申上候

一 此度御堀浚御救御普請被仰付難有奉存候然共唯今迄御手傳被仰付候御屋敷様方より御出入之町人又は入札を以請負被仰付或は御權威狀にて被仰付候も有之候若此度も左様之儀に而は町中一同之御救には不相成候依之町人共奉願上候は町々々職一本宛も御渡し被成下候共又は町々へ割付人足に被仰付被下置候得は男女老若に不限稼爲致少々宛も其賃錢を以今日之渡世に罷成候様に仕度奉存候尤賃錢之儀は其場所に而頂戴仕度奉存候此儀何分にも奉願上候御事右之通町人共奉願上候に付乍恐以書付申上候以上

享保十八年丑二月朔日

年番

名主共

同二月六日

稻生下野守様御内寄合え年番名主共被召出被仰渡

一 御堀浚に付町々々職一本宛御渡被下候共又者町々割付人足被仰付被下候共被成下度之儀年番名主共より願書差上候に付右之趣御普請御奉行方御手傳方え被仰遣候得共御堀浚之儀者請負人随分被入御念家質等差出慎成者に被仰付老年若年不達者等之者御掛け被成候儀は難被成事に付御堀浚捨土深川本所邊え該遣候間其節何方之者にても右場所え參上持運び候様可申聞旨被仰渡候

同三月晦日

右土持之儀に付深川名主より七番組年番名主え左之通申來に付組合并日本橋南北年番名主え相達

御救土持之儀昨日迄者二三歳四五歳之小兒又者乳香子を抱或者手足不自由成老人並病人體之者杯罷出候得共此已後一切左様之類之者差出申間敷候土持可成者計運ひ候數に應輕き賃錢被下候難土持者は相除き差出不申候様に稻葉出雲守様石河庄九郎様より被仰渡候旨御手傳様御役人衆中より御申渡被成候間御組合町々并南北御年番方え右之趣御通達可被下候今日晴天に御座候得者土持御座候間土持に様成者計御出可被成候以上

己三月晦日

平野 甚四郎

鹿鹽 久右衛門

高部 源右衛門

同八月二日

右土持之儀に付深川名主より年番名主え左之通申來に付通達

御堀凌捨土明三日より毎日明六半時より五時迄之内御救ざる持始申候間御支配え可被仰聞候捨土場所八幡前佃町平野  
新田大和町東平野町西平野町右場所に候尤病人體之者或者乳呑子抱候者御無用に候以上

己八月二日

齊藤 助之丞  
平野 甚四郎

己文三年九月廿七日

櫻町天皇  
八代將軍吉宗

諸色高直に付今日惣年番寄合相談之上左之通書付認樽屋へ致持參候處未御内寄合不相濟候間石河土佐守様御番所え持參  
候様玄關にて挨拶に付直に右御番所え持參樽屋藤左衛門殿え差出候得は即刻御窺之處書付御留被置候段被申聞候

乍恐以書付奉願候

當夏中より諸色段々高直に罷成近頃右に准し米別て高直に御座候に付町中之ものとも難儀至極仕候先年米高直之節と違  
雜穀も高直に御座候て糧給候義も難仕迷惑仕候殊更場末裏輕々きものは當分ひしと及餓命候者御座候此通御座候ては追  
て無宿數多罷成行倒者も可有御座と奉存候差當り取續兼難義至極仕候もの多御座候間御慈悲此節御救被成下候様奉願候  
以上

元文三年午十月

惣町申年番

名 主 共

同四年三月五日

一 去夏頃より諸色高直に付年番名主相談之上左之通書付樽屋迄差出候

以書付奉願候

一 去夏頃より諸色高直に付別て朱直段高直に罷成町中困窮仕候に付去十月年番名主共御救之義御願申上候處其後町人  
共追々御願申上候處如何様にも取續候様被仰渡候に付粥糧等を給相凌き罷在候得共米並諸色打續高直に御座候て輕き  
者共及餓命難儀仕候去冬頃より別て袖乞並無宿體之者何方より罷出候哉不想知道日相見申候此節御慈悲を以何分にも  
御救被成下候様町中一同に奉願候以上

年番

名 主 共

三月七日

樽屋え年番名主被呼右之段昨六日御内寄合にて被申上候處未高直に相成候て間も無之義に候間先差控最飢人多相見へ候  
は、其節可申上旨被御渡候段被申候

同三月廿三日

右に付右之通年番廻狀差出候

以廻狀得御意候米高直に付去年十月年番より御救之御願御申上被成候處何様にも取締候様に被仰渡候當年に至打續諸色  
高直に付先達て惣年番寄合の上此節御救被成下候様猶又御願差出置候別て頃日米高直に罷成候間町々にて粥糧なと給取  
續候様御申渡被成可然候勿論裏々輕きもの、内當前餓命におよび候者も可有之哉可被御心添候以上

年

番

## 第十四款

### 銃 器

銃砲取締規則の細目は古今相同じからずと雖も人民濫に銃砲を玩弄する能はざる旨意に至ては古今著き沿革を見ざる也

寛永十九年九月九日(明正天皇 三代將軍家光)

備藩典刑拔録

鐵砲うち申儀山中むき今までうち來る在所も今度其郡々の奉行相改出し候札の外うち候儀一切可爲停止若相背輩於有之は札にてゆるすうち手の内より見付次第早々岡山え可告來かくし置に至ては同罪可申付事

明曆三年(後西天皇 四代將軍家綱)

此以前より鐵砲御免の所は格別其外在々所々におゐて鐵砲所持すべからず自然相背無益之殺生いたし晝夜を不限山野に住者於有之は可申出候縦同類たりといふ共其科を免じ御褒美可被下候隠置他所より顯におゐては御穿鑿の上曲事可被仰付事

寛文二年九月廿三日

關東山中筋此以前より鐵砲御免の處たりといふとも獵師の外鐵砲所持すべからず勿論其外の在々所々令停止の間其所の地頭代官より相改之鐵砲於致所持は可取上之獵師無紛鐵砲打來輩は地頭代官より札に鄉村並鐵砲主の名を書付相渡之餘人に貸候儀可爲無用の由堅可申付之若致違背鐵砲令所持晝夜によらず山野に住するものあらば可申出之縦雖爲同類其科

をゆるし御褒美可被下之自然隠し置他所よりあらはるゝに於ては御穿鑿の上其所の名主五人組まで可被行罪科之旨急度可申付者也

延寶三年三月(靈元天皇 四代將軍家綱)

覺

關東中在々所々に於て鐵砲令所持儀先年より御制禁の處近來獲に打候由其聞有之自今以後其所之給人御代官より相改之鐵砲を取上以來まで所持不仕様に堅可被申付之候但山入にて鐵砲不打して不叶所者御代官又は給人より郷付を書付札を出し爲打可申候惣て町人百姓等向後鐵砲不可所持者也

同四年七月二日

覺

關東八州在々所々におゐて百姓鐵砲不可所持旨此以前被仰付雖相觸其以後御改依無之今以致所持の由其聞有之今度者御藏入は御代官私領は地頭方寺社領は其住持神主とも御鐵砲並玉藥小道具等悉可取之但一萬石以下の面々は員數注帳面支配方まで可差上之山方にて獵師無之して不叶分は其所の領主御代官住持神主より旨趣支配方え申斷可任差圖重て爲御穿鑿檢使可被遣之條無斷して鐵砲令所持輩於有之は御詮議の上急度可被行罪科者也

同年同月三日

關東中鐵砲改仕様口上の覺

- 一 浪人百姓は勿論他領のものにて當座其村に罷在輩並預鐵砲の由申候共村切に鐵砲可取上之事
- 一 跡々知行をも取り引籠罷在候浪人の鐵砲は様子相尋其趣支配方え申伺之可被任差圖事以上

天和二年正月

浪人斷鐵砲證文

一 右私領分に罷在候何國何郡浪人鐵砲何挺所持仕候右の鐵砲にて稽古に事寄惡事並殺生一切仕間敷旨堅申付面々の手形取置申候此以後何方よりも浪人鐵砲持參仕候共御届け可申候右浪人の内在附候敷又は他所え鐵砲持參仕候はゞ其節御斷可申上候爲其如斯御座候以上

年號月日

誰

印判書判

宛所

浪人取上鐵砲證文

一 右取上鐵砲の内何挺浪人所持仕候故此度取上置申候其内浪人在附被敷亦是子細有之請取度旨申候はゞ様子承届け急度御斷申上相渡可申候自今以後彌浪人手前鐵砲所持不仕候様に改可申候爲其如斯御座候

年號月日

誰

印判書判

宛所

(以上貞享四年にも同文の教令あり元祿年元正月廿二日にも大同小異の教令あり)  
口上の覺

一 今度諸國一統牢人所持の鐵砲御改御取上候に付加藤兵介殿え遣候證文二通被差出候依之各御知行所は不及申屋敷の内被差置候牢人も有之候は鐵砲御改可被成候只今屋敷の内え牢人無之候共以後差置候儀も可有御座候各より被差出候證文には無之候得共爲心得右證文寫懸御目候委細追て可被仰聞候以上

貞享元年十二月廿四日

第十四款 銃

器



覺

關東方於在々所々鐵砲にて雁鴨打埋不盡に致押賣百姓手前より代物取之由其聞有之候其方御代官方所の内にも左様の者有之候はゞ何とぞ捕候様に可仕候若早速捕候儀難成候はゞ人を付在所見届候様に可被申付候不及申候へども日來鐵砲打候處怪子細無之て鐵砲打候儀不及兪議候間可被得其意候以上

國	半	兵	衛
佐	六	右	衛
中	陸	岐	守
彦	伯	耆	守
大	備	前	守

同二年二月二日

頃日猥に鐵砲打候者有之に付て高札立候間守此旨鐵砲打候者とらへ候輩あらば御領私領によらず近郷の者早速出合不取逃様に致し町奉行所へ可差出若不出合輩は後日に相聞といふとも可爲曲事事

同四年十一月(東山天皇 五代將軍綱吉)

何國何郡何村

用心鐵砲

右拙者領分何村は所がら物騒に御座候に付百姓難澁仕候就夫爲用心鐵砲何挺百姓に預置申度旨奉願候處願之通被仰付候此鐵砲を以盜賊に事寄意趣遺恨有之者など打殺申候歟其外にも惡事仕出候におゐては本人は不及申名主五人組迄可爲曲事旨急度申付置候且又右の鐵砲にて殺生一切仕間敷候此鐵砲の儀不及申他人縱親兄弟にて御座候とも鐵砲預り主の外他人へ借し申候儀會以仕間敷段堅申付候右の趣相背申候はゞ何様の曲事にも可被仰付旨名主五人組鐵砲預り主より手形取置申候爲其如此御座候以上

何國何郡何村

月限鐵砲

右拙者領分の内庶猪多出作毛荒し百姓迷惑仕候就夫玉込不申候鐵砲にておとし申度存鐵砲何挺何月より何月迄百姓に預け申度旨奉願候處願の通被仰付候若右の鐵砲に玉を込惡事仕出し申候歟又は殺生など仕候はゞ本人は不及申名主五人組迄可爲曲事旨急度申付置候此鐵砲の儀他人は不及申縱親子兄弟にて御座候共鐵砲預り主の外餘人へ借申儀會以仕間敷段堅申付右の趣相背申候はゞ何様の曲事にも可被仰付旨名主五人組鐵砲預り主方より手形取置申候爲其如此御座候以上

何國何郡何村

斷鐵砲

右拙者領分鐵砲相改候處何村は山方にて畜類多出作毛荒し申候に付て先規より御斷申上おとしのため鐵砲何挺百姓所持仕候玉込不申鐵砲にておとし申度存候若畜類防に事寄惡事仕出申候歟又は殺生など仕候におゐては本人は不及申名主五人組迄可爲曲事旨急度申付置候此鐵砲の儀他人は不及申縱親子兄弟にて御座候とも鐵砲持主の外餘人へ借申儀會以仕間敷段堅申付右の趣相背申候はゞ何様の曲事にも可被仰付旨名主五人組鐵砲持主方より手形取置申候爲其如此御座候以上

何國何郡何村

右拙者領分鐵砲相改候處何村は山方にて先規より御斷申上獵師鐵砲何挺致所持狩仕渡世を送申候若此以後鐵砲にて狩之外惡事仕出し申におゐては本人は不及申名主五人組迄可爲曲事旨急度申付置候右の鐵砲他人は不及申縱親子兄弟にて御座候共鐵砲持主の外餘人へ借申儀會以仕間敷段堅申付候右の趣相背候はゞ何様の曲事にも可被仰付旨名主五人組鐵砲持主方より手形取置申候爲其如此御座候以上

年號月日

第十四款 銃

器

宛 所

同年十二月五日

口上の覺

鐵砲改向後諸國一同に被仰付候證文等の儀河野權右衛門加藤兵助方え可被相伺候以上

元禄元年十月

覺

- 一 浪人致所持候鐵砲
  - 一 商賣鐵砲
  - 一 町人致所持候鐵砲
  - 一 預り鐵砲
  - 一 何者にても町中に居候者の鐵砲
- 右玉目何程の筒明細に改め書付取可申候自今以後鐵砲致出來次第書付上可申候勿論増減候分書付上可申候若隱置脇より相知候はゞ可爲曲事も也

同二年十一月十九日

差上申手形之事

鐵砲之儀向後商物に買置申度候歟又者質物に置申度と申者御座候歟無據様子御座候て預置申度と申もの御座候はゞ其子細前廉に御斷申上御差圖可請旨被仰渡奉畏候町中家持者不及申借屋店借地借召仕等迄爲申聞此旨堅く相守可申候尤自今已後鐵砲所持仕候もの町内え參候はゞ是又御斷可申上候若右之趣相背者御座候はゞ本人者不及申家主五人組名主迄何様

の曲事にも可被仰付候爲後日町中違判手形差上申候仍如件

元禄二年己十一月十九日

御 奉 行 所

町 中 違 判

同十四年三月

覺

曲中鐵砲改の儀向後は一ヶ年切に増減の清帳差出し候様に町年寄方え申付候間只今まで鐵砲所持仕候ものは不及申所持不仕者も自今以後鐵砲買取候歟質物に取り候歟又者預り申候はゞ其時々本人並家主奈良屋市右衛門方え參帳に付可申候賣拂候節も可爲同前候

右の通家持は不及申借家地借の者どもにて此旨堅相守可申候若違背仕候者於有之は急度可申付者也

寶永六年四月

覺

- 一 猪鹿狼等多出田畑荒し人馬えも掛り候節は不及相同玉込鐵砲にて爲打可被申事
  - 附 目付に家來付置候儀並打留候數書付不及差出候事
  - 一 玉込鐵砲免許の儀候間常威鐵砲並月切威鐵砲向後不及願事
  - 一 獵師鐵砲相續並増減の儀鐵砲改方え不及相同御代官領主地頭可爲勝手次第事
  - 一 同心鐵砲並寄進鐵砲の事
  - 一 商賣鐵砲並質物鐵砲の事
  - 一 江戸の外諸國浪人所持の鐵砲並浪人積古鐵砲の事
- 右三ヶ條は前々の通り相心得鐵砲改方え相同可被任差圖事

誰 印 判 書 判

八〇〇

一 獵師並荒候者類打候外は在々所々並町方まで隈に鐵砲打申間敷候御代官領主地頭方にて常々邊吟味毎歲一度宛鐵砲改方え證文可被差出候事

以上

同年十月

覺

頃日在々所々江戸近邊にても獵師にて無之者鐵砲を打殺生いたし候様に相聞候向後彌以跡々被仰出候通り猥りに無之様に頭々支配々え可被申聞候尤御料は御代官私領は地頭より右の趣可被申付候以上

同年十二月晦日(六代將軍家宣)

覺

江戸於近邊に獵師にて無之者鐵砲致殺生候由相聞候に付跡々の通猥に無之様被仰出候處長谷川惣右衛門鐵砲殺生仕花房三郎左衛門深谷左源太も惣右衛門と申合殺生に罷出候急度可被仰付處此節の儀故御慈悲を以惣右衛門遠島被仰付候三郎左衛門左源太は鐵砲之儀不存候故閉門被仰付候彌最前相觸候書付の趣相守候様可相心得者也

右之通被仰出候間可相守旨町中不殘可被相觸候

右之通被仰付候間町中家持は不及申借屋店借裏々召仕等迄此旨相守可申旨町中不殘可被相觸候以上

享保二年五月(中御門天皇 八代將軍吉宗)

鐵砲御改の儀に付御觸書

一 鐵砲改の儀向後關八州は貞享四年被仰出候趣に相心得鐵砲改役へ相伺可差圖事

但猪鹿多出田畑をあらし候節は不及相伺御料私領寺社領とも月切日切を極玉込鐵砲にてうたせ其段早速鐵砲改役へ可相屆候打仕廻候は、鐵砲取上之是又其趣改役へ可相屆候事

一 江戸より拾里四方は獵師たりといふとも一切鐵砲取上可申事

但猪鹿狼多く出田畑をあらし人馬へ懸り百姓及難儀候節は鐵砲改役へ相伺可請差圖候事

一 關八州の外の國々は鐵砲改役へ例年證文等差出候事以來不及其儀候尤猥に無之様に御料私領寺社領共に急度可申付候事

右之通可被得其意候以上

同年七月

覺

武藏	相模	上野	下野
安房	上總	下總	常陸

右八州に有之御知行所並寺社領共に鐵砲之品帳面に被相記拙者共兩人方へ壹帳宛可被差出候

一 帳面仕立様の儀は貞享四年鐵砲改被仰出候節被指出置候帳面之通奥書等可被相認候

一 先規より百姓に預け置免許の玉なし常おとし鐵砲向後可被致無用候

一 寶永六丑年御觸の以後地頭にて差免候おとし鐵砲獵師鐵砲百姓取上鐵砲増減の員數其譯委細書付可被指出候

但減候分は其鐵砲役方へ遺候哉其子細も可被載候

一 此度の御觸にて江戸十里四方に有之鐵砲取上候分も其鐵砲の品々帳面に書載可被差出候關八州の内に御知行所有之候分有之候哉又は御藏米候哉其段可被仰聞候以上

同年三月

覺

戸十里四方の内に有之武士屋鋪に指置候浪人鐵砲所持仕候は、相改之屋鋪主方え鐵砲取上げ持主の名並鐵砲の品書付

八月中に鐵砲改役え指出之可被仕差圖候此已後鐵砲所持之浪人指置候は、尤其時々書付可被指出候以上  
享保三年戊七月

右御書付戊七月二十五日於御城大岡越前守え松平石見守被相渡候右御書付同役坪内能登守中山出雲守遂相談候處武士方  
計え懸り候事故町觸に及間敷旨に付町觸無之

同年八月六日

覺

- 一 去酉十一月吟味の上浪人醫師並町人所持の鐵砲商賣鐵砲預り鐵砲餘取立候共賣拂候敷外え預替候事有之候は、双方より町年寄え委細可申出事
- 一 去酉十一月餘取上候外町中家持借屋店借地借裏々之者迄何方より鐵砲買取候共又は預り候共是又町年寄え可申出事
- 一 町々に罷在候鐵砲張所々より誂鐵砲有之候節は猶又町年寄え申出差圖の上誂請取張立可申事
- 一 町々にて向後浪人に店貸候は、鐵砲迄所持候敷又は預り鐵砲有之候敷致吟味店貸候已後早速町年寄え相届可申事  
但預り鐵砲不致所持浪人不及相届候

右之通町中不殘可觸知者也

右御觸八月六日樽屋にて寫物町中連判同八日同所納

同七年二月

- 一 關八州御料私領猪鹿鐵砲之儀御拳場拾里四方は爲打申間敷候並鐵砲打初候節鐵砲改え承合證文可差出儀御書付
- 一 關八州在々猪鹿多く出作毛荒候節只今迄は月切にて鐵砲爲打候得共自今よりは不及其儀百姓に預け四季共に爲打可申候尤打初候節鐵砲改え承合證文差出可申候翌年より正月中一度づゝ證文鐵砲改え差出可申候事
- 一 御拳場並江戸拾里四方は只今迄の通鐵砲爲打申間敷候但江戸拾里四方と有之は日本橋より東西南北五里つゝと可相

心得事

但猪鹿多く出耕作荒候は、此方より鐵砲打被遣候間向々え可申出候此旨地頭御代官え可申渡事

- 一 捉飼場は四月朔日より七月晦日迄は無構鐵砲爲打可申候八月朔日より來三月晦日迄は爲打申間敷候  
附 御鷹捉飼場にても不苦所々は御鷹匠頭え承合鐵砲爲打可申候尤其節鐵砲改可相談事

右之趣關八州之内は御料は御代官私領寺社領は其支配頭々より急度可被申渡候  
以上(享保十四年二月にも是と同文の敷令あり)

同年十二月

猪鹿をどし鐵砲願の儀に付御書付

關八州猪鹿多く出候由おとし鐵砲願候去年御拳場の外は捉飼場を始四月朔日より七月晦日まで玉込鐵砲御免にて猪鹿狼等打殺候筈に候其段向々へ相觸候處心得違候所も有之夏中鐵砲打せ被申趣相聞候且又冬にても捉飼場の外は日數二十日の積り是又鐵砲御免候所に今おとし鐵砲願候は去年の御觸書承知不致者と相聞候向後いづれも玉込の筈に候おとし鐵砲と申儀は無之候此段彌無相違様夏中精入猪鹿狼可打散旨在々可被相觸候以上

同十一年九月十一日

町奉行え

過怠鷹番の覺

- 一 隠し鐵砲在の打候村に可申付事
- 一 其村の隠し鐵砲にては無之外より参り候て打候村えも可申付事
- 一 隠し鐵砲有之打は不仕候得共今度改出候村えも可申付事
- 一 隠し鐵砲有之打候ても又は打不申候ても今度舊惡と申上候村々は無用可仕事

野廻り引替覺

一 野廻り預り場の内隠し鐵砲並鐵砲打有之候は、引替可申事  
 但代りの野廻りは今度隠し鐵砲有之近村邊より可申付候  
 右書付九月十一日大久保佐渡守殿より御切紙にて被遣候

同年同月

折上町奉行え

今度武州多摩郡の内御制禁の隠し鐵砲致所持候もの又は打候もの有之段々御詮議の上武州所澤村名主一人同國上川口村名主一人同國分寺村のもの一人遠島被仰付候右悪事有之村々の名主は田畑取上組頭並村中其外掛り合候者迄夫々に過料等申付候若心得違にて唯今迄相届ざる鐵砲致所持候者有之候は御料は御代官私領は地頭より相改取上置候て其段來未二月迄に鐵砲改え相届可申候尤此度有體に申出鐵砲差出候は御答は無之候來未二月迄の内に不指出候て追て相知候は、當人は勿論名主組頭其村中迄御仕置可被仰付候事

右之趣關八州の内御料は御代官私領は頭々支配より急度可申渡候

右御書付午九月十五日松平左近將監殿御渡被成候由北條安房守被渡之

寛保二年四月

（櫻町天皇 八代將軍吉宗）

一 隱鐵砲有之村方咎之事  
 寛保九年極  
 一 隱鐵砲致所持候もの 江戸十里四方並御留場之内遠島  
 右の外關八州 關八州の外所拂  
 中追放

一 同 隱鐵砲打候もの

一 同 隱鐵砲所持の村方他所へ參候て打候村方名主組頭 江戸十里四方御留場之内 重過料 右之外關八州 急度叱

一 同 一 隱鐵砲致所持候者五人組 江戸十里四方並御留場の内 過料

一 同 一 隱鐵砲打候村方向致所持候村方惣百姓 江戸十里四方 輕過料 御留場の内一ヶ年過たいとして鳥番

一 同 一 廻り場之内鐵砲三度以上打候を不存候は、御留場之内 野廻役儀可取放

一 同 一 但野廻り居村に隱鐵砲致所持候者於有之役儀可取放

一 同 一 享保六年極 隱鐵砲打を捕候もの 御褒美 江戸十里四方並御留場之内 銀二十枚

一 同 一 同 訴人仕候もの 同 右同斷銀五枚

延享二年四月

（九代將軍家重）

一 同 一 隱鐵砲玉藥賣候もの御仕置の事

同年九月

一 同 一 隱鐵砲打候ものと馴合鳥獸商賣いたし候もの御仕置の事

一 同 一 可致家業ため隱鐵砲打候ものと馴合鳥獸商賣いたし候もの

寛政元年六月

（孝格天皇 十一代將軍家齊）

一 同 一 關八州之内御制禁之隱鐵砲所持いたし候もの又は打候者有之由相聞不届之至に候享保年中も相觸候通隱鐵砲致所持候もの打候ものは勿論右悪事有之村々名主組頭並村中其外掛合候もの迄夫々重き御答被仰付候事に候彌享保年中相觸候通可守此上隱鐵砲有之趣及承候は、相互に遠吟味早々可訴出候萬一訴延引いたし外より於顯は可爲重科之趣は關八州の内御料は御代官私領者領主地頭え尙又急度可被申渡候

近年御役替或者家督後領分知行之内上知に相成代知被下又者場所替當分御預所被仰付候節鐵砲改役且又獵師鐵砲護渡の

節或者四季打月切鐵砲證文並鐵砲取上獲物屆書等鐵砲改え差出候儀延引に相成候向も有之如何に候鐵砲改帳其外前書之證文屆書等以來無遲滯取調鐵砲改え可被差出候右之趣可被相觸候

第十五款

經費 租調

此編は多くは水害火災の爲めに起る費用に係る而して之に厠るに一二の租調警察を以てす

元祿八年六月東山天皇 五代將軍綱吉

玉川上水道普請入用高割付書

玉川上水道

是者赤坂紀伊國坂大戸樋溜池端右垣戸樋溜池廻り大戸樋修覆並竹簀蓋普請入用

金八百三十兩餘

十四分

金七百七十八兩餘諸大名より出る 旗本

此銀四十八貫四百目餘

但兩替六十二匁二分

一つ分

金五十五兩餘

此銀三貫四百目餘

但兩替右同斷

町方より出る

第十五款 經費 租調

此割付

- 一 百石より九千九百石迄 高百石に付六分五厘四毛
  - 一 一萬石より九萬九千石迄 高百石に付五分二厘三毛
  - 一 十萬石より十九萬九千九百石迄 高百石に付四分一厘八毛
  - 一 二十萬石より二十九萬九千九百石迄 高百石に付三分二厘五毛
  - 一 三十萬石以上 高百石に付二分七厘四毛
- 右入用割合前々より如斯の割合の由道奉行より申來候以上

享保五年十月（中御門天皇  
八代將軍吉宗）

五畿内大川通國役御普請村掛りの後書付拔録

五畿内大川通國役御普請は享保六丑年迄は役高相極高役人足差出御扶持方五人宛被下其餘村賃人足にて仕立不殘御入用罷成候處享保五年荻原源左衛門見分吟味の上相伺翌寅年より御入用高の内十分一は從公儀出九分は五畿内役に割合取立申候

同年（月日不  
分明）

國役普請の儀享保五子年被仰出國分川々金高割合定法左の通

- 一 國役掛りの儀御料私領共に入用にて或は御料或は私領計りにても川々の入用末に記候定の金高に及候へ共國役に割合候事
- 但御料所の内年々春定例にて田畑園普請に堤上置腹付或は出し等損候分無候類此金高は國役に不相加候水損等にて臨時の普請出來末に記候金高に及候時は國役に成候
- 但用水以樋等の普請入用は國役相除候事

一 末に記候國役に可成國々大川の分れにて名目有之候川に國役に不割入各目無之候は、本川に準し國役に可割入事

但私領より願に付國役普請成候時は川々無差別國役に可成近邊の川々入用差加へ可割合候最其年近邊の川々國役割合無之候は、私領の分入用記置何れの年成とも其國々役掛り有之節差加可割入事

一 國役割合候節御料の入用高は十分一公儀御入用に相立其跡を國役に極め私領願にて普請有之候分は村高百石に十兩宛爲差出惣入用高の内右の分引立残り高の内十分一は公儀御入用に相立其残りを國役高に可相極事

但御足高有之面々は御足高の分は高百俵に付金五兩宛可爲差出候是は百石十兩の内五兩は地頭五兩は百姓差出候積りの事故書面の通り候且又國役金掛りの儀組合普請有之川々年々私領より割合出し候村々又は願にて百石に付十兩差出候村方も其差別なく國役割合可相掛事

一 國役に可成川の外小川の分年々御料私領組合普請仕來候分は有來候通に仕國役に不割合事

たとへ鬼怒川小貝川江戸川利根川の四川類普請仕立右入用如例年私領より高割金取立候分は春普請の外たりと云ふとも國役割合可除之是は其入用御料私領無差別割合或は村役に出し來り候品有之年に定例に候條國役割合には除き春普請出來以後御普請有之候へば其入用私領へは不割掛候に付此分國役に可致且又大水損等有之定例の高割無之春普請の無差別も不殘御入用普請に成候時は定例の割合並村高百石に付十兩の割合も不取立惣御入用高の内十分一引之残り候分國役に可割合是は常々組合有之川々は普請區々にては難成川筋故御料私領組合定例の掛り物有之故稀々に相願候私領普請をは違ひ候故右の節不殘御入用普請に成私領より高役金不差出事

一 私領より國役普請願有之節入用掛吟味村高百石十兩の普請は勿論十兩餘にても其地頭分限高に應し自力に可成普請は公儀より御普請無之筈に去子年諸向へ相渡候御書付の趣を以て相極め且又一村の内相給有之入用高百石十兩餘にて一人は地頭分限にて自力に普請成一人は自力難叶候は、右難叶ものに準し其村は國役普請に可致事

是は輕き普請は村役に致し難成分は地頭分限に應し普請致自力に難叶時は國役普請に可成積り並相極有之村方普請

所不相分候に付入用其村々高割に致候故如斯

一村の内相給人有一人は國役普請に願一人は不相願候共其村國役普請に成候時はたとへ願無之相給川通に知行無之候とも村高百石五兩の割可爲出事

私領より願無之場所此方より見分遣し普請致候節は村高百石に付十兩の割合不取立之國役掛り有之節割入可申事  
但是は又其品にもより可申儀に候間此分は其節可及相談事

地頭自力に可成金高分限百石に付十兩の積りたとへ其村の普請入用三十兩入候時地頭分限高三百石にては國役普請に不成候積に候事

此ヶ條分限高五百石に付五兩の積りたとへは其村の普請入用十五兩入候時地頭分限高三百石にては國役普請不成積り享保十四酉年より相極る

一 萬石以上國役普請願候節は其入用分限高にて可成分は願場所の外領分にも普請其外城普請又は田畑損毛の様子家來並見分の考へも承届其品に應し可相回事

但小給所の分は知行の場所せまく候間家來に相尋候に不及見分の者承届其品に應し可相回事  
一 二十萬石以上の領地の内は其領主にて普請致し候故國役割も掛け不申候事

但國つゝきにて無之二十萬石以上の領分離候て有之分は二十萬石以下の私領に準し願有之候へは國役普請に成候依之右はなれ候領知へは其領知の内普請無之候とも國役割合相掛り候事

一 國役高極候事正月より十二月まで國役に可成川々普請帳出候内にて春の國普請又は四川のことく御料私領定例割合有之分を相除殘金高國役に可成高に及候へは翌年の春國役割合候事

但秋の出水にて普請所出來右の内水溜等の普請に御金受取其年仕立候と云ふとも残り普請翌春仕立諸帳差出候へは右水溜の分も翌年の國役へ可割合事

一 國役掛りの事村高百石に金二兩餘掛り候時は兩年可取立事

一 國役金高一萬兩餘に及候時は右掛り候國々の分御藏前入用御傳馬宿六尺給之掛り物可差免候其年、國役兩年に掛り候時は右掛り物兩年可差免事

一 末に記候武州利根川より美濃國郡上川迄の内但書に有之何程以上は何の國をも差加候と有之候へ共右定高に少々の過は外國を不可加其入用高にて百石當りの出銀を考へ外國可差加事

一 國役割合定例の川々の外にても大分の御普請有之時は國役の儀可相回事  
右は前方親相濟候書付を以猶又此度委く相談の上相極候事

同六年三月

兩度火事に逢候者拜借仕返納以後五箇年の内に候は、又候拜借可被仰付御書付

此度被仰出候拜借金の儀五箇年以來兩度以上居所焼失の者共え拜借被仰付翌年より五箇年賦に上納の筈に候此節拜借仕候以後若今年にも居所焼失の者も可有之候其者へも是又拜借可被仰付候右之通兩度迄拜借金被仰付候以後近年の内居所焼失の者も自然には可有之候得へ共間も無之左様に段々拜借金は相調不申事に候乍去兩度拜借有之候者最初の拜借金上納相濟候以後五箇年の内又焼失に候は、其節者拜借可被仰付候尤も借宅は拜借不相調候然共地を借り自分に作事候家二度燒者拜借罷成候筈に候

但遠國役人又は御役屋敷罷在候者本宅燒失仕候共拜借無之筈に候

同七年八月

國役割合川々定

利根川 小貝川

武藏 荒川 總州 鬼怒川

第十五款 經費 租調



烏川

江戸川

神流川

右國役相掛候國々

武藏

下總

常陸

上野

右國々にて高合貳百八拾八萬千石餘

右川々御普請一川にても七川にても金高三千兩迄は國役に掛不申三千兩以上に候へば右四ヶ國役に掛不申三千兩以上に候へば右四ヶ國に掛る但三千五百兩以上は右四ヶ國は安房上總にて高四十八萬四千石餘の分を可差加候

稻荷川

野州 大谷川

竹鼻川

渡良瀬川

右國役相掛候國

下野

此高六拾六萬七千石餘

右川々御普請一川にても四川にても金高二千兩迄は國役に掛不申二千兩以上に候へば下野國へ國役掛る  
但二千五百兩以上は陸奥國高百十萬千石餘を可差加候

駿州

富士川  
安倍川  
千曲川  
厚田川

遠州

大井川  
天龍川

右國役相掛候國々

駿河

遠江

三河

信濃

甲斐郡内領

右國々にて

高合百五拾九萬石

右川々御普請一川にても六川にても金高五千兩迄は國役掛不申五千兩以上は右五ヶ國に割掛る  
但五千五百兩以上は伊勢伊豆にて高三千七萬四千石可差加候

越後

關川

阿賀野川

魚野川

信濃川

保倉川

飯田川

右國役相掛候國

越後

此高八拾萬八千石餘

右川々御普請一川にても六川にても金高二千兩迄は國役掛不申二千兩以上は右國へ掛る  
但二千五百兩以上は出羽國九拾二萬石餘可差加候

木曾川

美濃 長良川

郡上川

國役相掛候國々

美濃

近江

右國々にて

高合百七萬三千石餘

右川々御普請一川にても二川にても二千兩迄は國役掛不申二千兩以上は國役に掛候但二千兩以上より四千兩迄は美濃國へ計割合四千兩餘に及候へば近江を差加候事

但四千五百兩以上は越前國高三拾七萬四千石餘を可差加候

以上

辰五月

右の通り享保十六亥年にて御料私領國役普請有之同十七年國役普請被差止の旨被仰渡候趣左の通

一 今年西國中國邊作毛夥敷虫付候に付て御料は夫食私領へも拜借等被仰付旁以御入用多候條御料私領共に國役普請一兩年は御沙汰及間敷候旨堤川除修覆等の儀及候程は自分にて普請可被申付候左候へば此以後國役金差出に不及候然共只今迄普請出來候入用金の内割殘の分は割合可取立事

子十一月

一 相州酒匂川通享保十一年大御普請有之御入用金國役に割合候様被仰渡候依之未年國役に割合候節酒匂川の儀は御定の川通りて無之故關東筋川々へは最寄違候に駿遠參の川通割合の國へ相模國を差加へ割合候積り御勘定奉行相談の上相極金高の極は無之年々相談の上割合來候

一 享保十七年國役御普請被差止以後も大井川酒匂川御入用は國役割合候積り同年十一月被仰渡

一 同十九寅年八月被仰渡候は酒匂川御普請大事は各例年々可有之候間酒匂川村々當寅年より御年貢金除道御普請御入用に可相渡旨被仰渡候依之大岡越前守御勘定奉行相談の上寅九月二日左の通書付認上る

此間被仰渡候相州足柄郡七十九ヶ村當寅年より御年貢金御金藏に別段除置酒匂川御普請入用に可相渡旨被仰渡奉承知候被仰聞候通にて可然奉存候依之當御年貢金より右の通除置酒匂川御普請入用相渡可申候最大普請有之年は右金

相渡其餘は御遺方金にて相渡可申候最差延可然分は翌年へ相延一ケ年の御入用右除金高より過し不申候様に可仕候

以上

寅八月

右の通に申上置候處酒匂川の儀は只今迄國役に成候川に候間一ケ年の御年貢金にて不足の年は勿論餘り候年の分加候ても不足有之年は右不足金の分は向後ともに國役に致候積り相極可然旨大岡越前守御勘定奉行相談の上不足金の分は向後國役割に入候積り相極る依之酒匂川御普請十分一公儀御入用は出不申候

同八年十二月十日

寅十二月三日相模守殿え周防守左太夫三右衛門立會直に上る同十日相模守殿御直に四人へ御渡國役普請可被仰付旨御口上の趣御書付御渡承付翌十一日良阿彌を以て上る佐渡守殿御扣も同人を以て上る

國役普請の儀評議仕候趣申上候書付

奉伺候國役の儀享保の頃國役に有之候分は不殘來春より國役普請に可仕旨且又以前の通春普請は國役相除組合普請仕立可申旨被仰渡奉長候

寅十二月十日

一	色	周	防	守
細	田	丹	波	守
小	野	左	太	夫
青	山	三	右	衛
御	勘	定	方	門

享保の頃相止候國役普請此節前々の通國役に相成候て可然哉否の儀何れも評議仕右に申上候

一 享保五子午五月被仰出の趣諸國川除等普請の儀一國一圓二十萬石以上の面々迄只今迄の通りたるべく候其以下自普

請に難成打捨置候ては亡所に可成程の儀にて其段領主の力にも難及大破普請に候は、其所御料私領の無差別國役割にて出來從公義御入用被加にて可有之候間自普請難成節は其段可申出旨被仰出國役割始同十七子年迄十三年の間御取替金多き年並無之年等左の通御座候

金高多き年

享保九年

金四萬六千兩

關東川々東海道

信州川々御普請

内三萬七千兩

私領分

同十四子年

關東川々東海道筋

金四萬九千兩

川々御普請

内二萬三千兩

私領分

金高少き年

享保五子年初年

野州大谷川竹鼻川

金二千七百兩

御普請但私領分無之

同十五戌年

關東川々海道筋

金一萬五百兩

川々御普請

内四千六百兩

私領分

同十巳年

國役普請無之

右の通年々御取替金の分國役に割合取立申候割合方は享保九辰年先役共評儀の上極置候趣左の通に御座候

武藏

利根川

烏川

下總

荒川

神流川

小貝川

鬼怒川

江戸川

右川々普請入用一川にても七川にても金高三千兩餘は武藏下總上野常陸國へ割合三千五百兩以上は右四ヶ國の外安房上總を加へ割合申候

野州

稻荷川

竹鼻川

大谷川

渡良瀬川

右川々普請入用一川にても四川にても金高二千餘兩余は下野國へ割合二千五百兩以上は陸奥國を加へ割合申候

駿州

富士川

遠州

大井川

信州

天龍川

右川々普請入用一川にても六川にても金高五千兩餘は駿河遠江信濃甲斐郡内領相模國へ割合五千五百兩以上は右國々へ伊勢伊豆國を加へ割合申候

越後國

保倉川

信濃川

魚野川

飯田川

阿賀野川

右川々普請入用一川にても六川にても金高二千兩餘は越後國へ割合二千五百兩以上は出羽國を加割合申候

濃州

木曾川

郡上川

第十五款 經費 租 調

右川々普請入用一川にても三川にても金高二千兩より四千兩迄は美濃國へ割合四千兩以上は近江國を加へ割合四千五百兩以上は越後國を加へ割合申候右の通割合御料私領組合春普請の分は定式の通御普請仕其外臨時の分右の趣を以國役普請に仕御取替金取立方は高百石金一分二朱位を限り仕割合取立候に付一ヶ年の御取替金其翌年不殘は割合不申段々に取立申候然る處享保十七年西國中國筋作毛虫付御料は夫食私領へも拜借等被仰付候に付一兩年は御沙汰に被及宜敷旨被仰出候以來國役御普請相止御取替金取立殘の分は其以後も割合取立申候

右の通國役相止候以後享保十九寅年同二十卯年川々御普請御入用左の通

金一萬二千兩餘 寅年分

金一萬九千兩餘 卯年分

右の通國役普請の節の金高より減候得共國役御取替金と違右の外は御遣切に御座候得は御取替金の方御益に御座候既に大井川は只今國役割故兩年も夏秋出水兩度の急破並來春御普請共には三千兩餘の御入用に御座候得共實には御入用は十分一故三百兩餘にて外川々へ割合候得は御入用少き方御座候然此度國役割普請に被仰出御取替金少々嵩候迎も御遣切の御入用に引競候へば御益筋に御座候に付國役普請仰出候て可然奉存候乍併數年中絶仕候事に付此節諸國川々一同に國役被仰出候は私領普請願差添ひ見分吟味等屆兼候儀も可有御座候哉に付先役武州利根川荒川神流川烏川下總國江戸川鬼怒川小貝川右七川の分來卯年より國役普請に被仰出其外海道筋五川濃州勢州越後信濃下野國川々の儀は追々被仰出可然哉と奉存候割合方の儀は内郷種類等は只今迄の通御入用御料私領組合又は村役自普請等に仕置川通堤川除普請の儀は定式春の普請は只今迄御料私領組合の高此度國役に仕候積り夏秋出水臨時の無差別金高何千兩以上と申極も不仕割合候方可然奉存候

本文書面の通内郷普請は享保の通に極め置夫共内郷にても格別大造成普請に候歟又は私領より願有之候節吟味の上

事品に寄内郷にても國役へ成るべき近邊の川々入用差出國役割合可仕勿論私領より願の分は享保極の通村高百石拾兩づ、爲差出惣入用高の内右の分引殘高の内拾分一御入用に相立殘の分國役割に加入候積り其外巨細の儀は其節評議の上取扱候積評議仕候

右七川通國役掛候武藏下總上總常陸四ヶ國高合二百八十八萬千石餘の附水戸殿御領分松平陸奥守領分村高を除き殘高百石に付金一分二朱の積割合候得ば取立金高九千四百九十兩餘に御座候右七川通來卯年の御普請並私領普請等有之迎も出水にて格別の破損も無之候は右割合金高程は多分相掛申間敷候萬一出水等有之金高相増候は享保極の通安房上總兩國四十八萬四千九百石餘の高を差加へ割合可申候其上國々高の儀前々より元祿の國郷帳高を用割合仕來申候に付元祿以來新田改出等にて國々の高當時相増候故割合金高より取立上納仕候金高は相増申候五畿内國役は年々取立候故百石當に三拾目餘取立申候年も御座候間右七川通百石當の儀も金一分二朱位より三十目迄の内評議の上見計劃合候ても可然候然る上は先年の通り御取替金多溜候儀は有御座間敷事に候縱少し嵩候ても御遣ひ切の御入用に引競候ては國役の方格別御益の方に御座候間右七川の分來卯定式春御普請より國役割に被仰出候て可然奉存候

以上

寅十二月

寅十二月廿五日大井伊勢守より來る堀田相模守殿御渡被成候御書付寫

大目付へ萬石以上以下共中老支配へ可被相觸候

諸國堤川除或は早損所等普請の儀一圓一圓二十萬石以上の面々は只今迄の通りたるべく候其後下自普請難打捨置候ては亡所に可成程の儀にて其領主の力にも難及大成普請候は其所御料私領の無差別加國役割割合にて出來從公儀御入用被加にて可有之候自普請に難成節は其段可被申出候委細は御勘定奉行へ承合可被申候

但二十萬石以上にても高の内國を隔少分の領地離候場所は二十萬石以下同前たるべく候

卯六月廿四日相模守殿え良阿彌を以て上に處書面の内百石に付一分二朱より三拾目位まで取立可申と有末の文言にて一萬兩餘の金高に相成候はゞ三千兩餘は可差免旨認有之右百石當に候ば一萬兩餘の金高に可相成左候ては如何の旨御尋の由同七月晦日相模守殿御下被成候に付書面掛紙致認置御引替の積同閏七月二日御同人へ安藝守上に同十日相模守殿御直に御下承付翌十一日佐渡守殿御控とも良阿彌を以

國役普請の儀に付申上候書付

伺の通可仕旨被仰渡奉長候

卯閏七月

- 一 色 安 藝 守
- 小 野 左 太 夫
- 青 山 三 右 衛 門
- 古 坂 興 七 郎
- 天 野 助 次 郎
- 御 勘 定 方

去寅十二月被仰出國役普請の儀に付享保年中國役普請の極書之趣評議仕左に申上候

一 國役掛の儀御料私領共の入用にては御料計或は私領計にても川々の入用末に記候定の金高に及候得ば國役割合申候但御料所の内年々春定例にて田畑園普請堤上置腹付或は出し等損候分繕候類此金高は國役に不相加候水損にて臨時の普請出來末に記候金高に及候時は國役に成候但用水以種類等の普請御入用は國役相除候事

此ヶ條本に並但書の内末に記候定の金子に及候へ共國役割に仕候趣御座候へども武州利根川荒川烏川神流川下總國小貝川鬼怒川江戸川右川々一川にても七川にても金高三千兩迄は國役掛り不申三千兩以上に候へ共武州下總常陸上野右四ヶ

國へ國役掛り候旨有之候に付三千兩以下は御入用御普請に致候趣相聞左候へば國役普請被仰出候詮も無之儀に御座候間去冬中國役普請奉伺候節申上候通り金高何十兩と申極も不仕割に積り但關東川々の儀は國役掛高二百八十八萬千石餘の高にて割合高も多く候に付二十目を限り割合可仕候其外の國にて掛高少き候に付三十目を限り割合候様相極候へども金高九千兩餘にて一萬兩には及不申候

一 末に記候國役に可成國々大川の分にては名目有之候川々は國役に不割合名目無之候はゞ本川に准國役に割入候事

但私領より願候に付國役普請に成候時は川々無差別國役に可成近邊の川へ入用差加へ可割合候最其年近邊の川々國役割合無之候はゞ私領の分入用記置何れの年成とも其國々國役掛り有之節差加可割合事

此ヶ條本もの内名目有之候川は國役に不割合名目無之候はゞ國役割合候積御座候へ共一體國役に罷成候川筋枝川の分は名目有之候ても國役に仕候間可然奉存候但書の儀は書面の通相心得候様可仕候

一 國役割合候節御入用高は十分一公儀御入用に相立其跡 國役高極私領願にて普請有之分は村高百石拾兩づゝ爲差出惣入用高の内右の分引之殘高の内十分一は公儀御入用に相立其跡を國役高に可相極事但御足高有之面々は御足高の分は高百俵に付金五兩づゝ、可爲差出候是は百石拾兩の内五兩は地頭五兩は百姓差出候積の事故書面の通に候且又國役金村掛の儀組合有之年々私領より割合出候村々又は願にて百石に付拾兩差出候村方無其差別國役割合可相掛候事

此ヶ條本には此度も書面の通相心得候様可仕候且但書の内御足高有之面々及御高百俵に付金五兩づゝ、爲差出候儀先年も國役普請出金取立候帳面等相糺候處御足高の分取立候割合相見へ不申候本文は私領村高百石に付千兩づゝ、爲差出候積有之但書の趣符合不仕候間御足高へ割合掛候と申儀其節書面に認候迄の儀と相聞へ申候に付右足高の分役金取立候儀は相用ひ不申村高にて百石十兩取立候様可仕候且又國役金村掛の組合普請にて私領より割合出候村々又は願にて百石十兩差出候村方も其無差別國役割へ可相掛旨御座候得共其節評議の上縦も關東川々御普請國役可割合金高一萬兩有之候内利根川荒川筋にて字都宮領古河領關宿領の普請金三千兩有之百石拾兩づゝ、差出候場所へは右國役に割合べく惣

金一萬兩の内三千兩は相除殘七千兩を割掛百石に付十兩づゝ不差出御料私領邑々へは惣金高一萬兩を割合來に此儀は此度も右の通可仕候

一 國役に可成川々の外小川の分年々御料私領組合普請仕來候分は有來の通仕國役は不割合事  
縦は鬼怒川小貝川江戸川利根川四川類普請仕立右入用如例年領領より高割金取立候分養ひ普請の替たりといふと  
國役割相除之是は其入用御料私領無差別割合或は村役に出來候品有之年々定例條國役割割合には除春普請出來以後御普請有之候得共其入用私領へは割不掛候に付此分國役可致且又大水等有之定例の高割無之春普請の無差別御入用御普請に成候時は定例の割合並村高百石に付十兩の割合も不取立惣入用高の内十分一引之殘分國役割割合は常々組合有之川々は普請區々にては難成川筋故郷村私領組合定例掛物有之稀に相觸候私領普請とは違候に付右の節不殘御入用御普請に成私領よりは高役差出不申候  
此ヶ條此度も書面の通相心得候様可仕候

一 私領より國役普請願有之節入用遂吟味村方百石十内の普請は勿論拾兩金にても其地頭分限高に應自力に可成普請從公儀御普請無之筈に候且又一村の内相給有之入用高百拾兩餘にても一人は地頭分限にて自力普請成一人に自力難叶候はゞ右難叶者に准其村は國役普請可致事  
是は輕き普請は村役致し村役に難成分は地頭分限に應じ普請致し自力に難叶時は國役普請に可成積並相給有之村方普請所不相分候に付入用其村へ高割に致候儀に御座候  
此ヶ條の内百石十兩内の普請は勿論十兩餘にも其地頭分限高に應じ自力に可成普請は從公儀御普請無之積御座候へ共御普請有之地所に付候事故分限高に拘候儀にても御座ある間敷哉に付向後は分限高は相止村高百石に付十兩迄の普請は自普請に爲致拾兩餘の分は出役に付可然奉存候  
一ヶ村の内相給有之一人は國役普請相願一人は國役普請不相願候共其村國役普請に成候時は縦願無之相給川通を離

候共高百石十兩の割可爲差出事

但是又其品に寄可申儀に候間此分は其年評議仕候積此ヶ條但書のに此度も書面の通相心得候様可仕候

一 私領より願無之場所此方より見分遺普請致候節は村高百石に付拾兩の割合不取立之國役掛有之年可割合事  
但是又品に寄可申儀に候間此分は其節評議仕候積

此ヶ條但書共に此度も書面の通相心得候様可仕候

一 地頭自力に可成金高分限高百石に付十兩の積たとへば其村の普請入用二拾兩入候時は地頭分限高三百石にては國普請には不相成事

但ヶ條分限高百石に付五兩の積假は其村々普請入用拾五兩入候時地頭分限高三百石にては國役普請に不相成積に享保十四酉年より極る

此ヶ條五ヶ條目に相認候通り向後分限高は相止村高百石に付十兩づゝの積仕候へば此ヶ條の儀は相用申間敷候

一 萬石以上國役普請願候節其入用分限高に可成分願場所の外領分にても普請其外城普請又は田畑損毛の様子家來並見分の者へも承届其品に應じ可相回事

但小給所の分は知行の場所狹候間家來に相尋候に不及見分の者に承届其品に應可相回事

此ヶ條萬石以上以下共見分者差遺品に寄相伺候様可仕候

一 二十萬石以上の領地の内は其領主にて普請致候故國割合も掛り不申候

但國積無之二十萬石以上の領分離候て有之分は二十萬石以下の私領に准し願有之候へば國役普請に成候依之右離に領地は其領地の内普請無之候共國役割割合相掛り候事

此ヶ條此度に書面の通相心得候様可仕候

一 國役高極候事正月より十二月迄國役可成川々御普請清帳出候内にて春の國普請又は四川筋の處御料私領定例の割合有之分を相除殘金高國役に可成高に及候得ば翌年の春國役に割合可申事

但秋の出水にて普請所出來右の内水留等の普請に御金請取其年仕立候といふとも殘普請翌春仕立清帳差出候得ば右水留の分も翌年國役に可割合候

此ヶ條本文御料私領定例割合有之分を相除殘金高國役に可成高に及候得ば翌年の春國役割合可申旨有之候得共此度國役の儀は初ヶ條の通金高何十兩と申極も不仕初ヶ條に申上候通百石當り相極候に付金高翌年に相残り不申候

一 國役掛の事村高百石に金二兩餘掛り候時は兩年に可取立事

此ヶ條初ヶ條に申上候通百石當り相極候に付本文の金高には相成不申候へ共格別の大水等にて金高過候程の儀も御座候得ば其節も奉伺候積

一 國役金高一萬兩餘に及候時は右掛り候國々の分御藏所入用御傳馬宿六尺給米の掛物可差免候其年の國役兩年に掛候時は右掛物兩年可差免候事

此ヶ條も先ヶ條通以來相心得可申候

一 國役割合定例の川の外にても大分の御普請有之時を國役の儀可相伺事

此ヶ條此度も書面の通相心得候様可仕候

武州 利根川 烏川

荒川 神流川

總州 小貝川 江戸川

鬼怒川

右國役掛り候國々

武藏 常陸 下總 上野

右國々にて高合二百八十八萬千石餘

但常陸國の内水戸殿御領地下總國松平陸奥守領分高前々より除來申に付此度も相除割合申候

右川々御普請一川にても七川にても金高三千兩迄は國役掛り不申三千兩以上に候へば右四ヶ國の掛り

但三千五百兩以上は四ヶ國え安房上總にて四十八萬四千石餘の分を可差加候

野州 稻荷川 竹鼻川

大谷川 渡良瀬川

右國役相掛候國

下野

此高六十六萬七千石餘

右川々御普請一川にても四川にても金高二千兩迄は國役に不掛二千兩以上に候へば下野國へ國役に掛候

但二千五百兩以上は陸奥國の内高百十萬千石餘可差加候

駿州 富士川 安倍川

遠州 大井川 天龍川

信州 千曲川 犀川

右同役掛り候國々

駿河 三河 遠江 信濃 甲斐

郡内領

右國々にて高合百五十九萬石餘

右川々御普請一川にても六川にても金高五千兩迄は國役掛り不申五千兩以上は右五ヶ國へ割掛候但五千五百兩以上は伊勢國伊豆國にて三十七萬四千石可差加候  
 本文極書の内酒匂川通相見へ不申候間相糺申候處享保十一年酒匂川通大普請有之御入用金國役割合候様被仰渡候に付翌未年國役割合節酒匂川通の儀御定の川通に無之故關東筋川々へは向寄違候に付駿州遠州參州の川通割合の國へ相模國迄差加割合候積り其節は御勘定奉行相談の上相極金高の極は不仕年々割合來候處同十七年國役普請被差止候節も大井川酒匂川普請御入用は國役割合候積同年十一月被仰渡候處同十九年八月被仰渡候は酒匂川通大普請は格別年に少々宛の御普請は可有之候間酒匂川通村々右寅年御年貢金除置御普請御入用に可相渡旨被仰渡其節も大岡越前守掛り田中休藏支配付越前守御勘定奉行相談の上寅年御年貢より被仰渡候通酒匂川御普請御入用に相渡殘有之年々溜置御普請御入用多節相渡申候大普請有之年は右御金相渡其餘は御遣ひ方金にて相渡可申旨申上候へ共猶又評議の上酒匂川の儀國役に成候川に御座候に付一ヶ年御年貢にて不足の年は勿論除候分加候ても不足有之年は右不足の分國役に致候様申上候處當時迄御年貢金に其不足の儀無御座候に付年々御除金を以相渡國役に割合候儀は無御座候且又大井川國役割の儀享保二十卯年より伊勢伊豆國の外に相模國をも差加割合申候間此度海道筋川々の内へ酒匂川相模川通も差加相模國共に都合八ヶ國にて割合候様可仕奉存候

- 越後國 關川 阿賀野川 魚野川
- 信濃川 保倉川 飯田川

越後國

此高八十萬八千石餘

右川々御普請一川にても六川にても金高二千兩迄は國役掛り不申候二千石以上は右國へ掛り候

但二千五百石以上は出羽國九十二萬石餘可差加候

此ヶ條金高の儀初ヶ條に申上候通金高何千兩と申極も不仕年々割合候様仕置百石當りの儀も初ヶ條極の通割合候様可仕候

- 美濃國 木曾川 郡上川
- 長良川
- 美濃 近江

右國々にて高合百七十三萬石餘

右川々御普請一川にても三川にても金高二千兩迄は國役に不掛二千兩以上國役に成二千兩以上より四千兩迄は美濃國へ計劃合四千兩に及候得ば近江を加へ候事

但四千五百兩以上は越前國高三十七萬四千石餘を可差加候

此ヶ條の儀二千兩より四千兩迄は美濃一國にて割合四千石以上に及候へば近江國を加へ四千五百兩以上は越前國を加割合可申極有之候迄にて享保年中國役普請有之節濃州國役割を一度も無御座候此儀畢竟外國と違ひ前々より仕來にて遠所金(原書文字坤體にて結構素亂讀み得べらざるものなり強て之を讀めば遠所に似たり)と申定式御普請無之御料村方より高百石に付人足二十五人宛の積りにて一人の代り銀一匁づゝ取立一人米五合宛被下候御普請有之村々は百石に人足百人づゝ差出是又一人米五合づゝ被下右の外人足多掛候へ共一人銀一匁づゝの賃人足を遣右賃銀並右無之村方へ右の代り竹木蛇籠作人足賃等右遠所金にて相渡申候出水にて御普請ヶ所多遠所金不足の節は御入用御勘定所へ相伺申候へ共先は遠所金にて取計若遠所金其年遣ひ餘候節は村方へ預置翌年の御普請に遣來大造の御入用無御座候故享保年中國役割合無御座候と相見へ申候且又濃州の儀は寛永十三年より寛永元年兩度に私領村々御普請被仰付候節の割合留書付先年の郡代より差出候帳面御勘定所に有之候右割合



は濃州高六十二萬石餘の内尾張殿御領松平攝津守戸田采女正松平丹波守領分並岡田將監岡田左太郎知行所の儀は多分の  
自普請御座候間國役高相除き残高三十六萬石餘にて割合大分の高掛故未申兩年に普請仕立候由普請有之私領村々は水下  
役と申正人足百石二十人づゝ差出一人に米五合づゝ被下普請無之其上道法遠き村方は遠所役と唱百石に四十五人宛の積  
正人足にては難出故一人の代りを銀一匁差出竹木石繩俵並水下人足の外日雇人足賃等相拂勿論一人に米五合づゝ被下候  
御料村方は御入用御普請に被仰付員役へ入不申候故半高掛百石二十二人半差出是又一人に米五合宛被下右御扶持米都合  
千三百六十石餘被下私領御普請被仰付候由に御座候

右の通外國々と違仕來の國役共有之只今迄外川々の通國役割合は不相掛候處此度割掛にては村々百姓呑込兼騒立騒立  
困窮等申立彼是願等申出候様成儀も可有御座哉近江國越前國の儀は猶以新規の様存是又差支の儀も可有御座哉に付  
濃州の儀は數年仕來の通遠所役水下役等の割合を以元録寶永の如く私領普請計無之御料所定式春普請の外臨時御普請  
並願有之私領村高の普請共に打込一國割合に仕候方可然哉に奉存候然ば右國品々巨細の儀入組候儀共に付當郡代千種  
清右衛門之申渡割合方等委細に爲取調猶又得與評議仕追て奉伺候様可仕候

右享保年中の國役極書の書面何れも評議仕極書ヶ條限此度評議仕候趣朱書相添奉伺候以上

卯六月

同年同月

瓦葺拜借被仰付候御書付

一 去る五日牛込筋失火の節市ヶ谷御門の内番町筋類焼の面々屋敷何も此度普請仕候はゞ居宅長屋等隨分小住居に致し  
輕き瓦葺に申付火除に成候様に可致普請候依之左の書付の通拜借金被仰付候部屋住の者は高の半分の割を以て拜借被  
仰付候  
右の通被仰出候上にて普請難成面々は屋敷差上げ候敷又は相對替可仕者勝手次第候事

一 今度拜借被仰付候上は重て類焼仕候共拜借被仰付間敷候普請の仕方は火事組合の頭取の者申聞も可有之候間作事致  
候時分頭取え可申談候急候儀者無之候間來年中勝手次第作事可仕候拜借金請取候儀者作事取掛り候時分頭取にて相違  
請取可申事

一 役屋敷又者親類共屋敷へ引越罷在候者は普請延引候ても不苦候事

一 屋敷の内を親類等に借し家建させ候者有之候はゞ瓦葺に致させ可申候且又屋敷の内を借候儀親類等にては御直參の  
外不罷成候事

一 父子別屋敷罷在候者は高割の通拜借等被仰付候事

一 類焼の面々の内建家少なくては焼不申る者様子により家建直し不申候て不苦も可有之候間左様の者は普請の儀頭取  
に承合可申候

頭取より石川近江守え可申達事

五拾石より九十石迄 金拾四兩

百石 金二拾兩

二百石 金四拾兩

三百石より六百石迄 金六十兩

七百石より九百石迄 金百兩

千石より二千石迄 金二百兩

三千石より四千石迄 金三百兩

三千石より九千石迄 金四百兩

右上納の儀は十ヶ年賦に返納可仕事

第十五款 經費 租調

右の通向々申渡候拜借の員數は御足高を除き尤何も本高の割の筈に候御金渡候節人別本高を致吟味可被相渡候以上  
同九年十一月

組附の類火事拜借返納の儀に付定書

一 御徒組頭相勤候内類焼拜借仕候もの相果悴部屋住にて父の跡式致相續小普請に入候時は右拜借返納の跡相續候悴方より上納可仕事

一 平御徒相勤候者父子小普請或は父の番添番杯相勤罷在死去のときは悴御徒の方は御暇願父の跡式相續候ものは右拜借返納の儀は御徒の跡え御抱入の者より上納可仕事

是は父子勤にて罷在候故父の跡式相續候時は火事拜借仕候得者其分を跡式相續候ものより致返納候間部屋住にて御徒勤候時の御切米は上候筋に候儘是は返納は不仕筈に候右御徒跡え御抱入のものより返納の筈に付如斯

一 平御徒勤候もの病氣に付其外願申上御出候分火事拜借返納者其跡え御抱入候者より上納可仕事  
右の通組附の類火事拜借返納の定格に相定候事

但諸拜借の分共に同様の儀に御座候

同十年三月

編殺拜借被仰付候御書付

一 四ツ谷御門外邊より牛込御門外邊までの内此度家作致候は板屋茅葺致無用塗屋かきながら葺に仕火事の節火の粉等防のために罷成候様可仕候依之拜借金被仰付候部屋住の者は高半分の割を以て拜借被仰付候父子別屋敷に罷在候者は高割の通拜借可被仰付候

右の通被仰出候上にて普請難成面々は屋敷差上候敷又は相對替可仕者勝手次第に候事

但塗屋かきながら葺に見分計に致置火の粉付安き處相成致方には仕間敷候兎角火除に成候様に可仕候事

右場所の内類焼不致分は作事此度の致方に仕置候は其儘にて差置尤拜借に不及候板屋茅葺等有之候は塗屋かきながら葺に可仕候左候は拜借可被仰付候尤普請の様子により拜借の員數減少可有之候事

一 塗家編殺葺等に仕候場所可成程は瓦葺に仕候儀は勿論に候事

一 右場所の儀御普請奉行え可承合候事

一 今度拜借被仰候上は重て類焼仕候とも拜借は被仰付間敷候普請仕候儀急ぎ候事には無之候間當年中勝手次第作事可仕候拜借金請取候儀は作事取掛候時分頭支配え相達請取可申候

一 役屋敷又者親類共屋敷へ引越罷在候者は普請延引候ても不苦候事

一 屋敷の内を外え借家建させ候者有之候は是又塗家かきながら葺に致させ可申候事

拜借金高割の覺

五千石より九千石まで	金百五十兩
三千石より四千石まで	金百兩
千石より二千石まで	金七十兩
八百石より九百石まで	金五十兩
六百石より七百石まで	金四十兩
三百石より五百石まで	金三十兩
二百	金二十兩
百	金十五兩
八十俵より九十俵まで	金十兩
五十俵より七十俵まで	金七兩

三十俵より四十俵まで 金五兩  
三十俵 以下 金三兩

右上納の儀は拾年賦に返納可仕候  
右の通向々え申渡候拜借金の員數は御足高を餘き何も本高の割の筈に候間御金渡し候節人別に本高を吟味可被相渡候  
以上

同年十一月

新井路並惡水堀敷地代金被下候様書付

御料私領村々田畑上中下米永共拾ヶ年平均一ヶ年出石の元米末を代金に直し相渡可申候但米は當時御帳紙直段を以金に直し一反歩の地代に極可申候

たとへ

拾ヶ年平均

四方一反米五斗取に

此元米五石

此金

但御帳紙直段百  
表に付何程

たとへ

十ヶ年平均

畑方一反永百文

此取永一貫文

右の通敷地田畑丈の地代仕出可申候敷地改帳面有之候間御勘定所へ手代差出右帳而を以村限寫取私領村々は夫々支配御

料の最寄申合村分け極置可申候敷地改帳は追て相渡可申候

同十三年四月

甲府出火の節住宅類焼いたし候勤番の者とも甲州え引越無間も類焼に付拜借被仰付候御書付

去未十二月九日の夜甲府出火の節住宅致焼失候勤番の者共甲州え引越無間も類焼仕候に付拜借金被仰付候

三百石より五百石迄 金三拾兩

二百石但有餘共 金二拾兩

三十 俵 金五兩

拾五俵より二拾俵まで 金三兩

拾五俵 以下 金二兩

右の通拜借被仰付之候上納の儀は甲州え引越候に付被付候拜借金返納相濟候翌年より五ヶ年賦に上納可仕候  
御役料並御扶持方は高割に除之

右の趣甲府勤番支配え申渡候間相談拜借金可渡旨奥野忠兵衛方に可被申越候

同十七年六月

在々御普請高割人足並人足扶持方等の儀評議の上相極候書付

堤川除用水惡水等御普請の儀組合候間動來り候分並組合無之一ヶ村にて仕立候御普請共に右役人足右に付五人御扶持  
方人足五十の外差出候人足は一人に付米一升七合宛の積り代銀を以可相渡候直段の儀は前年十月は相場春普請は其年正  
月の相場秋普請は四月の相場冬普請は七月の相場にて四季共に國限の直段を以可相渡事  
安永三年十月廿七日(後桃園天皇 十代將軍家治)

惡黨もの在于にて捕候節御府内の分は賂用不被下候事

悪黨もの其外盗人等村方にて捕候節奉行所並御代官へ訴出候節御府内の分は路用雜用被下間敷旨彈止少弼殿御内寄合にて御評議極る

寛政二年七月(孝格天皇 十一代將軍家齊)

御年貢諸役不納いたし候もの御答御下知

肥前守掛

丹後國公庄村ふつ御年貢不納吟味

前書丹後國公庄村なつ御年貢諸役不納いたし候一件伺の趣令承知候なつ儀先年御年貢諸役不納いたし其節の支配にて吟味の上全心得違に付以來無滞可相納旨請證文差出置猶又無謂儀申三ヶ年の間御年貢諸役共致不納候段不埒に付田畑取上所拂申付右の外吟味に付呼出候もの共は不埒の筋も無之間一同無構旨申渡右取上候田畑はなつ親類共へ引受作付いたし御年貢諸役償可申段帶相納作徳米を以なつ未進の御年貢諸役償可申段申渡證文取之差出可被申右なつ未進の分は償濟切候は、預置候田畑持主被極候積を以追て御勘定所へ可被相伺候以上

曲 甲 斐 守  
根 肥 前 守

野村權九郎殿

天保七年八月(仁孝天皇 十一代將軍家齊)

御取筒の儀は各主役の事に候間出精いたし候儀は不及申候へ共近年過分取劣候場所も多く有之引方多き場所も所により候ては不熟米と名付安石代納等相伺候類も有之故實免にては彌減多き筋に相見へ候實意に取計候は、左様には有之間敷儀當年の儀は諸國共熟作の趣相聞候檢見の儀は手代共へも得と申合入念候て兩三年取劣候分も埋候程に心懸御取筒可被相伺候左候連百姓の難儀不顧取計候様にとの儀は無之候

右願石代不熟石代被伺間敷段は年々申渡候處近年打續多分石代に相伺候は全改方手拔有之故の事にて當年は右體の儀は有之間敷候へ共仕癖に泥み萬一心得違の願等いたし追て石敷吟味の節夫食引○候なと不明の儀有之候ては不相濟候間實々不熟いたし石代可願村々は一制限取集各直に相改其儘藏詰にいたし早々可被申聞候此方より差圖以前○候分は決て願筋難相立候間兼て村方へも申渡置候様可被致候

檢見の儀村々より立毛内見帳差出各並重立候手代共召連巨細見分の上出來方宜場所にも坪刈いたし候儀には有之べく候へ共坪刈可致と被存候場所にても苗代跡杯と申立相敷候へ共其場所は坪刈相免或は春法の節干減等の儀強て相願候へ共勘辨の上取計等も有之趣如何成事に候内見の儀は村々勝手に合附いたし差出候上へ坪刈は出來形に應し名存寄一盃に可被取計筋に候間其所得と勘辨の上手竿取迄も能々申合當御取筒の儀は格別出精取増候様可被致候畢竟御取筒付の儀は合夕にても大造の増減有之事に候間精々吟味いたし候様可被致候

檢見入用の儀は諸入用の内籠り有之候處各檢見廻村の節不案内手代等召連無益の人馬と召仕木錢諸拂等も不埒にいたし候類も有之甚敷に至ては酒肴杯申付候類も有之由相聞不埒至極の事に候此上右體の儀相聞候は、申上候て急度沙汰候間末々のもの迄能々申付村方難儀に不相成様可被致候

右は御老中方より御沙汰の筋有之申渡候間檢見の儀者々申合格別に致出精村入用相掛御取筒相企候様可被致候

同年(月日不分明)

御年貢米金小物成運上物諸拜借返納等觸期月日限上約不致村方有之不届の事候條向後無遲滞可相納若不納いたし候ものは早々可訴出急度可遂吟味事

是より以下年號月日不分明

公裁秘記抜錄  
隱密風聞糺方並捕方の義御代官手附手代へ奉行所より申渡候節御入用立方左の通  
一手附手代一日一人銀十一匁五分宛

- 一 遺捨雜用一日錢三百文宛
- 但右の外川越飛脚賃小買物代相立候事在方於宿々隣賣女捕方申渡候節御入用立方左の通
- 一 手附手代一人に付御扶持方三人扶持宛
- 但二十五里内は五割増二十五里外は一倍の積捕方罷越候人數の儀は其時々公事方にて相定候人數を以御入用相立可申候事
- 一 抱足輕雇足輕共御扶持方一人半扶持つゝ
- 但二十五里内も五割増二十五里外は一倍の積人數の義は其時々公事方にて相定候人數を以御入用相定雇足輕の分は一  
日雇賃銀二匁宛の積
- 一 本馬駄賃錢
- 但手付手代一人に付一疋の積日二匁宛日數に應て被下候積り
- 一 筆墨紙蠟燭代一日銀五匁宛
- 手代足輕小もの共木錢は御定の通り被下候
- 一 手代御手當一日二匁宛被下候事
- 一 賣女於陣屋元入牢中牢内賄入用の義は其村々より爲差出牢無之場所にて直に江戸表へ差出候節も同斷の事
- 一 右賣女江戸表へ差出候節多人數にて宿駕籠差支候は、新規手輕に申付候積但一挺に付六匁五分
- 一 賣女吟味相濟荒地等有之場所へ被差遣御代官へ引渡候後夫々村々へ相渡候迄江戸宿又は郷宿へ預け中旅籠代御入用  
に相立候事
- 一 預け中藥代小買物代
- 一 賣女道中木錢米代並人名賃御入用相立可申事

- 一 差添罷越候手代一人に付三人扶持の積
- 但二十五里内は五割増二十五里外は一倍の積
- 一 足輕一人に付一人半扶持宛の積
- 但右同斷
- 一 本馬一疋分往返駄賃錢
- 但支配所内は相除其餘往返計の里數御定の一里當を以御入用に相立可申事
- 一 手代足輕小もの共木錢御定の通相立候事
- 一 筆墨紙蠟燭代一日銀五分宛
- 一 渡船川越飛脚賃吟味の上御入用相立候事
- 右の趣を以其時々吟味の上御入用に相立可申事
- 八月
- 私領の者並無宿御代官へ申渡江戸表へ差出候節御入用立方左の通
- 一 御料所の者差出候節は諸入用相立不申候定例に候事
- 但囚人牢内賄の義は御料の者並私領の者共御仕置申渡無之内は其村々より差出御仕置申渡候上にて差出候分は申渡候  
日より牢内賄入用鹽味噌薪其外道中飯米代木綿御入用に相立候事
- 附 御仕置申渡候上にて差出候共御料所の者の分は差添候手代足輕小もの等道中入用は定例の通り相立不申候事
- 御料所の者にも支配違の差出候節は附添候手代足輕小もの共道中諸入用に相立候事
- 一 囚人道中木錢米代
- 一 差添候手代三人扶持宛被下候事

- 但二十五里内は五割増二十五里外は一倍の積手附差添候節は同断
- 一 手代一人に付本馬一疋宛
- 但支配所内は御入用不相立候事
- 一 足輕御扶持方一人に付一人半扶持宛
- 但囚人人數多にて抱足輕計にて引足不申候節は吟味の上履足輕一日銀二匁宛被下候積
- 一 手代足輕小もの共木錢被下候事
- 一 筆墨紙蠟燭代一日銀五分宛御入用相立候事
- 一 目籠代並人足賃
- 但目籠は一挺に付代錢二十目迄人足賃五海道は御定の一里當を以御入用相立其外は最寄の海道筋に准し賃銀相立尤支配内は相除候事
- 一 船賃川越賃
- 但渡場有無吟味の上相立候事
- 一 囚人雜物持送り人足賃
- 但五海道は御定の一里當を以て賃銀相立其外は最寄の海道筋に准し相立尤支配所内は相除候事
- 御料所村々公事出入並盜賊一件其外無宿御代官於陣屋吟味の上入牢申付候節諸入用立方左のケ條丈けは伺相濟可申事に候
- 一 牢扶持鹽味噌薪諸入用牢内衣類藥代等其村々入用に相立私領の分は是又私領より爲差出候事
- 一 無宿は右諸入用吟味の上御入用相立候事
- 一 鹽味噌薪賄代一日銀十五文宛

- 藥代吟味の上御入用立候事
- 綿入代
- 裕代
- 單衣物代
- 鼻紙代
- 手拭一筋代
- 御仕置に付穢多非人の儀は御料所内の分は其役に申付最寄に無之私領穢多非人申付候は、御入用に相立候事
- 但私領にても役に申付來候場所は仕來の通其役に申付候積り
- 一 牢番人無之陣屋の場所は入牢人數に不抱牢一ヶ所にて一晝夜三人つゝ一人に付賃銀一匁宛の積を以御入用相立候事
- 但郡中割に仕來候場所は仕來の通郡中入用の積
- 一 燈油は牢一ヶ所所有明一つ一夜三夕五才定め積を以御入用に相立候事
- 一 足輕の義は入牢人多抱足輕にて引足不申節は吟味の上履足輕一人一日賃銀貳匁宛の積を以御入用に相立候事
- 一 飛脚の義は可成丈け幸便にいたし實々無據節は一里貳拾文宛の積御入用に相立候事
- 一 筆墨紙蠟燭代は吟味口書取調候節計の日數一日銀五分宛御入用に相立候事
- 一 妻子有之無宿の者入牢申妻子非人或は穢多へ預けに相成候節諸入用其外吟味の上御入用相立候事
- 一 但飯米代鹽味噌薪代本文無宿入牢中諸入用立方の振合を以吟味の上御入用相立候事

第十六款

牛馬車荷物及び登輿

此數者は均しく是れ道路を往來するものにて相因縁せるを以て編を同ふす

慶長十六年七月

(後陽成天皇  
二代將軍秀忠)

一 慶長十六年辛亥七月驛宿所々へ制策を建らる其一を記す餘は是に倣へ

定

一 後江戸品川迄上下駄賃荷物一駄四十五貫目に付京錢二十六文同板橋へ三十文たるへき事  
付り 人足賃は半分たるへき事

一 馬番を定荷物を作る事一切不可有之暨停止之事

一 馬早く出次第荷物付へき事

一 馬次の處にて馬遅く出すにおるては右の荷附馬主通之先々駄賃定のことく出すへし日暮とまりに付ては荷主より馬  
かこはたて錢は出すへき事

一 歸馬に荷物つくる荷主馬見入次第たるへし難澁申者於有之は其町の年寄可爲曲事事

一 通荷物の事御上洛の節は何方の馬もあらため次付通すへし常に通馬可相留事

右之條々堅相定之訖若於違背之者は速可處嚴科者也仍如件

慶長十六年七月

板倉伊賀守

米津清左衛門  
大久保石見守

元和八年二月 日 (後水尾天皇  
二代將軍秀忠)

定

- 一 御傳馬駄賃之荷物一駄に付四十貫目事
- 一 江戸より品川迄上下之荷物一駄に付ひた錢三十四文板橋へ三十九文歸馬の駄賃右同然之事
- 附 人足賃は馬の半分たるへき事
- 御定の外増錢取者有之は過錢として家一軒に付ひた錢百文つゝ並其町之年寄五貫文但當人は五十日籠舎たるへき事
- 一 御傳馬駄賃荷物宿中馬持次第たるへき事
- 一 駄賃馬多く入候時其町より在々之馬をもやとひ荷物遅る無之様に風雨之時も可出事
- 右條々於相背は其町々年寄共可爲曲事者也仍如件(寛永二年八月廿七日にも大同小異の數令あり)

寛永元年三月朔日 (三代將軍家光)

國師日記

乗物御免之御印判於御城土井大炊助申渡金地院書付今日御城へ上

被許  
乘輿

是は乗物御免之御印判也元十二月朔日書付御城へ上但朔日於御城大炊殿御申渡故如期同二年八月二十七日

定

一 御傳馬並駄賃之荷物一駄に付き四十貫目事

一 後江戸品川迄上下之荷物一駄に付て錢三十四文板橋へ三十九文歸馬之駄賃右同前事

附 人足賃は馬之半分たるへき事

御定之外増錢とるもの有之は五十日可爲籠舎並其町之年寄過料として五貫文其外家一軒より百文つゝ可出之事

一 夜通し立人馬之儀奉行所より手形於無之者一切不可相立事

附 御傳馬駄賃之荷物馬持次第可出事

一 駄賃をほく入候時は其町より在々所々へやとひ荷物遅く無之様に風雨之時も可出事

右可相守此旨者也仍執達如件

同三年五月廿七日 (後光明天皇  
三代將軍家光)

路次中宿賃御定(條令には御上落之時薪木定之事に作る)

- 一 人に四文
- 一 馬に八文
- 但自分之薪燒候は、人に四文馬に四文馬屋無之自分之薪ならば貳(令條には馬屋無之者屋敷廻馬屋無之とも亭主の薪ならは四文たるへし)
- 一 京にては馬屋無之外につなき自分之薪たき候とも四文たるへし

寛永年間 (年月日  
不分明)

板倉政要控書抜錄

駄賃並雇車作法之事不嫌晝夜駄賃如御定取候て可相立旅人無業内者急用を見懸非法之駄賃取候事仕間出書其身旨不及申其所之時煎等迄曲事に可申付候先右駄賃取候て馬車遺喧嘩口論仕り彼荷物破損候者車馬遺主可相辨又俄之風雨に荷物内損失候者牛馬不可掛其身自然道之難所へ追掛牛馬不痛荷物計破損仕候者其荷物半分馬車遺主可辨濟牛馬痛候者破損之荷



物不及辨濟之沙汰事

正保三年三月六日

御目付衆申渡

頃日あをたむさと乗候様に相見へ候若達御聞候得は如何敷候御番勤候程の者は可爲無用兼て申斷候病人醫者に参り候時乗申候は其役は支配の方へ申斷乗物に乗候様に被申渡候事

承應四年三月廿七日

(後西天皇 此年四月十三日 四代將軍家綱 日明曆と改元)

馬士馬に乗候事此以前より御法度に被仰付候處猥に罷成候由被聞召候に付之口は札之辻より内淺草口は駒形堂より内其外下谷本郷小石川牛込御門市ヶ谷之御門龜町之御門赤坂之御門より内待町は勿論町中に而馬はた馬に乗候事御法度候旨被仰出候間少も違背不仕様町中馬方共に急度可申付候若相背者有之おゐては其町々辻番之もの相改堅のらせ申間敷候此上違背仕候者曲事に可被仰付候事

往行並橋之上に牛馬立置申間敷候荷物付候時は片脇に而さけ可申事

明曆二年八月

往還の者無滞様駄賃馬以下可時煎事

同三年 (月日 不分明)

於在々所々馬盗人有之間不限晝夜不審成もの馬を牽通候に付而は共落着所まで村繼る送届共住所之名主五人組へ申斷其段御訴可申上事

附り 儲成口入なくして馬賣買仕間敷事

萬治二年八月二日

覺

一 御傳馬並駄賃之荷物一駄四十貫目たるへし但四十貫目より重き荷物は秤に掛重き分可除之旨荷主へ申斷へし若除申間敷き申輩あらは幾度も中斷其上にも於承引なくては馬を出すへからさる事

一 人足之荷物一人に付て五貫目を限へし夫より重き荷物は荷主へ是を斷重き分可相除自然除間敷は於申には可爲先條之如く事

附 人足賃は馬之半分たるへき事

一 後江戸品川迄駄賃一駄に付四十二文荷なくして合乗は二十七文板橋へ四十八文荷なしに乗者三十一文千住へ四十六文荷物無之時者三十文歸馬之駄賃同前たるへし但夜通し急に相通輩計は荷なしに乗はいなとも夜之分は一駄之積に駄賃錢可取事

一 人馬之御朱印を傳馬次之取におゐと致拜見御書付之外一疋一人も多く不可出之事

一 人馬之賃御定之外まし錢を取者有之候は、三十日半舍たるへし並其町之年寄爲過料鳥目五貫文其外は家一軒より百文つゝ可出之事

一 御傳馬駄賃之荷物馬を持次第可出之但駄賃馬多入ときは其町より在々所々へ雇荷物遅々無之様に風雨之時も可出之事

一 往還之輩高札之面を相背理不盡成儀申懸へからず又往還之輩に對し於非分申は可爲曲事事  
右條々可相守此旨者也

仍下知如件(寛文元年にも是と同文の教令あり明曆元年八月二日にも是と大同小異の教令あり)

同三年十月

被仰出御定

- 一 今年洪水に付八木高直大豆も其通之申道中駄賃錢御定之外一里十文増くら尻は五文増當年申可取事
- 一 往還之輩次馬次人足近年甚多に付宿々令困窮候間縱雖爲國持人名家中共に一日に次馬二十五疋次人足二十五人不可過之此外之馬入に於ては其日之外跡先へ順々に可遣事
- 附 入馬ともに傳馬次にて御定之如可次之若追通す輩あらは御穿鑿之上人馬不出之町人之年寄可行曲事但二十五疋之外も馬有合候は、其處に勝手次第出之駄賃錢可取之事
- 一 乗物一丁に次人足六人山乗物は四人にて御定之人足賃を取可相送事
- 一 長櫃一掉三十貫目を限へし夫より重き荷物は持はこふへからず人足一人五貫目之前積にと三十貫目は人足六人夫より輕き荷物は貫目にしたかい人數減少すへし此外何れの荷物も可准之事
- 一 一駄荷の重目不可過四十貫目乗掛之荷物五貫目は荷なしに乘駄賃同前たるへし夫より重き荷物は本駄賃錢可取之事
- 右條々可相守之若違背之族於有之者縱雖後日相聞糺科之輕重或死罪或籠舍或爲過料者也如件
- 右之御高札翌四年丑三月二十五日重て被仰出之但去年洪水に付と有之外御文言同前

寛文五年二月

- 一 町中にて籠あんに乘候者有之由に候後前々御法度に候間自今以後者町中は不及申品川千住板橋高井戸此内を限り堅乗り申間敷候若相背乘候もの有之候はば相改擲急度可申付候事
- 一 乗物並籠あんた御赦免無之者旅へ出候とも又は旅より江戸へ罷越候とも品川千住板橋高井戸此内にて堅乘申間敷候是又相背乘候もの有之候は、相改急度可申付事

同十二年七月

- 一 駄賃馬小荷駄馬口付候馬方先年に所々御定置被成候枕より内にと馬乘申間敷旨堅被仰付候處に頃日狼に罷成口付之

覺

馬士共町中にて馬に乘候よし相聞候間町申辻番之ものに申付若相背馬に乘通候口付之馬方有之候は、其馬方相改其馬方之宿へ預置其様子御番所へ可申上候旨被仰付候間辻番之者無油斷相改候様に急度可申付候（寛文十二年四月二十二日にも大同小異の敷合あり）

- |            |            |
|------------|------------|
| 一 兩國橋口     | 一 淺草橋口     |
| 一 同和泉橋口    | 一 筋違橋口     |
| 一 田安御門橋口   | 一 牛込御門橋口   |
| 一 赤坂御門之口   | 一 麻布臺鍋島屋敷辻 |
| 一 西窪土器町四つ辻 | 一 柳原新し橋口   |
| 一 芝金杉橋口    | 一 小石川水道橋口  |
|            | 一 四つ谷御門口   |

右口々を限在郷荷付並駄賃小荷駄馬口付之者乘候て通候は、致下馬夫より内にて一切不可乘旨可申渡事  
 如斯被仰付候趣に承届候間町中駄賃馬持候もの相守可申候口付之者馬に乘通申もの候は、町々辻番之者相改違背不仕様に可申付候爲後日月行事御帳に判形いたし候仍如件  
 延寶三年八月

覺

頃日町中籠に乘候者數多相見へ候段跡々御法度之儀に候間自今己後堅乘申間敷候左町中は不及申張立候とも又者旅より江戸へ歸候共御赦免無之ものは品川千住板橋高井戸此内を限り彌籠に乘申間敷候右之通去年五月相觸候處頃日所々に乗物を出し置候由相聞へ候右兩様共に御法度候間堅無用可仕候若相背者有之は持主籠かきは不及申家主迄急度可申付者也  
 同五年四月

頃日端々駕籠並借乗物相見へ候依之近日御とらへさせ可被成之由に候若左様之者町中に有之候は、家主五人組は不及申名主迄不念に可罷成候間爲心得申知候以上

同七年七月二十九日

覺

一 諸日用の者札なくして日用取候者有之由日用座頭共訴訟申出候前々相觸候處に不用之右の仕合不届成儀に候町々に有之萬口手この者持込日用車力並春輕子背負其外諸日用の者共日用座會所へ参り札を取可申候若向後札なくして日用を取者於有之は日用座の頭とも急度相改捕之兩番所へ召連來候様に申付候事

一 日用候者宿仕候は、日用札の義穿鑿宿可仕候札無之者には一切宿仕間敷事

一 諸日用直段の義兼々定置候外に少も高直に取申間敷候

附り 方々日用請負仕候ものは日用座へ罷越帳に付諸日用の直段承届其通相守札なしの者一切遣ひ申間敷候事

同八年七月十三日

駕籠に乗候儀向後可爲停止之旨今日御書付出候間寫候て違之候各支配之當町續へ別て入念御申付勿論駕籠をも不致所持駕籠かきおも仕間敷由堅可申付候當所之儀に候はは其所之番の者に被申付千住板橋高井戸中川筋之儀は其所々の年寄但頭等一被申付若乗候者於有之は改申來候様に急度可被申付候以上

大五郎 左衛門

高善 左衛門

彦源 兵衛

同九年七月十三日(五代將軍綱吉)

覺

一 町人乗物之儀御免にて只今迄乘來候共向後を無用致し先惣様雀籠に乗へし乍然無據子細有之者は支配方へ可相達候事

一 自今以後五十以上之者駕籠願候共前々之通町年寄方へ可申候尤三十歳より内之者は駕籠たり言共一切乗申間敷候事

一 向後御免被成候駕籠之仕様此度相極候間町年寄共方へ參様子承拵乗可申候勿論御定より外之駕籠拵乘候儀堅無用たるへき事

覺

同年同月同日 (延暦九年九月廿九日天和ト改元ス)

西七月

駕籠之義自今以後堅乘申間敷候尤町中は不及申旅立候共又は旅より江戸へ入候共御赦免無之者は品川千住板橋高井戸此内を限り一切乗申間敷候若相背乗候者有之者其者は勿論駕籠持主並駕籠昇候者急度曲事可申付候間此旨可相守もの也

覺

右之通被仰付候間今日より駕籠乗候義堅無用に候勿論かご持主駕籠荷候者今日より急度相守候様可申觸候並町中辻番之者共に申付駕籠に乗申者有之は相改乗せ申間敷候若致違背候は、曲事可被仰付候間此旨可相心得候以上

天和元年五月

第十六款 牛馬車荷物及び登輿

下馬杭立候所々

- 一 浅草聖天町追分
- 一 小石川傳通院前
- 一 芝新堀有馬中務屋敷前
- 一 田町九丁目中町三辻
- 一 本所横堀北角
- 一 浅草寺町東本願寺前新堀端
- 一 浅草寺町宗源寺前辻
- 一 下谷安藤傳右衛門組屋敷前辻
- 一 谷中清水町坂上
- 一 池之端新道奈須遠江守屋敷北堀端
- 一 本郷追分け壹里塚際
- 一 小石川通り蓮花寺門前町之角
- 一 小日向新川端川を越小日向水道町之行當り
- 一 牛込酒井修理大夫屋敷下行當り
- 一 牛込原町河田窪橋際
- 一 市ヶ谷河田窪横田治郎兵衛土屋忠左衛門屋敷向角
- 一 市ヶ谷松平上野介屋敷はつれ町屋境辻
- 一 四ッ谷町末大久保山城守組屋敷前へ通り候辻

一 下谷子住海道屏風坂除

一 さめる橋

一 青山宿青山因幡守下屋敷向三辻

一 龍土松平太膳大夫屋敷南之角

一 麻布新川堀角

一 宮本大久保加賀守屋敷前之北之橋際

一 浅草川端新橋之際

一 なり平橋際

一 本所横堀北之方三ツ目橋際

一 本所南二ツ目橋際

一 本所古川橋

一 深川高橋際

一 苦川本番所橋際

右口々を限在郷荷付馬並駄賃小荷駄口付之者のり候は、下馬致夫より内にて一切不可の旨堅可被申付事

同年七月

覺

駕籠之儀自今以後堅乘申間敷候尤町中之者不及申旅立候共又は旅より江戸へ入候共御赦免無之者も品川千住板橋高井戸中川此内を限り一切乗申間敷候若相背乗候もの有之は其方は勿論駕籠持主並駕籠かき候者迄急度曲事に可申付候間此旨可相守もの也

同年同日

駕籠注文

- 一 長三尺三寸五分
- 一 横下二尺四寸上一尺八寸五分
- 一 軒之出端一寸五分 但四方共
- 一 臺木幅二寸角金物
- 一 腰之縁六分四方へ折廻 但四方之釣木一本宛入
- 一 腰之籠外より見候高三寸五分 但澁張外皮竹龜甲組
- 一 折返し後七十前一寸五分前後共に御座色
- 一 掛籠前一盃後は小明き五寸みせ裾縁迄に
- 一 同窓長一尺五寸高九寸軒下より一寸五分さけて
- 一 同窓明け 但白すたれ布縁
- 一 前之窓大體すたれ前一盃に仕布縁を取
- 一 屋根澁張角金物
- 一 惣體近江表包
- 一 押縁竹四通四方共
- 一 駕籠之内さわら木地
- 一 脇懸何にても白木
- 一 棒長一丈九太

以上

右之通駕籠之仕様被仰付候間駕籠に乗候者は不及申駕籠拵乗物屋共に爲申聞何方より誂候共仕様違候駕籠一切拵申間敷候旨被仰付候間此旨可申相守候以上

同二年十一月

吉原大門口へ出る高札之寫

何者によらず馬乗物醫陰の外一切無用たるへし

附 鑓長の門内へ堅停止たるへき事

貞享二年三月

道中宿々往還の荷物貫目御定より頃日少々重も有之一駄荷乗掛共にも女馬出之步行持の荷物も重候故人足も増を出し道中宿々致迷惑候に付御大名衆御旗本中へも御定の貫目より重からざる様に被仰渡候依之町中へも相觸彌往還の荷物駄荷乗掛歩行荷物とも御定より重仕間敷候由被仰付候間右の通相守可申由町中不殘可被相觸候以上

元禄元年二月

(東山天皇 四代將軍綱吉)

町中借駕籠之儀前々御法度被仰出候處頃日猥に借駕籠仕候様に相見候間向後借駕籠仕候者有之候は、彌致無用勿論町人乗不申様に急度可申付候自今以後人御出し被成御見を若右之趣相背候者有之候は、御捕被成御仕置にも可被仰付候間左様可相心得旨町中名主呼出有之趣申渡候

同二年十二月

覺

駕籠の儀跡々も相觸候通彌堅く乗申間敷候尤町中は不及申旅立候共又は旅より江戸へ入候共御免無之ものは品川千住板橋高井戸中川北内を限り一切乗申間敷候若相背候もの有は其者は勿論駕籠持主並かなか候者迄急度曲事可申付候間此

旨可相守もの也

同三年十月廿三日

覺

- 一 町中にて牛車大八車共に宰料付候様こと前方相觸候處に頃日宰料付不申候車有之由相聞候向後荷物積候牛車大八車は不及申縦あき車にても宰料付可申候彌生類引殺不申候様に可仕事
  - 一 雇候牛車大八車へ宰料付不申候者穿鑿之上雇候者もやは候ものも急度可申付事
  - 一 宰料付不申候車引通候は、其町之辻番人留置之番所へ可申乗候見のかしに仕間敷事
- 右之通堅可相守之若於相背者急度曲事を可申付もの也

同七年四月

町中借し駕籠の儀前々も法度に申付候處又々頃日猥に借駕籠有之様に相見候間向後彌借駕籠無用可仕候役人を出し可相改候之間若相背候もの有之候は、駕籠昇は不及申駕籠持主若乗候者迄急度可申付候若左様之者有之候は、家主名主迄可爲越度候間随分入念可申付者也(元禄元年十月にも是と大同小異の政令あり)

同八年十一月

町中に而大八車に物を積引候儀大分物を積候故崩れ落けがも有之間向後者何々而も輕積可申候尤積候物崩れ落不申様に可仕候若相背候は、急度可申付者也

同十三年八月

覺

今度町中大八車並借駕籠之分三傳馬町名主共より致極印候筈に被仰付先達相觸候就夫大八車致所持候者日本橋より北之

方は大傳馬町名主馬込勘解由に傳馬町名主宮邊文四郎日本橋より南之方は南傳馬町名主小宮善左衛門右之名主共方へ當日二十九日迄之内羅越候て帳面に付極印請候日限も承合物印請可申候借し駕籠致所持候者共も右同前たるべく候間此旨可相心得候以上

同年同月

- 一 町中大八車之儀向後三傳馬町名主共致極印候様に兩奉行所より被仰渡候就夫爲極印賃大八車壹輛に付一ヶ月銀壹匁つゝ三傳馬所へ出し申筈に候間大八車所持致候者とも此旨可相心得事
  - 一 今度中借駕籠御免之御書付出候に付借駕籠之分も三傳馬町名主共極印致候様に被仰付候依之爲極印賃借駕籠壹挺より一ヶ月に銀三匁宛三傳馬町に出し候筈に候間駕籠持主共此旨可相心得候
- 右兩品之儀申觸候様にと今日御内寄合にて被仰付候姿細三傳馬町各主より可申談候間少も違背有之間敷候以上

同年十一月廿日

覺

- 一 貸駕籠之儀傾城町へ參候者は一切貸申間敷事
  - 一 駕籠に乗候者給敷候間簾を取可申事
  - 一 惣て辻々橋々に駕籠集居申間敷事
- 右之趣可相守候折々人を出し爲改可申候間相背候者有之候は、曲事可申付候以上

同十四年二月七日

覺

武家方大八車極印之儀其沙汰有之候共儘に極印打せ申方無之様に相聞候向後者傳馬町馬込勘解由へ案内申遣日限相定車兩輪極打可申者也

同年三月

借駕籠傳馬町におゐて極印請候儀只今は駕籠主之由にて駕籠持來候得共其者之判形計取之極印いたし遣由依之猥に申聞候自今以後駕籠主並家主判形取之極印致候様にと傳馬町名主共へ申渡候條可得其意候以上

同年六月九日

覺

町方にて今所持候大八車當分遣不申由にて極印不請之又者極印請候ても遣ひ不申由にて賃銀不出之其外車屋に有之賣車極印無之紛敷相聞候條惣て右之類向後傳馬町名主共方より封印を請置入用之節は傳馬町へ可相斷右之趣猥に無之様可相守候以上

同年同月十六日

借駕籠に乗候もの駕籠之内にて笠をかぶり又は羽織などにて面を覆候もの有之由相聞候依之女之外左様の者於有之者見合次第相改曲事に可申付候以上

同十五年五月六日

覺

一 惣て馬に荷附候義其馬之様子に寄荷物之分量を考馬難儀不致候様に軽く附可申候並道中荷附馬定之貫目彌無相違様に念入重荷附申聞敷事  
一 病馬并いたる有之馬随分いたはり左様之馬は遣申聞敷事  
但右之類之馬はこくみかね候ものは最前も相觸候通可訴出候事  
右之趣堅可相守候若違背之族於有之者可爲曲事者也

同年閏八月

覺

借駕籠に乗候者極老并病人又は女小兒此外停止之旨相觸候處不及老年其上鎗など爲持乗候族有之由相聞候間若左様の者乗せ候を見付候は、駕籠昇は不及申家主迄曲事可申付候以上

同十六年十二月

大八車借駕籠出銀三傳馬町へ出之候儀向後差免候間此旨大八車并駕籠持候者共に可觸聞者也

寛永元月八月十一日

覺

町中駕籠昇候者常に日用と紛候間向後駕籠かき候者之分は日用座より札さ取置可申候但札賃者差出し申聞敷候最駕籠昇相止候は

右之札日用座へ可相返候惣て借駕籠旅人は格別其外極老之者病人或は女又者小兒此外一切不可借旨最前相觸候處近年者猥に乗候由相聞不届候條此以後若定外之者乗候は、駕籠昇候もの曲事可申付候  
右之趣相守之名主並家主急度可申付候以上

同年同月十八日

町中駕籠昇候もの常々日用取り紛候間向後駕籠昇候者の分者日用座より札を取置可申候但札賃者差出し中間敷候尤駕籠昇相止候は、右之札日用座へ可相返候惣て借駕籠旅人は格別其外極老の者病人或は女又は小兒此外一切不可借旨最前相觸候處に近來は猥に乗せ候申相聞不届候條此以後若定の外之者乗せ候は、駕籠昇候もの曲事に可申付候  
右之趣相守之名主家主急度可申付候以上

同二年閏四月

借駕籠に乗候もの極老或は病人女小兒此外は停止之旨度々相觸候處館をもたせ候もの又は年若なるもの折病氣様に申なし晴天の節桐油をおろし乗候もの有之候由相聞不届候向後見合次第駕籠かき召捕家主迄越度に可申付候間此旨急度可相觸候以上

同年八月

覺

借駕籠之儀度々相觸候得共今以定之外猥に乘候様に相見不届候最前相觸候通女童醫者出家盲人又者目に見へ候程之病人止行不成極老之者此外は一切乘申間敷候事

右之通町中家持並借駕籠店借之者迄急度相守候様申觸駕籠昇彌申含奉公人町人ともに右之外一切不乗様可申觸候若相背候は、曲事可申付候以上

同三年正月十五日

かし駕籠の儀度々相觸候得共今以猥に乘候様に相聞不届候人を廻し定の外之者を乗候は、駕籠昇召捕家主迄急度越度可申付候間此旨町中可觸知候以上

同四年四月

最前も度々相觸候之處頃日者定の外猥に辻駕籠に乗せ駕籠も多く成候由相聞不届候猶又組之者差出見合次第爲捕可申候若定の外乗候もの有之は其所之家主五人組名主迄可爲越度此旨急度可相觸候以上

同年八月十八日

覺

町中借駕籠昇候者共只今迄日用札不取候故日用取候者紛敷向後借駕籠昇候者共も伊勢町日用座へ參定之通札錢を出し日用札請取可申候若相背もの有之者曲事に可申付候此段可相觸候

同年同月廿九日

一町中牛車大八車に荷物扱積候は不及申明る車にても宰領付候様にと前方も度々相觸候處此日者宰領も附不申車猥に牽候由相聞切々怪我扱も有之不届に候向後前々相觸候通相守宰領附車爲牽可申事

一 此以後宰領附不申車牽通候は、何方にても辻番人留置月番之番所へ可訴之事

一 町中牛車幾疋も牽續往還之障に成候間牛二疋迄者牽續様は又毎度申渡候處猥に成不届に候向後車數牽候共間を明け牽續申間敷候大石大木等手數にて牽候節は只今迄之通番所之訴之其外は牛二疋より外牽續候事可致無用候但祭禮等者可爲格別事

右之通堅可相守於相背者車雇候者も被雇候者も可爲越度此旨町中可相觸もの也

同年十一月廿日

覺

大八車を引通候節宰領付候得とも近頃も車に當り鳩損し候左候得者宰領付候詮無之候之間宰領之者入念候様急度可申付旨御老中被仰出候之間自今以後隨分宰領之もの入念候様に町中急度可相觸候以上

同五年七月廿二日

町中牛車數多引續申間敷候前々も度々相觸候處頃日猥に成牛牽續或は車に荷物積なから狭き小路に牛を休ませ往還之障に成り或は宰領附さる車も有之由相聞不届候向後彌毎度相觸候通車數多牽候共間を明け銘々宰領を附嵩高成荷物又は植木材木等牛車にて牽候とも往還之障り不成様と可致候縱途中にて牛を休ませ候ても其心得致候様に町中急度可觸知候以上

兼保二年五月にも此れと大同小異の敷令あり

同年十二月十六日



荷付馬口付之者一人にて二三疋迄牽歩行候ものも有之申相聞候萬一病馬又は怪我抔も有之候得は不宜候間荷之なき馬たりとも馬一疋に口附一人宛附可申候若相背におゐては口付は不及申馬主荷主共急度可申付候條此旨町中可觸知候以上

同六年三月 (六代將軍家宣)

頃日辻駕籠戸を拵又者すたれをおろし停止の者をも乗せ候様相聞不届の至候人を廻し見合次第駕籠昇召捕家主迄越度可申付候條此旨町中可觸知候以上

同年五月

辻駕籠に乗候もの定之外一切乗申間敷旨度々相觸候得共今以定之外の者乗候様に相聞不届に候前々之通り同心相廻逢吟味相背もの有之は召捕之駕籠昇は不及申急度曲事申付家主も過意可申付候間此旨可觸知候もの也

同年六月

半車數多牽續不申間を明往來之障に不成様可仕旨度々相觸候處此間猥りに成候様相聞候此上相背におひては牛つかひ牛主並家主まで曲事可申付候條此旨町中急度可觸知候以上

同七年二月 (中御門天皇 六代將軍家宣)

借駕籠の儀定の外の者一切爲乗間敷候駕籠に戸並廉おも掛申間敷旨度々相觸候處頃日は戸をたて候駕籠多其上年若ものも駕籠に乗少々相見へ不届に候人を廻し定の外のものを爲乗又者戸をたて候駕籠有之は駕籠昇召捕當人は不及申家主迄越度可申付候間此旨町中不殘可觸知候以上

同年五月

頃日又々借駕籠に戸をたて定の外の者おも猥に乗候駕籠昇相見不届候の間不時に人を廻し召捕當人者不及申家主迄越度可申付候

右之趣町中不殘可觸知もの也

同年十二月

借駕籠之儀定の外の者一切爲乗間敷旨駕籠に戸を立並廉なと掛申間敷旨度々相觸候處頃日定之外のもの猥に爲乗戸を立候駕籠も有之不届に候組のもの相廻し見合次第召捕駕籠昇候兩人は不及申に家主迄越度可申付候間此旨急度町中不殘可觸知候以上

同八年二月十八日

借駕籠に戸並廉かけ申間敷旨度々相觸候處頃日戸を立候駕籠相見へ定之外の者をも同乗候由相聞不届に候人を廻し召捕駕籠昇は不及申家主迄急度可申付候此旨町中可觸知候以上

同年三月廿日 (此年四月廿五日 正徳と改元)

町中辻駕籠何程有之哉町切に駕籠數書付明日中に可年寄へ可差出之候 右之趣町中不殘可觸知候以上

右之通町中相觸駕籠所持之者有之町は駕籠何挺誰店誰所持之段帳面に認相違無之旨奥書名主月行事致印形明日中に樽屋所へ急度可被差出候少も遅々有間敷候尤無之町は其斷月行事可申來候以上

正徳元年五月廿八日

辻駕籠員數之儀寺社方町方御代官所共相究駕籠之棒に焼印申付候處焼印無之辻駕籠並戸を立候駕籠も相見へ其上定之外の者とも乗せ不届の至候人を廻し相改石捕當人者不及申家主迄越度可申付候此旨町中急度可觸知候以上

同年同月

定

一 駄賃並人足荷物次第

御傳馬並駄賃の荷物一駄

重さ四十貫目

歩持の荷物一人

重さ五貫目

長持一丁

重さ三十貫目

但人足一人持重さ五貫目の積三十貫目の荷物は六人して持へし夫より輕き荷物は貫目にしたかひて人數減すへし此外はつれの荷物も是に准へし

乗物一丁

次人足六人

山乗物一丁

次人足四人

一 御朱印傳馬人足の數御書付の外に多く出すへからざる事

一 道中次足次馬の役たとへ國持大名たりと言とも其家中ともに東海道は一日に五十人五十疋に過へからず此外の傳馬常は二十五人二十五疋に限るへし但江戸京大阪の外道中におゐて人馬共に追返すへからざる事

一 御傳馬駄賃の荷物は其町の馬不殘出すへし若駄賃馬多入時は在々所々よりやとひるこひ風雨の節といふとも荷物遅くなる様に相はかるふへき事

一 人馬の賃定の外増錢を取におゐては牢合せしめ其町の間屋年寄は過料として鳥目五貫文宛人馬役のものは家一軒より百文づゝ出すへき事

附 往還の輩理不盡の儀を申かけ又は往還のものに對し非分の事あるへからざる事  
右の條々可相守之若於相背は可爲曲事者也

奉

行

同年八月廿七日

借し駕籠に焼印無之も相見へ其上定之外のもの乗せ間敷旨度々相觸候處近頃又々猥に年若成者をも乗せ候様に相聞候是

又人を廻し相改右之族有之候はゞ急度曲事可申付候間此旨町中可相觸候以上  
同年二月

覺

近年以來途中往還の輩人馬の數も多く荷物長持等の貫目も重く増人馬出候に付宿々助郷等困窮におよひ候故寶永元年五月より宿々に役人を差置諸事相改候様に申付候然るに其後次第に増人馬も多就中助郷の村々却て及困窮候子細等いさゝかに相聞候此度急度御穿鑿も可有之候得共御慈悲を以不被其儀候向後は宿役人共の儀堅く停止候様に被仰出候間可得其意候以上

同年三月

道中筋の儀に付所々奉行所へ相渡候書付

定

一 道中往還の面々雇の人足とも惣て近年不埒の仕方多く就中御用にて往來又は在番の面々より雇の節は主人の權威を以彌不埒いたし或は猥に手代りの人足を取り其人足の方より錢を出させ候て差免或は自分に持候道具等入足に爲持其者は駕籠に乗り賃錢を不相拂又は宿々の者に對し非分の儀とも申掛若宿々の者申旨有之候はゞ種々のあたをなし候旨いさゝかに相聞不届之至に候向後は江戸京大阪にて雇人足請負の者に申渡人足請負候度々人足ともに急度申付右の通不届不仕無様子細有之手替の人足取之又は馬駕籠等に乘候節は御定の賃錢無相違拂之旅籠錢等の儀是に同じく少も非分の儀爲仕間敷候道中宿々へも若不届の族於有之は誰の雇の者なりとも其所に差置道中奉行へ早速可訴旨申渡候間論議の上當人不及申請負人迄可爲曲事矣

一 京大阪駿府三度飛脚近年は貫目重き荷物等有之其上猥に夜中も相通り不埒の儀とも有之由に候向後在番の面々荷物外商等の荷物堅ましへさる様に仕り無様子細有之夜通の飛脚差出候はゞ番頭の證文を以通すへき由相定候此旨所々

の飛脚請負人に申渡晝夜共に人馬賃錢等定の通り無相違相拂候様に可有之候道中宿々に而も改之若貫目重き荷物有之敷又は證文無之夜通しの飛脚相通候は、其所に留置早速道中奉行へ可訴之旨申渡候間詮議の上飛脚幸領は不及申請負迄可爲曲事事

一 江戸京大阪其外國々より町人請負にて往來候御用の諸荷物近年貫目も重く荷數も多く道中人馬大分相立其上御用の儀を申立候て人馬賃錢不足に相拂其外不埒の仕方とも有之由相聞候向後御定の外貫目重く不仕尤荷數貫目に隨ひ相定候人馬賃錢無相違拂之少も非分の儀仕間敷旨其御用奉之面々より念を入被申付相改させ不埒無之様に可申付候道中にも改之若貫目重く候敷又は猥に荷數多く不審の儀も候はしたとへ御用の荷物たりとも繼送らす其所に留置早速道中奉行へ可訴之旨申渡候間詮議の上是又荷物幸領は不及申請負人迄可爲曲事爰  
右の條々其所々奉行所并支配々より請負人共へ急度可被申付もの也

同月同日

定

一 御用にて道中往來之面々御朱印人馬之外添人馬多く相立候由相聞候前々も申達候通無用之添人馬爲出候儀堅可爲停止候御朱印員數之外可入人馬之分は御定之賃錢無相違急度爲相拂可被申事  
一 御用に付て往來之面々或在番諸大名惣て道中往來之輩人馬割役人可有之事に候間御朱印人馬并賃人馬可入程爲相立賃人馬之分は賃錢を無相違相拂候様に人馬割役之もの問屋場に相殘委細遂吟味候様可被申付候共外家來又は雇之者共私に人馬駕籠出候様申掛候共後人之斷無之候は、一切差出間敷由宿々問屋場にて相斷候様可被申付候道中之者共にも右之通可心得旨申渡候事

一 往來之面々其家來并末々雇之通人足近年は主人之權威を以道中にて非分之仕方等有之或は下々可持道具をも人足に爲持其者は馬駕籠に乗或は賃錢をも不拂者共有之よし相聞へ候向後は右之類之不届無之様に雇人足は不及申其請負之

者迄急度申付可被召遣候自今以後不法之族も於有之は道中宿にて改之家來并雇之者たり共其所に留置早速道中奉行へ相訴候様申渡候間其旨可被存候事

一 往來之面々家來并雇之者に至迄駄賃旅籠錢等無相違相拂候様に急度可被申付候旅籠錢等或は不相應に減候て相渡或は無相違請取候申證文爲仕不相拂輩も有之由相聞へ候向後古之通之儀共於有之は是又早速道中奉行へ可申訴之由宿々へ申渡候間可有其心得事

一 諸荷物貫目之儀御定之通無相違様に可被申付候今度荷物貫目相改候場所定り若御定より重き荷物於有之は御用之荷物之申共繼送るへからすさま旨申付其外宿々へ申渡候間其心得可有之候且亦在番之面々京大阪駿府三度飛脚荷物近年は貫目重く嵩成荷物有之夜通しも往來有之由相聞へ候飛脚請負之者其外商人之荷物受さる様に堅被申付尤在番之面々自分荷物も御定之通を以猥に貫目重き荷物差出さる間敷候古來より夜通し飛脚は猥に非相通定に候間向後無據子細にて夜通之飛脚出候は、番頭へ其旨を達番頭之證文を以可被差出候飛脚請負之者共にも此等之趣急度可被申聞候道中にも其心得を以改之若貫目重き荷物有之敷亦是證文無之夜通相通候は、押置早速道中奉行へ可訴之詮議之上飛脚幸領は不及申右請負人迄可爲曲事旨申渡候間可有其心得事

江戸京大阪其外國々より町人請負にて令往來候御用之諸荷物近年は貫目も重く荷數も多く道中人馬大分相立其上御用之儀申立人馬之賃錢不足に相拂其外不埒之仕方共有之由相聞之候向後御定之外貫目重く不仕其荷物數貫目に隨ひ相立候人馬之賃錢無相違拂之少も非分の儀仕間敷旨其御用達之面々より念を入被申付向後右之類之儀無之様に可被申度候道中にも是を改若貫目重候か又は猥に荷數多不審之儀も候は、縦令御用之荷物之申共繼送らす其所に留置早速道中奉行へ可訴之詮議之上荷物幸領は不及申請負人迄可爲曲事旨申渡候間可有其心得事

一 道中宿々之者共不埒之儀有之節は旅人より其所之問屋年寄等二日跡三日跡も招呼又は訴訟之爲に付添參候義も有之由相聞へ候警宿々之者不届之仕方有之共問屋年寄招呼候ては其宿人方々成御用等差支申事に候間向後は問屋年寄等召

呼候儀は不及申訴訟のため付添參候事も爲相止其趣をは道中奉行へ被申達奉行所より詮議之上急度可申付候可有其心得事

右之條々近年道中之宿々御定之外に人馬多く掛其外旅人不法之事共有之宿々は不及申場合村々迄も及困窮候由相訴候に付委細詮議之上を以被仰出候向後書面之趣急度可相守候警組申支配并家來之不法有之候共其番頭役所主人之落度に可罷成候間其旨を可被相心得者也

(延享四年三月にも是と同文の敷合あり)

同六年四月 (六月廿二日) (享保と改元)

馬車を引掛并渡船乗沉人を殺候もの之義に付所觸

車を引き馬を追ひ重き物を持ち候もの共馬車を引掛持ち候物を取落し又者渡し船に人を乗其船かへりて人を殺し候類者あやまちより出來候事にて故ありて殺し候とは同しからず候につきて只今迄は罪科にも行はれず候然に近來此等之類度に及ひ候事は下賤之輩其つゝしみなき故と相見候然はすへて其罪なしともいふへからず自今以後は此等の類縦あやまちより出來候て人を殺し候とも一切に流罪に行はれ事の體によりて猶亦重科にも行はるへき者也  
右之趣支配之所々へ急度可被相觸候

享保三年十月

定

江戸より駄賃并人之賃

品川迄

荷物一駄

乗掛荷人共

九十四文

同斷

から尻一疋

六十一文

附

人足一人

四十七文

千住迄

荷物一駄

乗掛荷人共

九十一文

同斷

から尻馬一疋

六十文

人足一人

四十六文

川口迄

荷物一駄

乗掛荷人共

百四十文

同斷

から尻馬一疋

九十文

人足一人

六十七文

板橋迄

荷物一駄

乗掛荷人共

九十四文

同

から尻馬一疋

六十一文

人足一人

四十七文

第十六款 牛馬車荷物及び並輿

上高井戸迄

荷物一駄

百六十一文

乗掛荷人共

同断

から尻馬一疋

百八文

人足一人

七十九文

下高井戸迄

荷物一駄

百四十九文

乗掛荷人共

同断

から尻馬一疋

百文

人足一人

七十三文

泊々にて木賃錢

主人一人

三十五文

召仕一人

十七文

馬一疋

三十五文

右之通可取之若於相背は可爲曲事者也

奉

行

同七年八月廿一日

覺

牛車大八車地車并荷を付候馬引通候儀往來之障に不罷成候様前々も度々相觸候處頃日は猥に成馬車を引續け剩馬子牛遣

ひ共日をはなし追往來之人をもよけ不申我儘成體に相聞不届に候然る處頃日も神田多町清左衛門召仕之車引とも幼年之者に爲致怪我候畢竟慎み無之故に候怪我人死し候はし死罪に可行候得共死し不申候故右車引六人不殘遠島に被行主人は過料出され候自今車引馬子并に往來我儘仕怪我人等も於有之は其科之依輕重急度可爲曲事候此段町中可觸知者也  
右は八月二十一日喜多村にて寫物町中連判同二十三日同所納

同九年閏四月廿九日

樽屋にて年番名主へ被申渡

前々より辻駕籠戸立候儀無用に可仕旨被仰付候所頃日猥に成不埒之致方に候間自今辻駕籠に一切戸爲立申間敷候尤敷居鴨居爲附申間敷旨被申渡候

同年五月十四日

樽屋藤左衛門殿年番名主へ被申渡

町々辻駕籠戸を立候儀前々より御停止に候所近年別て戸有之辻駕籠多相見候間辻駕籠に出候者共へ申渡戸有之駕籠自今戸をとらせ可申候此已後戸を立候辻駕籠者御改も可有之儀に候間名主支配々へ急度可申付旨被申渡候

同十年正月

覺

辻駕籠戸を立候儀前々より御停止候處近頃戸を立拵候付去辰間四月名主共へ申渡爲相止候然所此間又々猥に戸を立候辻駕籠多相見候間名主支配限遠吟味辻駕籠之敷居鴨居早々取拂可申候旨今廻り之者差出敷居鴨居付候辻駕籠有之者見當次第召捕當人共者勿論名主家主五人組并駕籠借候者ともに急度曲事可申付候條其旨町中可觸知者也  
右者正月十五日御觸町中連判同十七日奈良屋納

同十一年二月廿五日

一 樽屋へ年番名主被呼車にて橋不損様仕方申立願人有之候間障之有無存寄致返答候様被申渡候に付今日年番寄合左之通返答書差出候

牛車大八車にて橋損し不申仕方願人有之候に付障之儀も有之候哉存寄可申上旨被仰渡候間以書付申上候

一 御入用橋井町方私橋し共々年數より早く朽損し申間敷仕方は牛車大八車共に荷物重目分料御定被遊輕く積引掛候はは橋板損候事無數御座候様に願上候此儀者荷物減積候は、其荷物引分け車數多積立可申候は、車往來繁く橋込合往來之障にも罷成可申哉より奉存候橋々痛同前に可有御座候様に奉存候

一 諸荷物輕く積候は、車數多く賃錢も増可申候左候は、諸荷物一割懸自然と諸色高直に罷成可申事奉存候

一 日本橋江戸橋際へ改所相定荷物之積方可致吟味旨願上候此儀者願人共相改可申儀未た未熟に可罷成儀に奉存候尤荷物輕積申候分料御定御獨有之候ても相守可申事に御座候得共左様被仰付候は、諸人難儀に可罷成儀と乍恐奉存候已上

年 番 名 主 共

同年同月同日

一 樽屋へ年番名主被呼仕駕籠元ノ之願人有之候間障之有無致返答候様被申渡候に付今日年番名主寄合左之通り返答書差出候

仕駕籠之儀に付願人御座候に付所中障候儀も無之候哉に御尋に付以書付申上候

一 仕駕籠之儀唯今迄町々駕籠昇共へ駕籠屋より一日借賃賃錢凡一挺に付五十錢又者三十錢程つゝに借來候に付向後仕駕籠本ノ被仰付候は、一挺に付一日之借賃二十錢宛に罷成候は、駕籠昇共勝手にも罷成可申様子願人共申上候得共先年仕駕籠員數御極被遊節町々に罷在候駕籠昇共罷取被仰付候は、其者共只今迄駕籠所持仕又者駕籠屋より一日借仕候も御座候て渡世仕候此度本ノ方不殘取上日々借賃錢差出候は、其日暮之者共妻子共大勢難儀可仕儀に奉存候尤御屋敷方へ御借被成候儀只今迄之通り差支候儀も承およひ不申候

一 願人共申上候者仕駕籠員數四百五十挺に御極被下候様に奉願上候上江戸中駕籠屋共凡二百七十軒餘有之候處駕籠屋

一 軒へ二挺宛駕籠相渡置此賃錢者一切取申間敷旨申上候然者右四百五十挺之外五百四十挺程駕籠數増候様に奉存候

一 疑敷體之もの仕駕籠に乗不申様に願人共吟味可仕旨申上候得共近頃者御吟味に付仕駕籠之分一切戸無御座候上者願人共改にも及申間敷儀に奉存候尤御應方之儀に付御爲之儀も御座候様子願人共申上候得とも何れ其日暮輕きもの共之儀に御座候へ者本ノ被仰付候儀別て難儀可仕様に奉存候間只今迄之通被遊措置被下候様に仕度奉存候已上

同年十一月

仕駕籠之儀に付申上候書付

覺

町中仕駕籠之儀正徳三巳年三百挺に限り焼印いたし相渡其外無印の仕駕籠今以御法度御座候右員數定り候儀は先年奉公人無數候故之儀にて御座候當時奉公人拂底と申にも無御座候間此已後仕駕籠員數無御構無印共勝手次第致渡世候様に申付勿論戸立駕籠之儀は唯今迄之通御法度可申付候

右之通被仰付候は、下々渡世之爲可然奉存候尤相障儀無御座候依之奉伺候以上

大岡越前守  
諏訪美濃守

右伺書午十一月二十六日松平左近將監殿へ上る

伺之通可申付旨被仰渡奉長候以上

午十二月

大岡越前守  
諏訪美濃守

同十三年九月

第十六款 牛馬車荷物及び葦輿

車荷附馬等の儀に付御觸書

覺

牛車大八車地車并荷附馬等引通し候儀往來の障に不成様に前にも度々相觸候處就中去る寅年急度相觸候處近き頃又候猥に相成往來の人をよけ不申我儘に引通候に付頃日も神田佐久間町一丁目久次郎店仁兵衛神田相生町傳右衛門店清太と申者兩人から車を引牛込拂方町通り候節同町四郎兵衛俸新八を申十五歳に成候ものを車を引つけ新八相果候畢竟先年より度々の觸書の趣忘却致候故の儀旁不届至極に付仁兵衛は死罪清六は遠島彼仰出候自今車引馬士等此趣を急度相守可申候此以後往來の者え我儘いたし怪我人等於有之は當人共は重き御仕置被仰付人の召仕にて候は、其主人并家主五人組名主迄夫々に御咎可被仰付候雇ひ候者方にも舍を入候様彌可申付候賑主の儀も候は、可爲越度候此段町中地借り店借り召仕等迄委細可觸知者也

右の趣町中へ相觸候様に町奉行へ申渡候間面々家來下々等にも彌急度可被申付置候以上

同十五年八月十七日

奈良屋にて年番名主へ被申渡

町々辻駕籠を御曲輪之内に差置往來之者を乗候儀堅く無用に可仕候尤外より乗候て昇入往來致候儀は格別御曲輪之内にて駕籠を留置一切乗申間敷候此段駕籠かき共へ急度可申付候

右之通御目付衆より町御奉行所へ御通達有之候間自今相守候様被仰渡候以上

同廿一年正月十八日

櫻町天皇  
八代將軍吉宣 此年四月廿八日  
元文と改元す

大岡越前守様御内寄合へ通町筋名主月行事被召出被仰渡

御用御荷物西傳馬町人足繼送り通候節町々にて人足へ石扱又は口論致掛け候由不届候尤人足之者御權威ケ間敷義も有之候得とも畢竟御用之義に候得者不依何事此方より差控可申義に候自今喧嘩口論致候は、品により其一町へ御掛り可被成

段被仰渡候

元文二年四月六日

松波筑後守御番所御内寄合へ年番名主被召出被仰渡

前々より辻駕籠に戸有之候は御停止候處此間殊外猥に相成候間辻駕籠戸一切無用可致候尤御役人衆御廻し被成候段被仰渡候

同五年二月

覺

辻駕籠戸立候儀并定之外之者乗せ候儀前々より停止候處近き頃猥相成戸を立こさをおろし又は定之外之者も乗候相見へ不届に候名主支配限り遂吟味辻駕籠敷居鴨居取放可申候自今廻り之者差出戸を立候駕籠其外こさ扱おろし或は定之外之者乗候におゐては見當次第召捕當人は勿論家主五人組名主迄急度可申付候條其旨町中可觸知者也

(寛保二年五月にも此れと大同小異の教令あり)

右御觸二月二十二日奈良屋にて寫物町中連判同二十五日同所細

同年四月

辻駕籠戸を立又は躰こさなとかけ御定之外之ものをも乗せ申候儀御停止之旨前々被仰出候處頃日猥に罷成天氣能候得ても躰又は桐油扱かけ申候かご多く相見申候間名主共支配切急度致吟味可申付候

右之通後町御奉行所被仰渡候間町中不申候様支配々へ急度可被申渡候(不申候條ハ御停止ノ事  
ヲ爲ス可ラサル様ノ意)

寛保二年四月六日

往還之荷物理不盡に於差押は過料

同三年八月十一日

惣て道中往來之面々諸荷物定之外重き荷物附送不申筈之處日光道中奥州道中往來之諸荷物定之外重き荷物附送候も有之旨相聞候依之右道中筋へも東海道之通武州千住宿野州宇都宮宿におゐて荷物貫目相改候筈に候間可被得其意候以上  
右之通後町御奉行所被仰渡候間町中不殘入念可被相觸候以上

町年寄

三人

同年十月二日

一 牛車大八車地車并荷附馬等引通候儀往來之障に不罷成様に可申付旨前々より度々相觸候所近頃者猥に成往來之人をもよけ不申我儘に引續候旨不届候向後馬車共數多引續不間を明け前以申付候通大八車地車には宰領を付往來之障に不成様に可致候就中四つ谷通は荷附馬多牽續利町屋前兩頬に繋置候由不届至極候自今馬を休せ候共其馬荷を請候間屋共之馬屋又者内庭へ牽入可申候  
右御觸十月二日樽屋にて寫物町中連判同七日同所納

同年同月

戸を建候辻駕籠前々停止に付去戌三月相觸駕籠之敷居鴨居取放候様に申付候處當分者相用候得共此間は尙又戸を建候駕籠徘徊いたし或者戸無之駕籠には乗候者面躰不見様に桐油を下け其上御廊内杯にも駕籠之者罷左往來之者乗候躰に相見へ不届至極候去五月相觸候通彌駕籠敷居鴨居取放し戸立候事一切仕間敷候右其所之名主致見分敷居鴨居取放候儀相違無

之段名主共方より町年寄へ届書差出し可申候右之趣駕籠致所持稼致候者は勿論駕借し致商賣候者共迄急度可相守候

右之趣於相背者召捕吟味之上當人者勿論家主迄急度可申付候

右之通後町御奉行所被仰渡候間町中不殘可被相觸候以上

一月八日

町年寄 三人

同月十一日

右御觸に付年番名主寄合相談之上左之通申合候

辻駕籠改様之申合

一 敷居鴨居取放可申事

前々より戸立候駕籠御停止之御觸御座候節敷居鴨居埋候迄にて差置候に付戸立候儀相止不申候間此度急度取放せ可申候若之通難取放候は、削取可申候尤向後毎月兩三度宛御改可被成候自今者御届に不及候

一 駕籠昇共へも此度右之通辻駕籠敷居鴨居取放候之間自今戸立候駕籠一切持歩行申間敷旨猶又御銘々御支配限急度可被仰渡候

一 已來辻々に駕籠昇共戸を立候駕籠持居候は、其所より押置其駕籠昇住居御尋之上御同役へ御通達被成御吟味可被成候

右之通敷居鴨居取放候儀來る二十四日迄可被仰渡候且又届候書者來る二十五日迄に奈良屋殿に御出可被成候以上

亥十月十一日

第十六款 牛馬車荷物及び發賣

八七七



以書付申上候

一 辻駕籠戸を立候儀前々より御停止之處近き頃猥に罷成候に付敷居鴨居取放可申旨被仰渡候に付拙者支配辻駕籠借し候者并駕籠致所持駕籠昇渡世仕候者共吟味仕敷居鴨居取放候儀見届申候處私支配之内に戸立候駕籠并敷居鴨居仕付候駕籠一挺も無御座候依之御届申上候以上

亥十月

年

八七八

番

何町

名

主

誰

以書付申上候

一 辻駕籠戸を立候儀前々より御停止之處近頃猥に罷成候に付敷居鴨居取放可申旨被仰渡候に付拙者支配駕籠借し候者并駕籠致所持駕籠昇渡世仕候者吟味仕候所當時左様之者一人も無御座候重て右之類引越參候は、致吟味早速御届可申上候以上

亥十月

何町

名

主

誰

右書付奈良屋へ差出候處右無之書付者左之通認差出候様被申渡候

覺

一 辻駕籠昇候者借し駕籠仕候者拙者支配之町内に一人も無御座候向後他所より右商賣渡世仕候者引越來候は、此度被仰出候御觸之趣并被仰渡候通入念申渡尤毎月名主共相改候儀をも猶又申聞急度爲相守可申候爲御届申上候以上

亥十月

何町

名

主

誰

同十月廿四日

奈良屋にて年番名主へ被申渡

一 辻駕籠改相濟候は、今明日中に相届可申尤四ツ手駕籠廉も取放可申旨被申渡候

延享元年六月

一 樽屋々年番名主被呼辻駕籠形仕替損料八錢宛請取借渡申度旨尤冥加金差上可申儀に付願人有之候間障之有無致返答候様被申渡訴狀被相渡候に付左に有之通相障候儀返答書差出候處辻駕籠之儀戸を立候儀御停止之段度々御觸有之此度御願申上候辻駕籠之儀者戸なしに造立候に付宜様にも被思召候間猶又返答致候様被申渡候に付又々左に有之通返答書差出候

訴狀寫

乍恐以書付御願申上候

一 牛込御細工町家主喜八外二人申上候御當地辻駕籠に罷出候者共毎日高直成損料を出し渡世仕候儀に御座候今度私共

第十六款 牛馬車荷物及び糞糞

八七九

御願申上候は一體駕籠風を引替四ツ手駕籠之様に仕立大さ之儀只今迄持來候辻駕籠之大きに仕候て病人等乗申候ても往來自由に罷成候様に仕損料として一日一挺に付錢八文宛請之只今迄有來申候辻駕籠引替借渡申度奉存候只今迄之損料とは格別下直に罷成候得者辻駕籠に罷出當日を送候輕き者共渡世之足にも相成可申と乍恐奉存候則駕籠之形を繪圖面を以御覽に奉入候尤前々より辻駕籠に戸立候儀堅御停止に御座候間私共御願申上候駕籠者戸なしに拵立燒印を以借渡申度奉願上候

右奉願上候通只今迄有來候辻駕籠之分今度私共拵候燒印之駕籠と引替候様に被仰付被下置候爲冥加一ケ年金三拾兩宛上納可仕候尤冥加金之儀當年駕不殘出來難仕候間初年之儀冥加金御免可被下置候來丑年不殘駕迄々引替可申候間丑年之儀は金貳拾兩宛年より金三拾兩宛永々急度上納可仕候於御當地に何之障に相成候儀少も御座有間敷と乍恐奉存候御吟味之上御慈悲を以被爲御付被下置候は難有奉存候以上

延享元年子五月

牛込御細工町家主

喜

八

同所差添家主

市郎 右衛門

同所同斷喜八店

又

七

御奉行所様

返答書

今度牛込御細工町家主喜八外二人御願申上候者共今迄有來之辻駕籠之形を四ツ手駕籠之様に仕立致燒印一挺に付一日に損料錢八文つゝ請取之一人にて貸渡候儀被仰付候は御忠節可仕旨申上候に付相障候儀も無之哉と御尋に御座候

一 只今迄辻駕籠貸候者より駕かき共に貸渡候損料之儀凡一挺に付一日に二拾文程つゝ貸渡申候尤平生貸借致來存合之者へは日々稼に品により右損料之内にても貸引仕候て相定候儀は無御座候然處に此度願人申上候通にて者損料下直に相見候得共左様に罷成候て者只今迄貸駕籠賣買仕候者一向渡世相止可申哉と奉存候勿論貸駕籠仕候者一人に罷成候は其向寄により貸り請候儀相滿可申候左候ては損料代下直に成候ても稼之勝手に罷成申間敷候其上致燒印借候様に相成候て者駕籠數も相極只今迄より自然と減少仕手狹罷成可申候尤右體之稼仕候者迷惑仕往來之者之ためにも不自由に可罷成哉と奉存候間只今迄之通被差置候様に仕度奉存候以上

子五月

年 番

名

主

返答書

以書付申上候

一 此度牛込御細工町家主喜八外二人御願申上候は只今迄有來之辻駕籠一體風を替損料下直借渡可申段御願申上候に付町中相障候儀御返答書差上候得者辻駕籠之儀戸立候儀御停止之段度々御觸も有之候處今以相背候者も有之候間此度喜八御願申上候辻駕籠之儀は四ツ手に仕戸なしに造立候に付御觸も相立使様に被爲思召候故今一應相障之儀御返答申上候様被仰付辻駕籠吟味仕候儀先年者燒員數御定有之御燒印被成下町々にて辻駕籠持主極り有之候に付輕き者共自由に

借請候儀不罷成家業も無數迷惑仕候處御慈悲を以近來者御燒印御免被成下依之借し駕籠仕候者は不及申稼仕候者共迄難有奉存罷在候無處此度町中之辻駕籠之分右三人之者方にて燒印等仕借出候て者自無と辻駕籠惣代之様に罷成御權威か間敷儀も出來可仕哉と奉存候右駕籠繪圖面相考候所有來候辻駕籠之通に棒四ツ手に仕替候迄にて只今迄之辻駕籠に差て相替儀無之様奉存候尤戸立候儀は去年申嚴密に被仰出候に付名主支配限相改敷居鴨居取放候故戸立候儀者一切無御座候願人申上候者借駕籠商賣之者難儀仕候は、相對を以買取打直し又者駕籠持主方にて打直し候とも燒印請候得者相障儀御座有間敷様に申上候得共燒印仕候は、賃錢取可申候左候得者損料代只今迄より高直に相成候儀も可有御座候勿論所々に借駕取次所多可仕旨申上候得共自然と駕借り訴候儀不勝手に罷成損料下直に成候共稼仕候者渡世之爲にも相成中間敷候間先達て御返答申上候通被差置候様に仕度奉存候以上

子六月十三日

年 番 主 共

同二年五月十一日 (九代將軍家重)

奈良屋にて年番名主へ被申渡

車引共往還にて馬乘通候節車を引掛馬驚し候由不届の儀重て左様の者候は、急度可被仰付旨并馬子共往還に心を附馬の口に付き引通候様可申渡旨能勢肥後守様被仰渡候間組合申繼候様被申渡展

同年十一月十四日

覺

御用にて無之荷物等牛車大八車に積御用の札を立紛敷車を引候由相聞不届に候車を引候者共へ銘々其所の家主名主共より殿敷可申付候若相背御用にて無之車御用之札を立紛敷義も於有之は相改車引は不及申家主五人組名主迄急度可申付候右の通町中不殘可觸知者也

右御觸十一月十四日喜多村にて馬場町中連判同十九日同所納

寛延二年八月九日

奈良屋市右衛門殿町々名主代へ被申渡

- 一 町々に有之候大八車之數相違無之様書出申候事
- 但借車に致候者は勿論借車に不致自分用事計に用候も不殘書出可申候
- 一 町々に有之駄賃馬之類相違無之様書出可申候
- 但借馬に不致自分之用事に計用候分も不殘書出可申候
- 右の通支配切に帳面に認來る十一日迄無遅々差出可申候事
- 一 右之分無之所々は其斷書同日差出可申候事

同三年正月七日

奈良屋市右衛門殿年番名主へ被申渡

牛車大八車引續候儀前々より御停止候處近頃狼に相成候間急度申付候様被申渡候

寛政二年二月 (孝格天皇 十一代將軍家齊)

諸往來荷物御定

- 一 二拾一貫位迄之荷物人乗不申合は輕尻之駄賃にて繼立可申候
- 但宿間にて人乗候ては乗掛の貫目當り候付旅人へ其旨相斷改所外宿々にても乗掛の貫目を輕尻拂に不致ため駄賃帳へ其驛宿役く相認可申事
- 一 宿駕籠并往來人手前駕籠共四ツ手なをり駕籠の人足掛り高是迄改所御定め無之に付以來は二人掛りの極手極引戸之分は山乗物之御定にて四人掛りに相極候事

但引戸を申迄にてあをり駕籠も同様候は、三人にても可然哉見計可取計事

一 宮門跡方堂上方荷物も貫目并人足掛り高御定之通り可成之筈に付宮門跡堂上方へも去年中御達も有之所司代御證文荷物に候共此差別御掟目之通相改若掛今之趣不承知候は、荷物は差留す何れに而も繼立右始末所司代へ右原清左衛門へ申達候事

五 驛便覽拔錄

諸家より問合之節申達候案

一 駄荷一駄

四拾貫目

但駄荷四拾貫目之御定に候處駄荷格別軽く二拾一二貫目位迄之荷物人乗不申分は輕尻之駄賃にて繼立尤右之荷附馬へ宿間にて人乗候ふは乗掛之貫目に當候付其斷貫目改所外宿々にて乗掛の貫目輕尻拂に爲不致駄賃帳へ其記相認可申事

一 輕尻乗下

五貫目

一 此外蒲團中鋪跡付に付一式二三貫目は用捨之事

一 人足一人

五貫目

一 乗掛

二拾貫目

一 此外蒲團中敷跡付に付一式三四貫目は用捨之事

一 長持一棹

三拾貫目

一 但六人持

一 山乗物一挺

但四人掛り

一 乗物一挺

但六人掛り

但宿駕籠并往來之人手前駕籠共四ツ手あをり駕籠は人足二人掛り尤引戸駕籠之分は四人掛り引戸と申迄にてあをり駕籠も同様候は、三人掛りの積見計之事

右之趣に有之候

東海道本坂道之義は先年相達候通り無用に候參掛風雨又は急病等にて渡海難成義出來候は、其節は格別に候尤人馬は不出等候間若被相廻候共手廻り計にて相廻可申候左候得は其段族中より可被相届候右之通可被達候

# 第十七款

## 賞 與

政府の信用を得るには信賞必罰ならざる可らずと雖も徳川氏の世に罪人を捕ふる現行犯と否とに拘らず少し疑ふべき形跡あらは賑ち捕ふとは亦甚しからずや殊に捕違ひは御免被仰付とのこと故へ有罪者の法網を逃るゝことは能はされども罪なくして刑さるゝ者幾許人なるを知らず其賞を行ふも亦然り功なくして賞せらるゝもの或は有之とも功ありて賞せられざる者は決して無之就中火付盜賊を捕へ若くは之を訴ふる者には若干の賞を與ふる法の如きは人民に靠て以て警察の事務を執行するの方便と謂ふへし

寛永十五年九月十二日 (明正天皇 三代將軍家光)

覺

- 一 ばてれんの訴人 銀子貳百枚
- 一 いるまんの訴人 同 百枚
- 一 きりしたんの訴人 同 五十枚

又は三十枚訴人によるへし

右致訴人候輩は縦同宗門たりといふとも宗旨をころひ申出におひては其咎をゆるし御褒美如御書付可被下之旨被仰出候也

同十九年九月

新太郎様御世被仰出之覺披録 備藩典刑

第十七款 賞 與

何村によらず五人組の中にわる心な者有之時同意不仕罷出有姿に申上輩於有之は組相の過怠御免可被成候其上事により御褒美可被下候事

同二十年二月二日

覺

諸國在々所々におゐて新錢鑄候事堅御制禁也若相隠鑄出族有之は可申出縦雖爲間類其科をゆるし御褒美可被下之自然協より訴人出有之は本人は不及申五人組可行死罪并其所のものにて可爲曲事もの也

承應三年二月廿日

(後光明天皇 四代將軍家綱)

覺

吉利支丹宗門累年御制禁たりといへとも御代替に付彌以無斷絶急度相守へきの旨被仰出所自今不審成者有之は可申出此以前者伴天連乃訴人銀百枚いるまん百枚雖被下之自今以後者

一 伴天連の訴人

銀子三百枚

一 いるまんの訴人

銀子二百枚

一 同宿井宗門の訴人

銀子五十枚

又は三十枚品に寄右之通に御褒美として可被下之隠置顯はおゐては急度曲事に可行との也仍如件

(萬治元年一月及び同二年八月二日にも是と大同小異の教令あり)

明曆三年正月二十六日

家に火を付輩並今度火事に付て在々所々より人馬舟にて持來る物を奪取る族在之は申出へしたとひ同類たりとも其科をゆるし御褒美として金子二十枚被下へし萬一以計策惡事を相頼者あらは早速申上へし領知又は金銀米錢何にても其約束の一倍可被下者也

正月二十六日

右御高札日本橋盤橋御成橋芝札の辻淺草橋舛形前淺草駒形下谷本黒門前神田筋違橋札辻糺町辻赤坂四ツ谷十一箇所に御立被成候旨御觸

同年同月

今度大史事に付火付候族か且又以計策惡事相頼の輩於有之は可訴之爲御褒美金二十枚被下之旨江戸中へ高札被立之

萬治三年正月

江戸申所々家に火を付る輩あらは申出へし縦令同類たりといふとも其科をゆるし御褒美大判五十枚被下其上以來あたるなざるやうに可申付金子は町奉行番所に有之間申來者於有之は則可出之ものや

明曆三年二月の教令も殆んど同文なれとも御褒美の金額並きには金三十枚にて二十枚の差あるのみ

寛文八年二月十日

(靈元天皇 四代將軍家綱)

常火消十人を御座の間へ召し去る頃毎度の火事の節精に入て火を消し申由上聞に及び御満悦の由御目見畢て御褒美として金二十枚御小袖三御羽織一宛被下之去る六日御城内へ火移り申候節精を出し消し申に付御歩行業に金三枚宛被下之鈴木修理木原内匠に銀子十枚充被下之

同十二年七月五日

諸國在々所々寺社に至迄當年も新酒不可造冬造も先可爲無用密々造輩ありは訴人に可出急度御褒美可被下遣候者は勿論其五人組庄屋まで御穿鑿の上可被行嚴科寒造の儀は重て可相觸者也

天和二年三月十二日

駿州今泉村五郎右衛門事雖爲土民常々父母に孝行の段及 高聽依之九十石の田地永代被下之旨駿州御代官迄被 仰遣之 同三年正月

九日

定火消花房外記齋藤頼母沼新五郎内藤采女横田甚右衛門御座之間へ被爲 召之御役精々念入相勤の段被 仰出之爲御  
褒美時服三羅紗五間宛被下之與力に銀五枚泉衆同心に金子一兩充被下之旨被 仰渡之

十日

定火消上田彌右衛門三枚右近溝口修理久具忠左衛門岡部數馬御座の間へ被 召出之右同斷與力同心ともに右同斷

貞享二年二月

覺

此日在々所々として猥し鐵砲打候もの有之由相聞候に付高札建之間町中家持は不及申借屋店借地借等迄互に致吟味左様之  
者有之候は、捕候兩番所を召連可參候捕候義難候成は、不取逃様にいたし早々可申出候町方に不限在々に罷在候を存候  
は、申來へし高札之通御褒美可被下之候爲其高札文言を印觸しらせ候若隱置後日に相知候は、本人は不及申其者之宿家  
主五人組迄急度曲事に可申付者也

正徳元年五月

(中御門天皇  
六代將軍家宣)

定 地方所々に御建有之候御高札四枚の寫

きりしたん宗門は累年御制禁たり自然不審成者これあらは申出へし御ほうひとして

ばてれんの訴人

銀五百枚

いるまんの訴人

銀三百枚

立かへり者の訴人

同 斷

同宿並宗門の訴人

銀百枚

右之通下さるへしたとひ同宿宗門の内たりといふとも申出る品により銀五百枚下さるへしかくし置他所よりあらはるゝ

におるては其所の名主並五人組迄一類共に可被行罪科者也

奉

行

享保三年(月日) (八代將軍吉宗)

- 一 頃日猥に鐵砲打候もの有之由相聞え不届の至なり若隱置輩あらは曲事たるへし
- 一 鐵砲打候もの捕候者あらば

銀三百枚

- 一 同類の中より訴人に出者あらは

銀二百枚

- 一 鐵砲打候もの見届其者の名在能申出るものあらは

銀百枚

右之通御褒美可被下之縱同類なりといふとも其科を宥しあたをなささる様に可申付者なり

丑二月

右之通先年被仰出有之事に候處近年端々に於て鐵砲打有之體に候得共捕候義又は申出義も無之不届の至候向後在々にて  
若鐵砲打候もの有之候は、申出へし並御留場の内にて鳥を取り申者捕候歟見出候は、早々可申出急度御褒美可被下置者  
也

享保三年戊七月

先年被仰出候高札に此度御書添の趣關東八箇國に知行有之面々定可被申候尤其所の惣百姓共へ名主讀聞せ承知仕候もの  
儀名主手前より地頭方へ證文取置可申候重て御鳥見並野廻りの者共廻り候節相改可申候以上

享保三年戊七月

右二通の御書付戊七月二十六日久世大和守殿御渡被成候由にて仙石丹波守横田備中守松平石見守連名にて坪内能登守中  
山出雲守大岡越前守三人宛名にて被差越候

(貞享二年二月にも此と大同小異の教令あり)

同年四月

此間御渡被成候御書付何も一覽之上相談仕候處御書面之外別て存寄無御座候併五年以前午年拔荷御吟味之儀に付西國中  
國北國東海道筋浦々々高札相建候間其趣に準したとひ同類たりといふとも訴人に出におゐては其科をゆるし放荷申合之  
品に應浦高札之通を以急度御褒美被下之且又あたをなさざる様に可被仰付候并其所之名主五人組互に常々吟味可仕候若  
隠置候は、其科本人同前たるへき旨之御文言御書入被成候て者如何御座あるへきや  
右午年相建候浦高札之寫指上申候以上

評定一座  
長崎奉行  
京都町奉行

同四年正月十日

覺

一 向後火を付候者數人にて捕候共御褒美員數者銀二十枚可被下候事

一 火を付候者多く捕候者候は、其節御褒美之員數可有御吟味事

右御書出之趣相心得名主支配切急度爲申聞置火を附候者を見附候は、押不置早速御番所え可申出候事

同五年八月

鐵砲打捕候ものえ御褒美被下候儀に付被仰渡之留

御老中列座にて三奉行御勘定吟味役え被申渡候者鐵砲打候もの之儀に付御褒美之儀只今迄之高札之趣不相應に被思召候  
間右高札御引せ被成候殊に此度鐵砲打捕へ候者御鷹方之同心見出之其旨百姓え致差圖捕せ候事にて其村々百姓召捕候に  
て者無之故高札趣には不當候乍去此度御褒美不被下候ては如何に候間高札之通銀三百枚可被下候御鷹方同心者百姓同事  
に候間此度出會候て召捕候百姓其一同に配分可仕候其上にて高札改候様に可被仰付候右之通にて相障候事者有之間敷候  
哉之旨井上河内守被申聞候何も御尤に奉存候相障儀無御座候間御請に申上候事

(享保七年七月朔日にも是と大同小異の文あり)

同六年二月

覺

唯今迄鐵砲打捕出候者無之候處今度於上總國武射郡蓮沼村鐵砲打召捕候初て之儀故御定之通銀三百枚被下之候自今者員  
數を定被下候儀者有之間敷候依之所々高札書改候彌無油斷鐵砲打候者有之候は、捕可申候御褒美可被下候員數者其時々  
品に寄輕重可有之候以上

定

在々にて若鐵砲打候者有之候は、申出へし井御留場之内にて鳥を取申者捕候敷見出し候は、早々申出へし急度御褒美可  
被下置もの也

享保六年二月

右御觸二月十四日奈良屋にて寫物町中連判同十五日同所納

同年十二月

鐵砲打捕候褒美の事

覺



一 鐵炮打捕候者御褒美一人にても何人にても人數無差別銀二十枚可被下候  
一 同訴人いたし候者御褒美銀五枚可被下候

以上

同七年十月

日本橋御高札場の南の方に享保七年以來毎年十月朔日より翌三月晦日迄御建有之候屬託御高札二枚の寫  
但享保七年御觸有之

覺

一 火を付る者召捕町奉行所え可來事  
一 火を付る者のあり所をしらは早速可訴出事  
右の品々有之は御ほうひとして此銀子三十枚下さるへしたとひ同類たりといふとも其科をゆるし此御ほうび下さるへし  
あやしきものは不慥候とも召連來へし若火を付る者を見のかし聞のかしに仕追て相知れ候は、其科重かるへき者也

十月

同八年十一月七日

今度芝田町名主庄次郎怪敷者之由にて無宿おぢい五兵衛と申もの捕組合名主共一同に召連來候に付今吟味候處火付に無  
紛候故爲御褒美銀三十枚庄次郎え被下置候右五兵衛儀所々え附火いたし就中先月二十四日愛宕下より出火之節増上寺前  
豆腐屋え附火致し夫より神明前橋際角之町屋えも火を附又候新網町春日社より四五町手前看屋えも附火いたし右何れも  
火元之火と一所に成及大火候段五兵衛致白狀候右之通に候間此以後若出火有之者風筋之町々者別て無油斷心掛火を附候  
者は勿論怪敷體之ものに候は、何れ召捕可參候尤捕そこない之分は不苦候間此旨町々名主家主五人組共急度相心得借屋  
店借裏々之者迄兼て無油斷心掛候様可申渡候

右之通町中可觸知者也

十一月

右者十一月九日樽屋にて寫物町中連判同十一月同所納

同九年十二月十六日

樽屋にて年番名主え被申渡

去る十三日十四日大風之節町々火之見番并火消支度無油斷所も有之又火之見番上げ置候得共火消支度無之火消拵置候て  
も火之見番無之町々有之右兩様共油斷之町々も有之段委細に御上え相知候依之火之見番火消兩様共油斷無之町々えは褒  
美致候様と被 御出町奉行所にて御褒美有之候右油斷之町々御呼出御呵も可有之處左候は、何れ面目を失ひ候儀と此度  
者其分に被指置候儀に候間油斷不仕候様組合中申通町々にも可申渡旨被申渡候

元文二年十一月(櫻町天皇 八代將軍吉宗)

火を附る者捕來り訴人に出候もの御褒美銀三十枚并捕候同前之ものは十枚被下之

寛政三年三月(孝格天皇 十一代將軍家齊)

道中筋にて揺りケ間敷儀等いたし候者捕方并御褒美等之御觸

近來町在道中筋にて御家人或は御役人之家來杯と申偽彼是權威を張代錢宿賃等不相拂ゆすりケ間敷儀いたし候もの徘徊  
いたし候由相聞不届之事に候以來右體之ものは押置早々可訴出候吟味之上偽り之ものに候は、御褒美可被下候若訴出さ  
るにおわて者可爲越度もの也

享保三年十二月廿七日

寄特之もの御褒美之儀に付伺濟

亥十二月二十七日采女正殿え尾島鍋三郎を以若出翌子二月三日承付候様被仰渡承付返上

第十七款 賞

與

書面之趣格別寄特筋年來相達郡中手本にも相成近郷迄も及沙汰候事にて實々之取計にも相當候類者御褒美之多少に不抱相伺之其外米金等差出施候敷寄村之志に候得共年來之取計にも無之者御褒美之多少によらず私共手限取計其段御届仕尤一時之儀にて非常之節に取計之事に相心得可申旨被仰渡奉承知候  
右者御料所村々寄特之もの御褒美之儀是迄相伺來候内手限に取計候ても可然寄特筋之分は不及伺御褒美被下之其段御届いたし候積を以右取計方目當評議いたし申上候様御沙汰有之相伺候處此節前書之趣に被仰渡候に附爲御心得承付寫相廻し申候

二月

和泉守 飛騨守 主膳正

左近將監殿  
兵庫頭殿

文政十二年十二月 (仁孝天皇 十一代將軍家齊)

關東在々御取締出役捕物に寄御褒美の事

山田茂左衛門殿

山本 大膳殿

關東在々爲取締差出候出役の者廻村先おゐて附火いたし候ものは勿論主殺親殺贖金銀拵候罪科の者等召捕差出吟味の上無相違におゐては以來御褒美可被下旨今般伺の上大加賀守殿被仰渡候間心得として申達候尤も在方組合定候に付今日國分にて兩三人つ、申合廻村致候事に付連名を以て囚人差出候儀も有之候得共實に申合召捕候分は格別一人立差押候節は

其譯相認め可差出旨出役のもの共え申渡可被置候

天保七年正月

村役人共之内に

公務を重し小前を憐村入用を減正直に精勤いたし小前之もの共に自然と敬を請候もの有之は早々小前之ものより可訴出事  
附り 私欲不正之取計いたし小前難遊に相成もの早々可訴出事

享保六年正月

銀拾枚被下之

岡田清太夫御代官所

奥洲六平村

其身一代帯刀

名主

苗字名乗可申候

庄左衛門

但苗字は子孫迄相續可申候

右名主常々實體にて公儀を重し御年貢收納精出し百姓之爲に成候事共も有之寄特者の由近郷までも沙汰候に付書面之通被仰付之

略文外三人

右之通今度被仰付候間於支配所勝れて存行成者又者格別に正直にて諸人之爲に成相應に人之見次ともいたし悪敷者には異見等を加へ近邊之もの迄風俗直り候段及沙汰候程之者も有之候者途吟味可被申開候子細承届候上相應に御褒美被下候事可有之候條可被得其意候以上

右之通御書付出候間寫被得其意留より肥後守方へ可被相返候以上

正月

駒木根肥後守  
箕 播摩守  
大久保下野守

伊 勢 守  
水野伯耆守

元治元年九月十二日

(孝明天皇十四代將軍家茂)

井卯重磨宅え昨夜長應寺におゐて亂妨人有之候に付同所え相詰候重磨家來共格加骨折候段一段之事に候舉遣候様井伊重磨え家來呼可達事

年號不分明公裁秘記抜錄

考行者其外行跡宜ものは御褒美可被下旨御書付之事

孝行之者

高持

但無高に候共下人を召仕候程之ものは高持同様之事

銀拾枚

刀帶苗字を名乗らせ可申事

孝行もの

無高

銀貳拾枚

獨身同様之もの

右之通御褒美可被下之脇指免之儀は高持之もの唯今迄名主同様程之者には刀苗字を宅し可申候只今まで脇指帶候事不成程之ものには脇差計差免可申候尤刀脇指は一代苗字は子孫迄名乗らせ可申事高持之内にも厄介等多候もの拵は身上取續兼候子細を承届吟味之上其持高より年貢差免可申候事正直にして行跡宜諸人之爲にも成候もの右同斷之事百姓町人右同様候但町人は刀指免義は無格別正直に農業無懈怠諸人之爲にも成り相應に人之見次を致し悪きものには異見等も加へ近邊之者迄も風俗直候段他領迄も及沙汰候程之者於有之は遂吟味可被申聞候子細承届候上右書付之通被仰付にて可有

之候條其趣可被存候以上

## 第十八款

### 建築

政府の人民建築の方法に關涉するは祝融の災を豫防するに在り然るに徳川氏の建築警察に於るは止となれのみならず別に奢美を禁じ上下各々分限を守らしむるの意あり

寛永年間(年月日不明) (後水尾天皇明正天皇三代將軍家光)

### 板倉政要提書抜録

洛中寺社次に町屋敷無御掟て新儀新儀ハ新規の普通ならんに一所も不可相建並町中屋敷境目之儀出入口論於在之は其町之老若出合見届令異見可相濟其上不濟は公儀に可申上其時直に見届屋敷横の分面之間敷程裏之横の間敷打定兩脇之長さ之間敷は町直可相定者入口形雲形成之屋敷出入申分於在之者新古之體見計可申付也又年貢在之屋敷を不帳に間敷可在之間敷は共に再性檢地申付帳面之餘分年貢加増に沙汰可相定若又年貢を不領加増地食輩可在之間境目之新古見計ひ又は隣家隣町之者に無依帖可申上之旨申聞せ各爲致見分正路に可申付也非分之族可處嚴科也邊上所々之由畠屋敷境目も如斯儀に可相定事

附 遊女町家之事定所之外一所も家立間敷也自余之町に令混亂醜聞如斯相定候

明曆二年三月初日(後西天皇四代將軍家綱)

覺

一 長屋塀下石垣之儀雖爲大身向後者野つら石垣に可被致之但有來分は其儘差置之重て築直候時連々野つら石垣に可被

仕事

- 一 長屋扉腰板之儀跡々は結構に候向後者雖爲大身何木にても勝手次第輕可被致之事
- 一 壹萬石以下之面々は縦雖爲番頭座敷者に間半梁に過べからず但臺所は三間梁不苦候有來家を作り直候時は有之間敷を用へき事

以上

同三年三月

町中作事仕候砌地形築候とも兩類高下無之様に申合並能地形築可申候並海道地形隣町のうつり能やうに築可申候むさと我まゝに築申間敷事

萬治元年十月

覺

町中河岸端にぬりたれ穴藏御赦免無之處には堅く作り申間敷若ぬりたれ穴藏作置候は、早々てほち可申候縱令御赦免にてぬりたれ穴藏作り候町も軒口の高き三尺四尺より高さ藏者こほち作り直し可申事

同年十月十五日

覺

河岸端穴藏ぬりたれ唯今迄作り來候分は來春迄其儘差置可申候事跡々御赦免の處者唯今仕候とも軒の高さ三尺五寸四尺迄立可申候御赦免無之處は無用に御座候以上

町年寄三人

同二年五月十八日

覺

町中層小屋懸直し候義仕間敷候崩候て堪忍難成候は、本長屋に作事可仕候兩年御金拜領致候間何卒作事仕候様相心得可申候

右之通町中念を入相觸急度相守可申候以上

町年寄三人

同三年正月十七日

覺

此度類火に逢候町中の若ども小屋懸け仕候は、屋根塗屋芝屋茅等かきから葺に可仕候茅葺わら葺並こけら葺そき板葺に致候事無用に可仕候並當分右之家根作りに不成者はかり等葺わら葺に作可申候尤以來迄差置候様作申間敷候事

同年二月廿三日

今度焼申候跡にわらぶきかやぶき有之候たとへ當分の事にも土にてぬり可申候こけらぶきはかきがらにても芝にても土にても早々勝手次第に可致事

同年同月同日

今度御赦免被成候薪禰木賣候河岸ぬりたれの藏貳間はりに長さ貳間三尺軒の高さ六尺より大きに作り申間敷候尤河岸えの道九尺又は七八尺程あげ置可申候少も相背申間敷候事

同年同月廿五日

一 町中かやぶきわらぶきの家早々土にて屋根をぬり可申事  
一 當春やけ候町は茅葺は不及申こけらぶきも土にてぬり可申候勿論かきがらぶきにても芝にても勝手次第にて早々葺可申候

同年三月朔日

覺

先日も兩度迄相觸候處町中茅葺藁葺之小屋干今塗不申候手寄次第御堀之土を取候て早々塗可申候重て於遲候には穿鑿の上急度可申付者也

同年同月十一日

覺

町中わらなき茅葺の小屋塗候様度々申付候處未だ塗不申候處有之候當月二十日切にわら葺茅葺土にて塗可申候若相背二十日過にて塗不申候は、共小屋を引てわし其上家屋鋪公儀え取上げ可申者也

同四年三月十六日(此年四月廿五日)

(寛文と改元)

鎌倉町河岸より虎之御門迄之間之土藏來る十日切崩可申候若於致遅々は急度可被仰付候事

寛文四年六月廿二日(靈元天皇)

(四代將軍家綱)

覺

町中屋根屋共大風吹候砌又は儀成義有之屋根葺大勢入用之節屋根屋共申合手間賃高直に取候由被聞召候自今以後一身之申合仕手間賃高直に取者候は可爲曲事附屋根葺候儀請取に仕其屋根葺かけ置余人之屋根屋共葺不申様申合候由若己來左様之出入出來申候は、葺掛候屋根屋共籠舍可申付候事

同六年八月廿三日

備前少將光政寺院擴斥の後書出拔錄

國中の山林を荒し材木薪等不自由の間富たる百姓町人猥りに作事普等すべからず堂寺を新敷不可建直破損せば其儘修理を加へ或はたゝみてないさくすべき事

同八年二月

一 寺社普請之事

寺院普請之儀往古より有來諸堂燒亡又者及大破に再建いたし候共梁間三間以上之分者寛文八年御書付以後梁間三間より以上に者不相成事に候且庇等は其建方に應し聞届も有之事に候間支配附之寺院より梁間三間以上之普請相願候節者右願書普請之繪圖且先年家作之繪圖相添共度々公事方月番伺書可被差出候  
右寛政十二申年十二月御代官え惣觸有之候  
右寛文八申二月之御書付左に出

覺

一 梁間京間三間を限べし

但桁行者心次第たるへし

一 佛壇つゝの屋京間三間四方を限るべし

一 四方しごろ庇京間一間半を限るべし

一 小棟作たるべし

一 ひち木作りより上之結構無用たるべし

有堂舎客殿方丈庫裏其外何にても此定めより梁間廣く作るべからず若廣く可作之子細於有之は寺社奉行所へ相伺可仕差圖候以上

同年三月七日

組中へ可申渡由永井伊賀守殿御渡御書付

一 なけし作の事

一 板戸の事

一 付書院の事

付 一つ方にもくし方の類

一 ほり物くみ物の事

一 結構成木にて拭ひ板の事

一 床ふち其外さんかまら等塗物の事

付 からかみはり付の事

一 け屋木門の事

右の分無用たるべく候以上

同年同月廿日

大名業御旗本業并寺社方三間梁より大き成家御誂被成候共今度急度被仰付候間自今以後請負仕間敷候旨町中棟梁大工并請負仕町人共に急度此旨申渡少も相背申間敷候事

同年 (月日) (不分明)

御 觸

寺院堂舎客殿方丈庫裏其外梁間京間三間を限り桁行は心次第佛壇つの屋京間三間四方を限り四方しころ庇京間一間半を限り小棟作たるべしひち木作より上の結構可爲無用其度々差圖請可作事

同年八月廿七日

覺

町中河岸通は土藏立候事跡々より御赦免被成候河岸之外堅無用に可仕候縦御赦免被成候河岸通たりと云とも新規に土藏造候は、兩御番所に御断申上御意を請造り可申候但瓦土藏垂垂藏之外は板葺葺葺家杯建置候は、早々崩取可申候事

同十一年九月

差上申手形之事

今度川岸端土藏御改に付き拙者支配町中川岸端之土藏以前より被成御免作り來り候分何程有之候共其に書付差上候様被仰付奉長候則入念遂穿擊私支配之人前々土藏敷何程并間口まで書付上申候無御免新規に一切爲作申間敷候若致隠密作り申もの於有之は早速こほさせ可申候土藏作り申度願者御座候は、御奉行所へ申上御差圖御意次第に可仕候少も依帖最負仕間敷候爲後日仍如件

何町名主誰印

元禄十六年十二月

(東山天皇 三代將軍綱吉)

此度地震火事付て屋敷或は破損或は焼失之面々普請之儀此節は諸職人等可差支之間急に仕儀無用縦雖爲御成道筋不苦候條先板圍等申付置勝手次第連々致造作様可相傳之旨大目付及中之間在合面々々相模守達之

享保三年二月朔日

(中御門天皇 八代將軍吉宗)

覺

一 抱屋敷圍家作當二月迄取拂可申旨去年被仰出候彌無遲滞取拂早速北南本所其向々之屋敷改一人之方々相届其趣此方

えも可被申間候

但非人百姓并之家は其儘可被差置候

一 惣圍之藪は目見え透候程切透可被申候其外竹木者住差圖切拂可申候

正月

右之通被仰渡候間抱屋敷家作無遲滞取拂其段中山出雲守様御番所へ可申上候南北方並本所屋敷改衆之内御一人之方に其所之向寄次第御訴可仕候此旨町中入念可被相觸候已上

同四年四月八日

覺

一 當二月類焼之町々家作仕候は、路次之上に家根仕間敷候當分小屋掛は勿論重て普請仕候共右之通可相心得候且又路次之口も戸計に致し上に鴨居等之物仕付候儀無用可仕候

一 類焼已後路次にも屋根不仕路次通之庇家并に仕付候端所も可有之候様之所者路次通之庇者路次并に庇を取放し可申候

一 當二月類焼之町々之外前々類焼之町々も路次には屋根不仕路次之庇家并に仕付候所も路次通之庇者取放し可申候

一 前々類焼之町々路次之上に屋根仕付候所者當分共通に差置可申候重と本普請之節者右之通可相心得候路次家根并庇無之所路次之口戸計にいたし鴨居等之物一切差置申間敷候

一 路次之奥に裏店にて無之家主抔致住居に路次を門に用ひ來候て路次之上に屋根無之候て者殊之外迷惑に候者も有之候は、委細繪圖に奈良屋所え可差出候

四月

右之趣先達て申渡候所今以其儘差置候町々も相見に候間支配之町々入念可申付候追て見分相廻し候儀も可有之候間油斷有間敷候以上

同五年二月十四日

覺

先日被仰聞候町中建家屋根葺に仕候段御停止之儀先年有之候哉之旨吟味仕候處其儀無御座候萬治年中類火已後小屋懸けの屋根茅葺葺こけら葺之儀堅塗家根芝屋根かきから屋根可仕旨之町觸其度に御座候得共瓦葺御停止の儀は相見不申候

町年寄三人

以上

享保五年二月

中山出雲守  
大岡越前守

右之書上二月十四日加納遠江守殿え上る

同年四月十日

一 奈良屋にて年番名主被呼先達ても御沙汰有之候爲火防町々塗家に致可然候哉先頃被仰渡候節者不致落着候間急に相談致明日中に書付差出候様被申渡候

同十一日

右に付年番名主寄合左之通書付奈良屋え差出候

以書付申上候

一 茅葺葺之小屋之今家根を土塗に致候儀御尋御座候先年土にて塗候儀御座候其砌者諸色下直に付小屋掛も近頃之様無御座表通り者相應に建申候に付塗候ても潰れ不申候裏々者其節も殊之外輕建申候小屋者潰れ申候儀も御座候て難儀仕候土塗候は、火移り不申候て能御座候得共唯今分之小屋にて者中々土を上げ申儀無心元奉存候塗候ても大雨抔之節者土も流れ申候故無間塗不申候ては難成候儀に御座候類焼故諸色土抔も少々者高直にて舟積も土軽く積申候様に成候儀に御座候間輕き者供は難及候様に奉存候事

一 板葺屋根漆喰にて塗候儀御尋に御座候此段塗候ても漸一箇年余程持申候ても土落申候故一箇年に一度つゝ塗不申候はぬは土を持不申候此段者何様にも修復と可仕候得共唯今分者土石灰等も下直に無御座候故差當難仕可有御座と奉存候町中一同に仕候は、猶又漆喰拂底に罷成高直に可有御座候左候は、彌迷惑に可奉存候



右兩様共に塗申候は、飛火之用心能御座候ても唯今分にて者小屋掛も軽く御座候間塗屋に難仕奉存候尤間々に板葺之建家並茅家にも塗家に仕候様成も御座候被仰付候は、此分は塗屋には可罷成候得共近年町中困窮仕候故細結に仕候藁葺之危き小屋掛計り過半御座候に付此類は塗家に者難仕候一同に塗不申候は、飛火防にも罷成申間敷候様に奉存候此以後心懸け候て塗屋に可罷成様に小屋建申候は、段々も塗屋にも罷成可申候様唯今之分にても四五之内丈夫成小屋も難立可有御座候様奉存候以上

享保五年四月十一日

同日

奈良屋え年番名主被呼右返答書大岡越前守様へ被上候處塗屋土土上げ候儀大騒成儀に存候哉畢竟火之子防之爲に有之間土一寸程附候は、可然旨被仰候右にても彌迷惑に候哉有無之義返答書認置差出申候様被申渡候

同日

右に付當組合寄合相談之上町々存寄尋候處何れも難致迷惑之旨申之候

同日

右に付惣年番名主寄合相談之上左之通書付相認即日奈良屋え差出候

板葺屋根漆喰茅葺之屋根土塗之儀先達て御尋に付書付を以て御返答申上候處薄く成共塗可申旨奉長候依之存寄之儀以書付奉伺候

一 弱き茅屋根薄く塗候儀荒木田土隅田川中土と違ひ淺草川邊其外枝川にて取候惡敷土にては厚五六寸にも塗不申候はね者干候て漸二寸計に減申候土惡敷候故粘り無之大分干割申候殊に近年數度類焼仕候町々釘打之丈夫成小屋者無數其上かうはい早く御座候故地震又は風強く時分者落安く御座候弱き屋根え厚さ五六寸は生土を付申候ては棟木梁鴨居等も下り戸建具明け立難仕候並此度類焼仕候町々表裏店迄に當分小屋に仕候得者漸々細結に仕候故土塗申儀難仕御座候

一 先年も塗申候處雨降候節は出入も難仕土流れ落棟より屋根中祖迄土下り軒之方に計殘申候上にて塗候は、流落不申候様に上覆にても不仕候は、長く土を持申間敷様奉存候覆を仕候ては茅葺同事に罷成候故飛火無心元奉存候

一 土之儀此間船一艘分之土漸半艘分ならては積來不申候揚場之遠近にて直設も高下御座候船場近所は一艘に付七百文より八百文程仕候遠き所者一貫文餘も舟賃懸り申候殊に町中段々塗候得者一入直段高直に罷成可申と奉存候すき藁等者大分之儀に候得共是又高直に罷成可申候不勝手之者共者迷惑仕候火事之御屋根え人登候て土落可申儀に奉存候に付屋根塗下地に拵不申候は、土を持申間敷様奉存候

一 板葺屋根漆喰之儀を右同前之儀御座候板葺屋根え直に塗候ては干われ申候其上板と漆喰馴合不申候故屋根え人登り候は、土落可申候に付是又塗下地に不仕候は、土を持申間敷様に奉存候事

右兩様之儀町人共に相尋候處に火之防き罷成儀に御座候間奉願候ても塗申度候得共尙當分類焼之町々多御座候得者諸色高直に御座候に付差支候由申候に付乍恐拙者共奉存候兼て心掛段々塗候様に仕候は、自然と塗屋又者板葺も漆喰に出來仕候哉と奉存候小屋懸直し候敷又者板屋も塗下地に仕候様に鉛々心懸候は、出來可仕候と奉存候當手と限り候は、漆喰並土者下及申すき藁等も高直に罷成可申候殊に此度類焼に付當年中來年迄も御屋敷方御普請始候は、彌以諸色可支申候故自然と高直に御座候得者時節惡敷御座候に付き町中一同に不仕段々仕候ても右灰又はすき藁等も此度之類焼に付一入拂底打積高直に可罷成と奉存候何卒段々心懸塗屋に仕候様被爲仰付候ては如何に可有御座哉奉伺候以上

同日

町中名主共

町中普請之儀土藏作或は塗家並瓦屋根に仕候事只今迄は致遠慮候様に相聞候向後右之類普請仕度と存候者は勝手次第たるべく候畢竟出火之節防にも成り又は飛火無之ために候間右之外にも可然義は且又勝手次第に可仕事

享保五年四月

右書付之通町觸可申付旨四月二十日有馬兵庫頭殿被仰渡候付御老中えも其段申上町觸之案文懸御目候之通彌其通に可仕  
旨被仰聞候付即日町年寄奈良屋市右衛門呼寄町觸申付る

同七年五月十三日

覺

今度町御奉行衆より拜領屋敷組屋敷町々之分惣て町中之ことく町役人は相勤候様に御觸廻り申候拙者共御役屋敷之儀は  
從公儀御普請御修覆被仰付住居仕候處類燒以後去る成年十一月拙者共並支配之者共迄自分作事被仰付銘々自分作事に仕  
罷在候に付居宅爲修覆料去丑五月御役屋敷町屋に被仰付候右御役屋敷町屋敷并自分拜領屋敷町屋の儀只今迄出火に付人  
足之儀は町井之通相勤來り候此以後とも自分拜領屋敷町屋敷の儀は此度御觸之通諸事如町々之相勤可申候御役屋敷之儀  
は右申上候通り自分にて修覆仕候様に被仰付町屋に被成下候間一通り之町屋とは譯違ひ可申哉を右之段申上候夫共町屋  
之儀に候得は諸町屋之通に仕可然筋に御座候は、何分にも奉長候依之口上書を以て申上候以上

享保七年五月

紅葉山附

石	田	宮	橋	田	氏	中
井	中	田	口	島	家	村
永	永	立	松	養	宗	道
德	閑	德	齋	運	吉	伯

右書付寅五月十三日於御城土井伊豫守大岡越前守え被相渡候即日町年寄奈良屋市右衛門方え遣此類之町屋敷は役人足相  
除候之積に可有之旨則書付遣候處成程是は常に拜領屋敷とは違候間役人足除候積之屋敷にて有之候猶又追て委細可相伺  
旨申來る

同八年八月

差上申證文之事

拙者共町々當卯年より來る已年迄三箇年の内屋根土塗に可仕候最塗屋土藏造りに致し候義は勝手次第可仕旨先達て被仰  
渡奉長候然共町内之義有來候家作にては塗候義も雜仕普請致替申儀は迷惑仕候依之只今迄之家作少々修覆仕觸から屋根  
に仕度段奉伺候處願之通被仰付難有奉存候火防之爲め被仰付候儀に御座候間飛火は勿論隣町申合置塗屋同前に相心得火  
移申間敷候萬一致方不宣火移申候は、何分にも可被仰付候爲後日證丈差上申候

横山町三丁目	月	行	事
同代地	月	行	事
米澤町壹丁目	月	行	事

同貳丁目	月	行	事
同三丁目	月	行	事
吉川町	月	行	事
下柳原同朋町	月	行	事
名主	喜左衛門		

卯八月廿三日有馬兵庫頭殿え上る

同年十月七日

樽屋にて年番名主え彼申渡

火の見の義願の通り彼仰付候間屋根の上河岸明地等より建候分は早々取掛相達可申候御堀端又は道え建候分は先差控可申候尤地なより組立候分は高さ地面より棟迄三丈壹尺に相建可申候且又當月三日火の見之義に付御觸之事町々え壹け所宛張置可申火の見出來候は、其所にも張置可申旨被申渡候

同年十二月

此度作事之儀頭取之面々より組合え相違候書付

覺

- 一 家作随分小住居に可仕旨被仰出候上は各彌了簡有之兼て十疊敷にも作可申と存候所は五六疊にもちゝめ其上差懸入用に無之所は相止可被申事
- 一 家作可成丈はひさく違候儀可爲肝要之事瓦葺も被仰出候は土藏作の事にては無之候屋根計平尾にてもさん瓦にてもふせ候儀に候尤下地塗不申直に瓦置候様成見分計取繕候儀は堅く有之間敷事  
但勝手に任せ土藏作りに被致候設は勿論可然事
- 一 軒下壁之蔭に至迄葺建の類火の紛付安きものは一切用ひ被申間敷事
- 一 作事以後建繼又は修覆之節尤此度普請格之通に可被仕事
- 一 右作事の仕方龜未成も候は、當人は不及申頭取迄可爲越度候以上

延享元年四月廿八日

子四月廿七日島長門守様御内寄合は石河土佐守様年番名主え被仰渡候趣同廿八日喜多村にて御書付を以て惣名主え被申渡

- 一 近年町々店前様或は庇したみ等往還は建出候所々有之不埒候早速爲取拂可申候得共近年多くは土藏造に付取拂大造に有之難儀可致候間連々普請修復等の節急度取計其度々月番の町年寄に可相届事
- 一 戸袋の義は廿三年以前寅年土藏造りの場所は家の内には納りかたく候間家并より外に付申度由願出其通申付候間彌其通相心得且又商賣物等の者板建候杭杯最往還え不障様可致事
- 一 藏造車品町内番屋へは店前土置場板圍木戸矢來町橋井戸上水下水普請修復共其外時節々々商物出小屋店前蟲干紺屋張物場建候類如前々月番の番所え相願差圖可請事
- 一 右け條の類は勿論此外の義共都て往還え相掛候事近來町人共心得違にて番所え不訴出道奉行え相願候町にも有之由に候向後は如先規月番の番所え訴出道奉行え相願候筋の義は差圖請可相願候惣して兩番所え願出相濟候義を又候道奉

行々願候譯に近來成來筋違の事に候間向後兩番所にて願濟候義は違奉行月替急度届に計可漏出候猶又此外の義は心付候品は町々名主より町年寄兼て承合置可申事

右之趣町々名主共不冲様可申合旨昨廿七日長門守様於御内寄合年番名主え被仰渡候趣書付を以て相達候自今心得違無之様可被致候以上

四月廿八日

札

此書付の趣に付届方等の義町々一同に致し直々に無之様可被相心得候依之相伺候筋も有之候は、年番名主より伺之可被申候事但月行事持の町々も右の通萬相心得候右の伺不相濟内は御番所え御願候事差違へ可申候

四月

右に付左の通伺書差出候

昨廿七日長門守様御内寄合え年番名主共被召出被仰渡候往還え相拂候事近來町人共心得違仕通御奉行所へ相願候町とも有之候に付き向後は先規の通り御月番の御番所え御願申上候様此度御改被成下難奉存候依之右願筋の義に付き御伺申上候義も有之候は、可申上旨被仰渡候故乍恐左の趣奉伺候

一 藏預の事

此藏預の義河岸藏地え土藏建申候新規普請の義は御番所え御願申上候て道御奉行えは御届不申上候但往來道幅の内え相懸り候土藏預の義は只今迄例無御座候

一 町橋の事

右二ヶ條只今迄の通御番所え御願可申上候事

一 番屋の事

一 木戸矢來の事

右二ヶ條只今迄の通新規并建直の義は御願申上最有象候を修覆仕候義は只今迄の通り御願不申普請仕度候事下ヶ札

一 井戸上水の事

此町橋番屋木戸矢來三ヶ條の義新規建直の節は道御奉行所えも御願申上御免分は無御座候右只今迄其通町年寄申え御願申普請可仕候事

此義は井戸上水普請仕候節往還堀明候に付道御奉行所え御願申上候御見分は無御座候

一 下水普請修覆の事  
右下水無之場所え新規に仕候義は只今迄の通り御願申上普請可仕候最有來候を修覆仕候義只今迄の通御願不申候様に仕度候事

下ヶ札

此義は下水往還え相掛候分は道御奉行所え御願申上候御見分は無御座候

一 遺作り車留の事  
右只今迄の通り御番所え御願可申上候事

此道造り車留の儀兩様共に道御奉行所えも御願申上候御見分は無御座候

一 紺屋張物場建候事  
右唯今迄御番所え不申上候者多御座候に付き自今は御願可申上候最往還の障に不罷成候様建させ申度候事

一 店前虫干の事

一 時節商物出小屋の事

第十八款 建

右二ヶ條は只今迄道御奉行所へ相願候迄にて御番所へ御願申上候者稀に御座候自今は急度御番所へ御願申上候様に可仕候事

一 土置場板圍井普請中出小屋掛け候事

右の類は近來町人共私心得違仕道御奉行所へ相願候迄にて御番所へ御願不申候者多御座候只今迄は御番所へ御願申上候得は御見分被下置御内寄合え被召出被仰付候左候得は日數も相掛り家作急に普請修覆取掛候義も有之節は差支難儀可仕哉其上此類は日々町中に夥敷御座候義にて一町内にも數ヶ所御座候間自今は何卒御願に罷出候迄にて被仰付被下置候様に奉願上候

下ヶ札

此虫干板圍出小屋土置場の類道御奉行所へ御願申上御見分は無御座候

右御け條の外店前縁或は庇したみ等往還え建出候場所又は戸袋の義看板柱等此度被仰付候通急度相守可申候畢竟只今迄町人共心得違仕候て御番所并道御奉行所へ兩願に仕町人失脚も相掛手支可申と御慈悲の義に御座候得は猶又此上間違等も無之様一同相守申度乍恐右の段書付を以て奉觀候以上

延亨元年四月廿八日

年 番 名 主 共

下ヶ札奥交書

右下ヶ札の通往還え相掛候品は道御奉行所へも御願申上候最前々より無之場所へ新規普請仕候義御願申上候は御見分有之候都て有來候を普請仕候分は御願申候迄にて御見分無御座候諸無願申上候義一ヶ月六度三八の定御立合にて御座候處平日にも勝手次第御願申上候得ば御在宅の節は何時に不寄御月番斗にて願の通被仰付候て御立合には限り不申候勿論諸事日延御願の義は先達て御願申上候者に家主差添罷出候得は御玄關にて御役人衆當人の印形御座被成

日延被仰付御普請出來取拂等御届の義願人計罷出是又御玄關にて相濟申候義に御座候以上

右は奉行の通伺書喜多村迄差出候處被尋候義猶又右の通下ヶ札致し差出候最樽屋えも一通差出置候

實曆三年十一月十日 (桃園天皇 九代將軍家重)

喜多村彦右衛門殿名主に被申渡

一 武家同倍臣并浪人所持町屋敷又は借地等に家中指置候か住居抔致候節家作之義に付別に御定にても有之哉來る十二日迄に返答書差出候様被申渡候

同十一月十二日

同所にて年番名主え被申渡

一 先達て武家町宅致候節家作致方御定の儀有之哉之段相尋候且又町人家作の義も普請仕方に極り有之哉目立候家作致候は、名主相答候哉委細書付指出候様被申渡候

右に付返答書來る十四日に差出候筈に相成候

同月十四日

右に付年番名主寄合候所御武家方同御家中并浪人町宅家作致方之義に付前々より御定有無之義存候者無之且又町人家作致方之義も御定有無存候者無之最格別不相應成致方も有之候は、名主共相答候義に付き右之趣返答書差出候得ば先差出置候様被申聞候

同月十六日

喜多村え年番名主被呼元祿年中享保年中にも家作の儀に付御觸有之候間其趣も書加え可照旨にて右返答書被相返候

同月十九日

右に付今日年番名主寄合致判談候處元祿年中享保年中御觸有之候家作之義は此度御尋之義には當り不申候得共書加候様

被申間候義に付享保之儀左之通認入今日喜多村彦右衛門殿差出候  
以書付申上候

御武家方同御家中井浪人町方家作仕候儀は家作の定有之哉井町方家作之義御尋に付左に申上候

右御武家方同御家中井浪人町方家作の致形定り候儀有之哉と御尋に御座候右來定りの御觸も御座候哉承傳候者無御座候井町人家作の義も定り候儀存候者無御座候享保四亥年町方路次上庇等の義は御觸御座候其後三十年程以前に火事防のため町々土藏造に相成出來の上町々に御見分被成下候節も軒高き家作の大小等の定りは無御座候夫より追々藏造りに仕候も最初藏造り之形を以て家作仕候家内大勢の者は家作廣くも仕商賣の品に寄り家作の趣相にても表向奇麗に仕候類は看板同前の儀に御座候町人不相應の家作仕候は、名主共答候義も有之哉と御尋に御座候此段は并に外れ不相應の家作仕候は、其品により答候儀も可有御座候右御尋に付申上候以上

十一月十九日

年 番 名 主 共

右返答書差出候得は請取被置候

附 録

手前心得の見出書

- 一 作事之儀縦國持大名たりといふとも三間梁より廣く家作可爲無用二階門可爲停止其外品々の儀明曆三酉年正月廿五日御觸有之
- 一 大さ成釘隠引手びいどろ金めつき杯結構に仕間敷に付き同西三月十二日御觸有之
- 一 三間梁より大きな家作仕間敷儀其外道幅庇等の儀に付同西年四月二十四日御觸有之其外にも道幅庇等の儀に付御觸有之

一 門立候は、町年寄衆差圖請可申儀同西年九月二十六日に有之其外家を作り出し申間敷儀に付御觸も有之

一 藁葺茅葺造直候は、向後可致葺草に少しの結に候は、土にて塗可申有來藁葺茅葺土にて塗可申藁葺茅葺の小屋新規に作り候儀自今以後御法度の儀寛文元丑年十月二十日御觸有之

一 出家山伏行人願人町屋に宿借候は、本寺より弟子に無紛段證文を取其上請人を立裏店に差置可申候本寺なき方には一圓宿かし申間敷儀右の葺町屋表店に差置申間敷候裏店宿借候共寺構にし會て爲仕申間敷候其上右の寺に一夜の宿かりをもおかせ申間敷儀題目講念佛講表店にて一切修行仕間敷儀に付寛文二年寅九月十八日町中連判上る  
但是は寺構に爲仕間敷の義に付き書出置候

一 町人家作致輕なけし杉戸付書院くしかた彫物組物無用床ふち棧かまち塗候事並から紙張付御停止附遊山舟金銀の紋座敷の内繪書申間敷事其外品々の儀寛文八年申三月二十日御觸有之

一 御武家方寺社方三間梁より大きな家御法度に候間請負仕間敷義に付右同日御觸有之

一 深川木置場に賣場二間は三間地守届所二間に三間より外何にても家造申間敷義に付天和三年亥閏五月御觸有之家作の儀彌輕く向後居屋敷下屋敷共に手の込たる作事可爲無用儀其外品々の儀元祿十六年未十二月二十三日御觸有之  
但是は家作輕可仕儀斗に候得共右に有之年番返答書の前の書面に元祿年中と申儀有之候に付書出候此外元祿年中には見當り不申候

右の通り御觸有之勿論寛文八申年別て御觸有之候所右に有之年番返答書には無之に付き追てのため記置候

明和元年六月 (後櫻町天皇 六代將軍家治)

村々家作の儀に付御觸之事

家作等の儀に付及出入候村方有之無益路用を遺捨候事困窮の基に候往古檢地の節高請致候百姓の外は向後門扉庇等の普請致す間敷候縦右致高請候百姓家分れ親類たりとも都て是迄門扉庇有之分て格別親類には難成條此旨を守るべし若於相

背は可爲曲事もの也右の通り御料村々え申渡候一村限小百姓迄一紙請證文取之可被差出候以上

小日向守  
牧大隅守  
安彈正小弼

寛政四年八月(孝格天皇十一代將軍家齊)

百姓家庇附の儀に付間合

御預所百姓之内本宅に前々より庇有來候もの新規に庇附之隠宅補理候儀隠宅者添家にて一軒立に無之候は、本宅え庇附來候上者不苦儀に候哉添家にて新規之庇者難相成筋に御座候哉御間合申上候以上

八月

戸田采女正家來

小林 八右衛門

書面庇附有來候者之隠宅添家にいたし庇附之儀若かる間敷右隠宅他之ものえ讓候儀者不相成事に候以上

寛政年間(年月日不明)

町法被仰渡書拔錄

自身番屋追々手廣に成候も有之惣て手重に候間以來建廣げ候儀決して不相成勿論是迄廣げ候分も以後建直しの節は用向辨し候迄に手狭にいたし新造修覆とも費無之様成たけ手輕に可致事

但場末に至り候ては二三町横合にいたし候儀は勝手次第之事に候且又番屋え詰候儀御成之節或は風烈之節或は格別之譯有之候節は仕來の通可詰其餘冬春とても詰るおよばす尤役人の外番屋え入不申銘々辨當持參酒は決して可禁事

### 第十九款

#### 鳥獸魚獵畜類及鳥商

徳川氏の獵法は素より職獵遊獵の別なく御奉場の事に關する事と慈悲心より出る事多し殊に五代將軍の畜類に於ける鶴軒に乗るの趣あり既に肥馬さへあれは野に飢色あるも顧みざるに似たり

寛永元年正月廿二日(後水尾天皇三代將軍家光)

急度申入候從松前上り候御鷹其御領今相通候刻不寄何時如前々人馬並御鷹之飼以下從松前志摩守被申斷候は、可有馳走之旨上意候恐々

正月二十二日

永井信濃守尙政  
井上主計頭正就  
土井大炊頭利勝  
酒井雅樂頭忠世

津輕越中守殿  
佐竹 左京大夫殿  
六郷兵庫頭殿  
酒井 宮内大輔殿  
鳥居 左京亮殿  
南部信濃守殿  
岩城 四郎二郎殿  
仁賀 孫兵庫頭殿  
戸澤 右京亮殿  
松平 丹波守殿

松平陸奥守殿	上杉 彈正大弼殿
松平下野守殿	芦野 民部殿
大田原 備前守殿	福原淡路守殿
喜連川御宿老中	奥平美作守殿
永井 右近大夫殿	

同三年三月

定

- 一 御巢鷹見出し候者之事其身の事は不及申彼立人組のものも其年巢の番をゆるし見出し候當人に御ほうび可被下之事
- 附 新巢見出し候ものには其年は常の御ほうび一倍可被下之事
- 一 御巢鷹の巢をかくし又は一巢の内にて鷹をぬすみ取輩有之可爲曲事たとひ後日に相聞候といふとも其身の事は不及
- 沙汰一類共に可被行死罪事
- 附 五人組は籠舎たるへき事
- 一 御巢鷹をぬすみ候者之事申出るにをひては同類たりといふとも其科をゆるし御ほうびとして金子五十兩可被下之事

右可相守此旨者也仍執達如件

同五年十月廿八日

江戸近邊御鷹場の御法度仰せ出さる御代官之面々是を奉り村里に相觸る

一 御鷹御意にてべかひ候者は此御判御黒印木札にて可有之候間能々改御判相違なきものにはつかはせ可申事

村 の 名

奉 行

- 上下のとをり鷹は御鷹場の内ばかり宿次に可相送事
- 一 御判なくしてつかい候鷹師ともにとめ置早々可申上事
- 一 御判なくして鷹つかひ候を見出し候者には御褒美可被下もし見のがし候は其者曲事に可被仰付事
- 一 在々所々にあやしきもの一切置べからざる事

右此旨をあひ守るべきもの也

寛永五年十月二十八日

此法度書相觸る村々の事

- |               |         |
|---------------|---------|
| 一 したや         | 一 小塚原   |
| 一 板橋          | 一 しば    |
| 一 淺草          | 一 はし場   |
| 一 をく          | 一 上板ばし  |
| 一 さうしかや       | 一 品川    |
| 以上十村倉橋庄兵衛是をふる |         |
| 一 ぜんじゆ        | 一 たけのつか |
| 一 そうか村        | 一 わらひ   |
| 一 ふか川村        | 一 うなきさや |
| 一 かさ井         | 一 市川    |
| 一 まつと村        | 一 こゑ    |
| 一 さるかまた       | 一 とかさき  |



- 一 きそね村
- 一 はちろ内
- 一 とわり村
- 一 ひろみ村
- 一 さしめ村
- 一 ゆかう村
- 一 以上貳拾四村伊丹理右衛門是を觸る
- 一 わうじ村
- 一 ひら柳村
- 一 小石川村
- 一 以上五村木部藤右衛門是を觸る
- 一 し村
- 一 以上二村次田平左衛門是を觸る
- 一 うちわ村
- 一 中羽彌右衛門是を觸る
- 一 よの村
- 一 以上二村服部惣左衛門是を觸る
- 一 六郷
- 一 つなしま村
- 一 つるかそね
- 一 はなまき村
- 一 ぬまた
- 一 小松川村
- 一 はやそ村
- 一 ぎゆうとく村
- 一 いは淵村
- 一 ほどがや
- 一 あかつか村
- 一 なまむぎ
- 一 かを村

- 一 へくち村
- 一 小杉村
- 一 うのき村
- 一 以上十村小泉次大夫是を觸る
- 一 右御黒印木札渡候聲
- 一 大井村
- 一 池上
- 一 みその口村

壹枚	加	藤	伊	織
壹枚	戸	田	久	助
壹枚	小	栗	長	左衛門
壹枚	阿	部	新	左衛門

同十八年二月 (明正天皇 三代將軍家光)

御取箇井隄川除等の儀に付御代官え申渡御書付拔録

諸鳥巢の喰ひ玉等有之時分より巢立候までは巢の有之竹木をば彌其内御用にも不伐様可申付候事

正保四年十一月七日 (後光明天皇 三代將軍家光)

定

- 一 御鷹場において脇鷹つかひ其外諸鳥致殺生者有之ば精を入無油斷可見出事
- 一 御意の由にて御鷹つかひ又は何様の致殺生もの有之といふ共見出し次第改之依其仁鉢屋敷迄送とゞけ其上松平伊豆守所迄可注進之若亦かろき者に於てはしかと住所も有之間敷候間直に伊豆守所迄可送届之自然見通聞通においては其村中之もの御せんさくの上可爲曲事事
- 一 夜中に殺生致すもの有之へく間夜廻を致し可相改縦同類たり共申出に於ては其科をゆるし其品により爲御褒美とし

て或金銀或其身の田島を可被下事  
右條々可相守此旨者也依執達如件

奉 行

慶安三年十二月七日 (四代將軍家綱)

戸田左門子息三郎四郎家人戸田の御鷹場にて鷹を遣ひ申を百姓見付則相断り留置て御鳥見衆へ申之仍て松平伊豆守え訴  
の間則達上聽て三郎四郎は開門鷹遣ひたる家人兩人は自公儀御成敗被仰付

同四年正月廿四日

- 一 雁鴨の類射を取手くろう致商賣仕候間左様の鳥堅商賣仕間敷事
- 一 鮫鱈の肝をぬき手くろう致し賣申間敷候事并肴の子を取り同手くろう致し賣申間敷事

承慶三年十一月十二日

東叡山下知條々

殺生禁断の儀北は可限御堂岸東は車坂屏風坂南は不忍地西は可限寶樹院殿堤堀事

明暦元年九月十七日 (後四天皇 四代將軍家綱)

日光山下知條々拔録

殺生禁断之事東北者稻荷川西者一野境石寂光寺田母澤南は大谷川御橋迄之内可限之事萬治三年三月十三日

大阪えの下知狀

御當家御貸於大坂近邊以鐵砲不打鳥所の事彌可停止の旨被仰出候條被存其趣御料私領ともに不可違背の由堅可被相觸候  
恐々謹言

萬治三年三月十三日

稻	葉	美	濃	守
阿	部	豐	後	守
松	平	伊	豆	守
酒	井	雅	樂	頭

内藤 帶 刀殿  
保科 彈 正 忠殿  
安部 攝津 守殿  
松平 隼人 正殿  
曾我 又左衛門殿

寛文六年

(月日) (靈光天皇 四代將軍家綱)

候前少將光政同年九月制金拔録

同八年九月十二日

鷹場に猫飼候儀不苦事

差上申一札の事

- 一 海邊にて鳥取申もの御座候は、何者に不寄捕置早々可申上候若捕可申事不罷成候は、行衛を見届御注進可仕候勿論
  - 一 一切鳥殺生の道具入候舟御座候は、留置可申上候尤あやしき儀も御座候は、見及聞次第可申上事
  - 一 支配下のもの并店借等迄急度申渡御文言の通手形取置召遣之者相心掛候様可申付候事
- 右之條々油断仕見のかし候と申者以來御座候は、名主組頭を何様の曲事にも可被仰付候爲後日改證文一札差上申候仍如件

町年寄三人衆中

同十一年六月十八日

覺

此日人喰馬出候て人を喰候由相聞候于今彼馬出候は、其町々立合早々とらへ可申候若馬見え不申候は、委細相尋只今之内其町々之名主月行事喜多村え參様干可申聞少も油斷有間敷候於延引は可爲越度候以上

延寶元年二月三日

參州奈良御鷹場其外於御料和領以鐵炮密々鶴白鳥雁鴨等打之由其聞有之候間入精見出相捕候様領内堅可被申付候若捕候義於難成は切殺候共又は鐵炮もて打殺候ても不苦候間可被得其意候恐々謹言

二月三日

土屋但馬守  
久世大和守  
稻葉美濃守

稻垣信濃守殿

松平帶刀殿

吉良上野介殿

板倉内膳正殿

外九名

同二年二月十二日

相州鎌倉邊猪數多有に依て田畑荒亡に付て由付四郎兵御に獵せらるべきとや

同年六月廿八日

覺

各御代官所海邊の村々の内之他國の獵師來所之百姓と申合獵に致獵候由及承候間浦方可被遂穿擊候運上をも不出獵に致獵候を其通に被差置候は、各可爲不念之間自今以後者獵に無之様に被相改可被得下知候以上

杉内藏允

甲斐喜右衛門

徳五兵衛

貞享三年七月十九日 (五代將軍綱吉)

覺

一 於町中所々大八車并に牛車にて度々犬杯を引損し候處末成致方不届候依之車引段々御仕置被仰付候自今已後左様に無之様等領にても付車引懸不申候様に可致向後其所之者并辻番隨分念を入心を付過ら不仕候様に可致候事

一 取前も委細申渡候得共今以て無主犬參候ても食事給させず又は犬其外生類取遣いたし候儀も今程は不仕候様に相聞候生類哀み候様に被仰出候義を心得違にて有之候と相見へ候何事に付ても生類哀み志を肝要に仕諸事かたすまらざる様心得可申候

七月

右之通今日御番所にて被仰渡候間町中家持は不及申借屋店借地借召仕等まで并所々辻番に爲申聞堅相守可申候若相背者於有之は急度可被仰付候間此旨可被相心得候

右之通相觸候は、名主月行事印形を持喜多村所え可被參候已上

町年寄三人

貞享四年正月 (東山天皇 五代將軍綱吉)

總て人宿又は牛馬宿其外にも生類煩重り候得は未不死内に捨候様粗相聞候右之不届の族於有之は急度可被仰付候密々にて様成儀有之候は、訴人に出べし同類たりといふとも其科をゆるし御褒美可被下候以上

同年二月十一日

覺

町内に有之犬を相改毛付扱いたし若他所へ參候得者難儀かり方々相尋候由相聞候不相見候は、違て相尋候に不及候又は主なし犬何方より町内を參候共無構其分にいたし差置可申もの也

二月

右之通り被仰出候間此旨相守可申候町中下殘可被相觸候已上

同年同月十六日

町年寄三人

所々御鷹場におひて脇々之もの夏冬に不限忍ひ鷹遣ひ且又似せ餌差入込致殺生者有之候は、相改其署宿え付届け預置早速致注進候様に其方御代官所之内御鷹場之村々え急度可被申付候以上

貞享四年二月十六日

國半兵衛  
佐六右衛門  
以下三名

伊奈半十郎殿

同年同月廿一日

此頃犬之儀に付申渡候趣年寄共心得違有之故重て被仰出覺

面々飼道候犬毛色扱帳に記し置見へ不申候得は何方より成共犬を連れ参り數を合せ候様に風聞有之候畢竟人々生類を憐み候様に被思召段々被仰出候處實無之仕方ともに候向後養置候相見へ不申候は、隨分相尋知れ候様に可仕候若愈末に仕候者有之候は、支配のもの方迄許可出候他所より参り候犬など有之候は、粗末に不仕養置主相知候は、返し可申也

同年同月廿七日

覺

爲食物魚鳥いけ置候て賣買仕候義堅無用候鶴龜同前之事

二月二十七日

如此書付出候上は自今已後爲食物いけ魚いけ鳥堅商賣仕間敷候

但爲慰飼鳥飼魚は格別也鶴龜貝類に至まで爲食物一切不可飼置此旨於相背は可爲曲事もの也

同年同月廿八日

覺

昨日御觸に付只今まで飼道候鳥俄にメ殺殘申もの可有之候爲食物いけ置候魚鳥俄に殺候義無用仕へし若メ殺候もの有之候は、曲事に可被仰付候并いけ鳥いけ洲にて無之候とも貝類其外鯉鮒海走などの生たるを商賣不罷成候間右之通町中不殘可被相觸候以上

二月二十八日

右之通二月二十八日町々へ奈良屋より手代相廻被申渡尤帳面持参右之趣儘承届候段月行事名主判形被取候

同年三月

一 生鳥類飼置候義可爲無用但鶏あひる之類ひ其外唐鳥之類野山に住たる鳥は放候ても餌にかつへ可申候間先其分は差置可申候たまごうみ候向は能飼そたて夫々所望方に可遣事

一 鶏はそんなさかし候分は賣買無用候事

一 鰯飼置候義一切無用之事

一 いけすの魚仕置賣買之事

右之趣堅相守可申於令違背し可爲曲事者也

同年四月廿一日

犬猫死候は、捨候義無用に仕埋可申旨奈良屋にて名主月行事を被申渡候

同年同月

一 生類憐の儀に付最前書付を以て被仰出候處今度武州寺尾村同國代場村の者病馬捨之不届の至り候死罪にも可被仰付候得共此度は先命御助流罪被仰付候向後於相背は急度曲事可被仰付候御領は御代官私領は領主地頭より前方被仰出候趣彌堅相守候様入念可申付者也

口上にて名主月行事へ申渡の覺

一 生類憐の儀被仰出候得は惡敷意得互に生類取やり仕候儀も不自由成様に仕候總て急災なる大來候へは食物もたゑさせ煩候犬など來候へは聊食物などもたへさせ不申様に仕候此段何も心得違に候上より被仰出候は人々仁心も出來候様にと被思召候ての儀に候所うわへ計守り候様は仕候て内心に憐愍の志うすき仕形犬不届に候たまへ生類あわれみ候者も有之候へは却て出かしたて仕すべく町所のやつかひおひたすへきなど申ともからも有之様に相聞へ候度々申渡候趣を相守り人々心より慈悲の心起り候様に仕べし

右之趣急度可相守之若相背輩於有之は町所の者可訴之隱置脇より於相知は名主月行事可有不届候以上

十日

同年十二月

捨馬の儀に付段々被仰出處頃日捨馬仕候者有之候急度御仕置可被仰付候得とも先此度も流罪被仰付候向後捨馬仕候者於有之は可被行重科者也

同年同月

捨馬不仕候様被仰出候得とも相背者有之最前遠島被仰付段々御仕置之處今以右之儀有之重々不届至極に候得共以御慈悲今度も同罪に被仰付候御領私領共に急度申付畢竟生類憐之候處專一に可仕候此以後捨馬致し候は、其譯最寄御代官地頭越度たるへく候以上

元禄二年七月初日

御目付兼口上にて被申聞候は猪鹿狼打殺候は、其所に埋置可申候尤食物に商買仕間敷の由被申聞候以上

六月二十八日

右は獵師の外の事に候段承知仕候様にと御目付兼被申聞候以上

同年同月十二日

覺

一 兼て被仰出候通生類情みの志彌專要に可仕候今度被仰出候趣意は猪鹿あばれ田畑を損せさし狼人馬犬をも損せさし候故あれ候時計鐵炮にて爲打候様に被仰出候然處萬一存違ひ生類憐みの志忘れむさと打候者有之候は、急度曲事可申付候事

一 御領私領にて猪鹿あれ田畑を損せさし或は狼あれ人馬犬を損せさし候節は前々之通隨分追散し夫にても止不申候は

御料にては御代官手代役人私領にては地頭より役人并目付を申付小給所にては其頭に相断役人を申付右之者共急度誓詞爲致狼鹿狼あれ候時分計日切を定鐵炮にて爲代其譯帳面に注置之其支配々々急度可申達候猪鹿狼あれ不申候節紛敷殺生不仕候様に堅可申付候若相背者有之候は、早速申出候様に其所の百姓等に申付狼け間敷儀候は、訴人に罷出候様にと兼々可申付置自然隠置脇より相知候は、當人者不及申其所之御代官地頭迄可爲越度事

六月

右之趣御領私領に被仰出候間町中家持借屋店借下々等迄此旨爲申聞急度心得置生類憐候様に可仕候若相背者有之候は、曲事に可被仰付候間少しも違背有間敷候已上

町年寄三人

同四年十月廿四日

此日町中にて藥賣へひをとらひ候者有て牢舎被仰付候へひに不限たとひ犬猫鼠等に至まで生類に藝を仕付見世物符にいたし候義無用たるへし生類くるしめ不届に候若相背者有之候は、急度曲事たるへき由被仰渡候間此旨堅相守へし

同五年十二月

覺

町中にて筈候四疋之類商賣之義停止に候間向後一切商賣仕間敷候若相背もの於有之は急度曲事可申付者也

同七年十月十日

殿中在合候諸役人御老中御列座にて大久保加賀守殿被仰渡之

前々度々生類憐之儀被仰出候事は深き思召入被成御座候處生類憐の一通の様に存罷在候左様迄にては無之深き御心入被成御座候事に候右の憐みを諸事に寫し萬端直に物毎心掛有體仕少もはだかまり申心底無之様可仕候同役面々支配又は家

來の者百姓迄へも可申聞候由被仰渡之

同年十一月十六日

御目付大島雲八郎被申聞候

金魚銀魚被致所持候衆放し申度被存候は、藤澤遊行寺池へ遣し放し候て其上にて魚の數御目付衆迄可申達由に御座候放し候様にとの儀には無之由被申聞候

同八年二月六日

御目付瀧川丹後守被申聞候

前々被仰出候子犬の儀彌龜末に不仕致養育可申候殺或は川などへ捨候儀は有之間敷と思召候得とも若左様の事有之て相知候は、急度可被仰出候間入念可申付旨昨日御老中御列座にて被仰渡候由被申聞候

同年同月十二日

御目付永見甲斐守書付被相渡候

端々やせ犬相見へ候間やせ不申候様養育可仕旨被仰出候

同年同月廿一日

御目付衆被相渡候書付三枚

覺

- 一 侍屋敷並寺社方境内に鳶鳥巢を作り早速取拂巢を掛不申候様に可仕候若玉子加へり候は、其儘差置可申事
- 一 江戸廻り百姓の地に鳶鳥巢を作り候は、早速取拂巢を掛不申候様に可仕候若玉子かへり候は、其儘差置御鳥見迄相達差圖次第うつさせ可申事
- 一 江戸愛宕山の境内は巢拂仕間敷候事

以上

同年同月

覺

見馴るる魚鳥獸其外替りたる生類取申間敷候死候て於有之は其所に埋可申候勿論實買にも仕間敷候其上にて右の譯支配へ早速斷可申達候以上

同年五月廿七日

御目付松野八郎兵衛被相渡候書付

覺

一 熊猪狼のたぐひ縦ひ人々喰掛不申候とも人の置候馬牛犬猫雞杯の鳥獸を損せさし可申體に候は、追拂候て損せさし不申候様に可仕候者追拂候節先へ當り死候分は不苦候

一 犬猫たとへは鳥獸を損さし或は友に喰合候は、いたまざる様に引わけ可仕事

以上

同年六月三日

覺

町中に有之人に荒き犬今度四谷新園え被遺候就夫向後も人に荒き犬出來候は、兩番所え以書付早々可訴出者也

六月

右之御觸之通町中不殘爲申聞向後人に荒き犬出來候は、早々以書付兩御番所え可申上候并其趣喜多村所え可被申斷候以上

町年寄三人

同年十月七日

覺

一 寺社侍屋敷に鶯鳥巢をかけ候は、早速取拂常々も無油斷入念巢掛不申候様に可仕事

一 江戸廻御鳥見支配之地に有之鶯鳥の巢は其儘掛させ置其所の百姓より御鳥見へ早々致注進御鳥見より山本藤左衛門佐原十左衛門方へ巢有之分可申越候尤巢掛初より御鳥見へ百姓方より注進可仕候事

同九年十月七日

覺

御鳥見向後相止め候得共只今迄之御留場前々之通り鳥類殺生不仕勿論他所之者にも爲致殺生間敷候病鳥等有之節は其處に於て隨分入念養育可仕候度々其支配え不及申達候若人之さわりにて痛み或は疵付候體之鳥類有之候は、其譯委細書付其所之御代官并地頭え可申出之隠し置脇よりあらはるゝに於ては可爲曲事候以上

十月

右之通りに候間只今迄留場之内に知行有之面々は可被存此趣候以上

同十一年九月廿五日

前々より被仰出候獵師之外殺生仕間敷旨相觸候彌以堅相守可申候殺生道具獵師之外堅商賣仕間敷候

右之趣相背候者於有之候は急度曲事可申付者也

同十三年七月十二日

喜多村にて町々名主え被申渡

此日御小人目付衆犬うつしに被遺候處見物集能うつし候得ばほめ申か又はうつしそこなひ候得ば笑申候番人も前方は人

をも拂申候處只今は一切拂不申候故ちだら／＼に有之間克々被仰付候御目付衆より越前守様え被仰越候に付右之通無之様可致旨被仰渡候

同年同月廿三日

惣て生き魚商賣之儀御取別停止被仰出之候うなきどぜうも生魚之事に候間向後商賣停止に候間若此已後賣候者於有之は可爲曲事候其所之名主五人組迄越度候條右之趣急度可被申渡候以上

同十五年五月

御鷹場御鷹野道筋之寺社は不及申寺社領井門前町屋等飼犬猫其之主方に可繫置候若無飼主犬有之に於ては或は村中或は町中より捕之遠在郷之無構方へ可被相送候

右之趣支配下へ可被申渡候以上

實永二年九月七日

覺

前々より獵師之外釣船又は網にて魚を取候義停止之旨相觸候處比日獵に釣いたし并釣船も有之由相聞不届之至候向後獵師之外魚を釣網打彌以堅仕間敷候若此以後相背者於有之は見合次第召捕急度曲事可申付候間此旨町中不殘可被相觸候以上

九月七日

右之通從町御奉行所被仰渡候間町中入念急度相守可申候以上

同五年七月十九日

覺

獵師之外釣舟又は網にて魚取候儀停止之旨前々相觸候處比日釣いたし候者有之由相聞并鳥商賣五人組齎商賣致間敷旨度

々相觸候處右之商賣いたし候族も今以所々茶屋にて届之者有之候得ば體齎料理致出し候由不届に候此以後右之商賣いたし候もの有之候は、見合次第召捕曲事に申付其所の家主五人組名主迄可爲越度候間此旨町中急度可相觸候以上

同年十月廿五日

覺

- 一 兼て被仰出候通生類哀み候儀專一に心懸煩候節は猶以念を入養育可致候事
- 一 牽馬牽牛途中にて煩出又はけかなといたし候時無遠慮其所の屋敷え牽入可致養育候町屋にて牽入かたき所にては其處の者に申達念入可致養育候事
- 一 道中にて次馬並雇候馬煩出候節又は怪我いたし候は、其所之者え口付之方申合入念養育仕候様に申渡養育之仕方承届可罷通候宿無之所に候は、其近邊之者え右之通申渡可罷通候左様の節は其所之もの入念養育可仕候事

右之通被仰出候間町中不殘可觸知候以上

同七年六月十八日 (中御門天皇 六代將軍家宣)

覺

- 一 頃日江戸并近邊にて鳥をさし候者有之由相聞候前々より御餌差之外江戸近邊にて鳥差候義停止にて候處猥成儀に候間彌停止たるへき事
- 一 魚鳥取候儀御堀廻り并停止之場所にて殺生彌仕間敷事

正徳三年八月 (七代將軍家継)

淺草新鳥越今戸橋迄之内

定

新鳥越橋より今戸橋までのあひた殺生停止之若相背族あらば曲事たるへき者也



(享保二年にも是れと同文の政令あり)

享保元年十月 (八代將軍吉宗)

御奉揚之内所により御鳥見差圖次第畫之内も魚殺生仕間敷御旨御料私領寺社領に可申達旨御代官に申渡候書付御奉揚其外御留揚之儀十月より正月迄魚殺生畫之内は御構無之候夜中殺生仕間敷旨先達て御觸有之候處御奉揚之内は所により畫之内も魚殺生留可申旨御鳥見より差圖有之處は殺生仕間敷旨御奉揚村々え可申渡候并私領寺社領えも各向寄り可被相通候右之旨大久保佐渡守之も申渡候間入念間違無之様に村々え可被申渡候事

同年十二月十八日

覺

一 御鷹居通候節かろき者共下馬仕候も有之様に相聞え候右下馬には不及候間御鷹に構無之様除通り可申候せまき所にて行違候砌は馬を留片付可罷在事

一 惣體往來之者もせまき所にては片付罷在御鷹に差構無之様可心得事

一 牛車大八車且又荷附候馬并竹木等持通り候者右之分御鷹見掛候は、留置可申候尤遠所は留候に不及事

右之趣可被相觸候以上

十二月

右之通被仰出候間町中可觸知者也

同二年二月

濱御殿石垣より二町程の間海の内にて向後漁獵并釣船の儀停止被仰出候間獵師共不及申何者によらず其旨急度相守可申候以上

同年四月

御鷹野御成之儀に付被仰出候御書付

一 御鷹野所々御成之節御慰筋或は堅め等の御用之外は諸事常に不相替町在郷迄可成程は家職之障に不成様に可申付候たとへは御道筋之儀橋など損候敷何ぞ御供申障可成程之儀は勿論直させ可申候其外見分計に拂除申付御奉公ぶりに猥に人多く遺候様なる義却て御慰之妨を致と同様に候條かたく無用に候若向後先格有之事と計改無益之儀共申付候は、其向々之諸役人御咎可被成候間相認候事之上にも猶又委く心を附可申出候事

一 諸役所より差出候御道具人數之事委吟味致し随分すくなく差出可申候御延氣御鷹野先之儀御供廻り御番人并思召有之て被仰付候御人數之外は萬事すくなく御膳所に至るまでも御不自由被遊思召に候處自然御用入べき哉と用意抔持参候義上意に不叶何とも御事かけさせられ候分は不苦候間定之外之物持参り候儀堅く無用に候事

同年十二月

御留揚の内鳥殺生仕候者有之候は、訴人に出へし縦同類たりといふとも其科を免御褒美可被下之其上以來あだを不仕候様に急度可及沙汰候條此旨可被相觸候以上

右御書付酉十二月二十三日大岡越前守詰番の節戸田山城守殿御渡被成候に付留之本紙月番坪内能登守へ遣之

同年 (月不明)

淺草諏訪町南境 兩所相建候高札文言  
同所聖天町北境 定

淺草川筋南は諏訪町より北は聖天町迄之間におゐて殺生これを停止若違背之輩あらば曲事たるへきもの也  
同三年六月

御鷹方野扶持之儀并野先勤方等之儀に付御書付

一 御鷹匠頭野先逗留仕候節只今迄被下置候御扶持方五割増可被下候次御鷹匠並同心是又只今迄之一倍增御扶持方被下

第十九款 鳥獸魚鱗畜類及鳥商

候間野先逗留中飯料油薪等其外輕き入用之儀迄も古扶持方を以て宿拂可致候勿論馳走ケ間敷儀不致様百姓共にも急度可申聞候此旨在所々々も申渡置候事

但御用之外萬一人夫遺候は、定又自分雇遣可申候且又宿々にて諸入用拂無滞相濟候段手形取置可申候  
一 御鷹捉飼之節惣て作毛あらざる様並百姓農業之障りに可相成儀用捨可有候事

但御鷹捉飼之障りに成候儀も有之時は當分其場所計農業相待せ置可申事

一 野先にて御鷹部屋拵候儀隨分輕く可仕候番人等も相兼候て可成程人少可致事

一 人足之儀御用に候共餘計之人足差遣候儀無之様端心を付可申候御鷹部屋拵様其外人足人數之極りは追て可相通事

一 御鷹匠目附役被仰付間平日勤方之善惡并在々逗留中之儀心付候品有之候は、早速相連候様可申付事

右之趣被相心得諸事在中痛に不成様御鷹匠并同心共迄に急度可申付候事

以上

同年七月廿四日

覺

一 御拳場并御留場鳥殺生御制禁之儀依致中弛候鳥無之御用に難立に付今年より子年迄三ヶ年之内左之通り被仰出候事

一 鶴白鳥菱喰雁鴨なま鳥鹽鳥共に三ヶ年之内は献上候儀無用に可仕候此外之鳥上來候は、苦しからざる事

但初鶴初菱喰ハ献上可仕候事

一 鶴白鳥菱喰雁鴨なま鳥鹽鳥三ヶ年之内は音物并振廻之料理等に遣ひ候事無用に候此外之鳥は音物料理等にも遣ひく  
るしからざる候雁鴨爲養生給料に相用候儀は勝手次第之事

一 於江戸鳥商賣仕候義三ヶ年之内は町中に鳥問屋拾人相極雁鴨は不及言小鳥飼鳥に至迄右之所之外にては鳥商賣仕間敷候且又相極拾人之者共御鳥見判鑑を申請拾人之者添判いたし鳥差越候ものえ相渡置鳥數之儀は其在々之名主より證

文相添可申候右判鑑并證文無之鳥一切商賣仕間敷候事

但御鳥見并野廻り之者共も鳥を持置候者に出合候は、相改若判鑑持不申もの有之候は、留め置可遂吟味候事

一 近國知行より鳥取寄候面々は御鳥見組頭判鑑に手前之添判いたし取寄可申事

右之趣堅可相守候以上

享保三年戊七月

右御書付戊七月廿四日大久保佐渡守殿御渡し被成候坪内能登守中山出雲守方えも相廻し申候

同四年九月

御鷹場之内に有之池沼流之分魚殺生之儀に付御書付

御拳場御留場捉飼場之内に有之候池沼流之分魚殺生十月より正月迄晝之内御構無之候夜入候ては無用に可仕候向後例年此通可相心得右之趣御料私領寺社領え向寄之御代官より可相觸候以上

右附紙

御拳場之内所により晝之内も魚殺生留可申旨御鳥見より差圖有之所は晝之内も殺生仕間敷旨御代官え申渡私領寺社領えも御代官より中通候様に可仕旨率得其意御代官えも右之趣可申渡候以上

御 勘 定 方

同年十一月

拾里内新御留場魚獵之儀に付御代官え申渡候書付

拾里内御留場并新御留場御鷹匠頭捉飼場右村々魚獵之儀夜中計殺生致間敷旨先達て御觸有之候得共小川小池沼流等御鷹匠頭より差圖有之處は晝も殺生不仕替に候間何れにも御鷹匠頭差圖次第可相心得旨御代官村々は勿論私領寺社領えも其趣向寄より可被申通尤村方下落様可申合候右は大久保佐渡守被申聞候

同年二月

御鷹野御成之筋之御場之内野犬彌とらせ御代官之相渡可申候飼犬は御場え不出候様に常々つなき置候か又ハ何方え成共勝手次第遣し可申候右之趣町方は町奉行在方は御勘定奉行より相通し置可申候屋敷方は御鳥見を以て可申通候

享保五年子二月

右御書付子二月五日大久保佐渡守殿大岡越前守方へ御渡被成候付留之

同年同月

巢鷹差越御定

一 夏至十日後迄之内江戸着可申巢鷹は新巢古巢之無差別差越可申事

一 夏至廿日過候て江戸着可申巢鷹は差越候に不及候戌亥兩年御點之巢所彌心を附見出し候様可申付候然共是以廿日過

江戸着可致巢鷹の差越候に不及事

一 つるの巢見出し候は、遅速之無構可差越事

右所々御代官所々可申付事

日光圖書支配所も右之通り可申遣候右去年度々被仰出趣申遣入交りまぎらわしく候間此度相改如斯候去年相觸候分拾候て向後此通の計用可申事

以上

同年四月廿一日

覺

一 去る年より當年中鶴白鳥菱喰雁鴨献上且又香物に仕間敷由相違候得共鶴は自今も相用申間敷候白鳥菱喰雁鴨は當冬より献上并香物に可仕左候得は献上は二つ宛香物には或は二つ或は一つ可爲勝手次第事

但前々より右之鳥一つ献上候分ハ尤其通に可相心得候

一 鶴白鳥菱喰雁鴨振舞之料理に出し候儀は去々年觸候通に相心得重て相違候迄は可爲無用事

一 只今迄ハ鳥屋拾軒にて候向後は鳥屋先規之通可爲勝手次第候若御停止之場所より出し候鳥折商賣仕候は、鳥屋取上可申事

但田舎より鳥取よせ候判鑑札も武家万井町方共に御鳥見組頭方へ可相違候事

以上

享保五年子四月

右御書付子四月廿一日井上河内守殿中山出雲守方へ御渡候由大岡越前守月番に付本紙被差越候付翌廿二日月番奈良屋市右衛門之寫相渡町觸も申付る

同年八月廿日

一 喜多村彦右衛門殿々年番名主之内拔々被呼御鷹御用狀御取次之儀願人有之候間否書付差出候様被申渡候に付左之通り書付同所々差出候

以書付申上候

一 御鳥見御鷹匠方御用狀御取次可仕旨願候者御座候に付御尋被遊候町々にて御取次大切に仕申候自然風と不調法も御座候ては迷惑奉存候得とも御狀之儀相廻不申候町々多御座候に付一同難仕其上近頃者何角と町々少々宛も物入御座候に付右願之ものに相渡候儀先延引仕度旨町人共申候若手支之儀御座候は、追て御親可申上候已上

町 中 名 主 共

同六年正月十九日

關八州之内にて鐵砲鳥商賣之儀向後無用に可仕候右之外之國々より持來り候共求不申先え返し可申候以上

享保六年丑正月

同十九日大目付兼詰番中山出雲守え被相渡候由にて指越候故寫留

同年閏七月十三日

覺

一 御鷹方御鳥見方より野先并其外に遣繼人足之儀向後相止候間兼ての支度いたし置候義無用に可仕旨被渡候様に存候事

一 御前より被仰出野先え被仰越御用人足之事は只今迄之通繼申答に候然共是は切々有之事にては無之兼て致支度願候程之儀にてハ無御座候大久保佐渡守殿御側衆より其段被仰聞答に御座候

一 御成之節傳馬町馬驛方より指出候御鷹箱御鷹籠持人足向後は御作事小普請方え雇人足差出候て馬驛方右人足は相止申候事

右書付享保六年丑閏七月十三日御勘定奉行衆被爲見候に付記置

同年同月

御鷹方人足の儀に付御書付

一 御鷹場所々人足入用等の儀前々より在々掛候得共今は相應の御扶持方可被下事

一 御鷹野御成先人足等之儀は別て在々懸可申事に候得共吟味紛敷品も可有之に付是以御扶持方可被下事

一 自今は御用之人足等遣ひ方之儀其筋々之役人之判形名主方え取之御代官え差出勘定可仕事

但判形無之人足等ハ勘定相立申間敷候事

一 御鷹筋之儀御朱印并證文差出候人馬筋之儀は只今迄之通可相心得事

一 戊年以來御鷹場入用吟味之品譯難相立に付遣ひ捨可相心得候但有之うち鳥見役家之儀は跡まで殘形も相見候儀に候

間入用可被下事

以上

人足之儀五里より近き所より出候もの一人に五合扶持宛五里より遠き所より出候は一人に一升扶持つゝ可相渡候且亦半日遣候人足ハ五合扶持一里に及繼人足も同斷

判形可仕分

一 御成先御用人足但小働共に相勤候分判形可仕候

一 人留一足旅船改人足判形可仕候

一 田水汲干人足判形可仕候

一 よもき刈わけ人足けらいなど赤蛙取候人足は判形可仕候

一 泊御鷹番人判形可仕候

一 御鷹呼繼人足致吟味判形可仕候

一 御犬猪鹿捉飼に置越候節持送り人足吟味仕差圖之通之分は吟味之上判形可仕候

右御用之儀に付人足遣候義有之節一里餘之所え遣候程之儀は判形可仕候尤近邊え遣候とも先にて手間を取の半日程も掛り候儀は是又判形可仕候

但御代官御鷹匠御鳥見其面之判形を百姓方に取候は御扶持方受取可申候

判形仕間敷分

一 惣て御用人足半日之内又は一里より内之輕き遣方之分并に差圖之外出候人足は判形仕間敷候

一 御鷹御用に付御朱印并證文にて差出候人馬且又御鷹匠往來に付定斷にて差出候繼人馬之儀は只今迄之通役人足に相定此分は御扶持方被下間敷候

一 御前より被仰出不時に野先に御用中遣候儀は其節々可相違候間右に可准候以上

右之通御書付出候間被得其意御鷹場村々之儀書面右通に可被相心得候以上

御勘定吟味役  
御勘定奉行

伊奈半左衛門殿

外御代官拾三人

同年同月

鷹番相止候に付御書付

鷹番之儀目今相止申候然上は村中之者共彌常々無油斷心を付死敷もの有之は急度可相改若此以後鳥を取候もの有之時相改候は其村々名主は言ふにおよばず村中之者共迄越度たるべし其上又々鷹番可申付者也

同月同日

野先より上げ鳥之儀に付御書付

- 一 二人持之上げ鳥并手明一人夜中も外に人足出さず右手明燈を持可申候事
  - 一 一人上げ鳥并手明一人夜中も外に人足不出右手明持可申候右自今は江戸にて平川口御番屋迄以村次可届候
  - 一 三里之内にては堅かせ申間敷候三里之外に村有次第すかせ可申候右御定之人足之外堅出し申間敷候萬一人少に付遅成候分ハ百姓之越事に不成事
- 御鷹匠方之判形を以て一次三里五合扶持つゝ被下候事

同年同月廿六日

- 一 御鷹方御鳥見方より野先并其外之遣候續人足之儀向後相止候間兼て致支度置候儀無用可仕事
- 一 野先之御用被仰遠候儀有之候節は只今迄之通宿次人足を以可遣之候然共是は切々は無之事に候間兼て致支度置候に及不及候事

右之通町々相觸候様にと享保六年丑閏七月十五日町年寄奈良屋市右衛門に書付相渡す此度日本橋え高札相建候右之趣相心得可罷在候右札に在之通直訴場も相觸候上は此已後捨文は勿論外え致直訴間敷事  
右之通急度相心得候様町中可觸知者也

享保六年丑閏七月

右町觸丑閏七月廿六日町年寄北村彦兵衛呼出申付尤右書付寫遣之

同年 (月日不分明)

御留場内にて鳥殺生致候者御仕置之事

- 一 網或は網繩にて鳥殺生致候者 過料
  - 一 鳥殺生致候村方並右之者居村 名主過料  
組頭吐り
  - 一 鷹鳥を賣買致候者 双方共に過料
- 但度々賣買いたし候共同斷

(寛政二年四月にも是れと同文の書令あり)

同年 (月日不分明)

御鷹捉飼場之内障に成候場所魚殺生停止之儀御鷹匠より札建候儀に付御書付

- 一 御鷹捉飼場大川大沼運上場之外小池小川之内御鷹捉飼之障に成候場所にては魚殺生仕間敷旨御鷹匠頭より札建可申候有之趣者所之者に御代官より可申渡候

同七年七月

御鷹場之儀に付思召之趣御書付

傳馬人足其外水夫御鷹番人兼て御定より餘慶用意致し候様に存候由夫々よりは上を重し大切に存候儀是にて察し可申候然る上は御用にて参り候面々はいよ／＼權柄に無之様に心掛可申候私事にて百姓町人に對しものこと申付候よりは都ておだやかに急ぎ候事もせり不申過失をもしかり不申様可仕儀に候人馬多遣ひ候義は所々にて誰も好み申間敷儀に候得共御定より多用意致候者萬一遅滞候時は鷹匠并同心共迄以之外しかり可申候夫々恐候ての義たるへく候間箇様之儀百姓々重て觸候に及間敷鷹匠共之覺悟に可有之候惣て御鷹之儀御用の活きものを預り候と存候より自分に大切に存候儀を外之人えも移し候それより人々も重々に大事に取扱候て相聞候間自今は別紙之通り可被仰付哉

野先にての心得

別紙

御鷹匠并同心迄被仰渡之書付

- 一 御鷹捉飼として野先え出候時は自今以後何様の御鷹にても御預りの御鷹と存間敷候自今之鷹を捉飼申度存御願申上在郷え罷出逗留いたし候と可相心得事
  - 一 右之通りに候得ば百姓に對しけんへい成儀も致間敷候御鷹大事に存候とて百姓をも遣ひ申間敷候百姓より馳走かましき儀は受申間敷候萬事自分こゝろたるへき事
  - 一 野先え出候てよりは詞にて御鷹を申間敷候書付等にも誰口と認可申候江戸え歸宅候てより御鷹と可申事
  - 一 右之通りに候上は鷹それ候時も中ケ間として尋候儀は勝手次第百姓尋に出候事有間敷候其外晝夜之番等一切無用たるへき事
- 但水夫は今迄之通可被仰付

九五二

- 一 道中御傳馬人足之儀も被仰付間敷事に候へとも左候ては着替臥お等所持難仕先々にて借用候様に成候ては都て百姓難儀たるへく候間此儀は今迄之通可被仰付事
  - 一 捉飼之節作物之中を横切に通間敷候あぜ道を通り可申事
  - 一 餌さし野廻りは又御用被存間敷候自分用事に罷出候と可相心得趣急度可申付事
  - 一 惣て御鷹之儀に付在々難儀たるへき儀見聞候は、早々頭迄可申達事
- 右之通被仰出候間急度可相守候惣て御鷹之儀自然怪我出來候共其段は御免なるへく候御用大切に存候程野先にて鷹大切に心掛申間敷事

三里次之上げ鳥相止自今村次に成候御書付

- 一 上げ鳥は村次にて可差越候并持人員數等之儀は只今迄之御定之通可相守江戸より御用有之村次差出候節は頭共佐渡守え斷可差出野先よりも御用にて延引はくるしからず候間上げ鳥之次にて可申越若格別急御用之時は村次可出右上げ鳥并野先より出候村次其度々其村々之名主え何之御用にて村次人足何人出候もの儀書付可相渡置事
- 一 頭共手前よりは上げ鳥并江戸野先より出候村次之度數并人數認一ヶ月切に可差出事
- 一 鷹番相止水夫一人宛御鷹一居に相増候旨手明之ものには只今迄之通りの由被仰出候御書付
- 一 鷹番は相止の鷹居候面々には水夫一人づゝ増可被下候是は鷹番と申候得ば晝夜共付置可申候水夫之内より付置候は入用之時計付候様にとの事に候間用心一通りの時又は不寝なと申付候儀堅無用之事

同年十一月十九日

- 一 此度餌差相止御鷹之餌鳥屋請負八人に被仰付餌鳥屋雇之餌差關八州之内餌差取中管に付右之者共方より雇餌向鳥取可申候間左様可被心得候

但來二十四日迄は只今迄之餌差も可參候二十五日より以後は鳥屋雇之餌差計參候筈に候

一 町餌差に成候付て武士屋敷えは入不申候  
右之趣被得其意向々々通し可被差置候

享保七年寅十一月

右書付寅十一月十九日大目付衆被相渡候由即日中山出雲守より來る

同年同月

餌鳥請負捷書

- 一 今度公儀之御餌差一向に相止其方共へ餌鳥受負申付候に餌差札三百枚八人のものえ預け置候間殺生人仕立關八州之内餌鳥取可申事
- 一 燒印之札毎年春一度秋一度於町奉行所相改可申候事
- 一 札不持して鳥を取候儀堅可爲停止候然上は御鳥見之輩其外誰にても在々所々において札改之時燒印之札出之急度見せ候様に殺生人共え可申渡候事
- 一 八人之請負人共方之殺生人在々所々において非分申掛へからす并竹木一切伐採へからす惣て在々所々にて百姓前より商賣物質へからす用事於有之は市町又は商人より可詞候事
- 一 燒印之札何者によらず一切借へからす并在々所々におろし札堅可爲無用事
- 一 燒印之札を持欠落仕もの有之候は急度町奉行所へ申出穿鑿有之様致へし若隱置以來顯候は可爲曲事候事
- 一 殺生人共於在々所々一村に五日より多く逗留すへからざる事
- 一 御鷹之餌百姓役にあてもたせ申間敷候事
- 附 當病等にて自身持候事不罷成御用差支に成候は人足を雇ひ賃錢急度相拂可申事
- 一 鶴白鳥菱喰雁鷹鴨類鷺白鷺へら鷺五位鷺梅首鷄川鳥鴉雲雀等一切取へからす鶴鳥鷄は四月より七月晦日迄可取之此

外先年より御注度之鳥一切取申間敷事

一 物體餌鳥取候共八月朔日より三月晦日迄田に張切綱并鳩綱不可仕事

一 鶴之御用不相濟内は左之所々葭場之内にて殺生人共鳥不可取候事

- 龜戸村之内 隅田村 小村井村 同所本多唐之助屋敷跡
- 葭沼 白鳥池 葭沼
- 小菅村 彌五郎新田 受地村 上干葉村
- 古川 古川 古川 古川
- 松戸渡橋より同宿迄之内 高島村 内匠新田の内 内匠橋より西袋村
- 中川通 古池 小溜共に 古川 宮脇迄 綾瀬川通
- 瀬崎村 傳右衛門通

一 御拳場において雉子一切取へからざる事

一 殺生人共武士屋敷え入申間敷候事

一 放し飼之鳥類は一切取申間敷候うたかわしき鳥にて候は先えとくと承り合可申候尤餌鳥之外は堅く取申間敷事

一 上野増上寺傳通院山王愛宕右五ヶ所之内えは入へからす候此外は先規之通境内にて御鷹之餌鳥取可申候然共社頭之廻りは差除可申候若咎め候は殺生人共及承候通可申候しゐて咎め候は其所にては兎角不申鳥取候儀相止め其假請負人とも町奉行所へ可申出事

一 御拳場之内殺生人八月朔日より三月晦日迄綱もち繩等にては鳥取申間敷事

一 八人之請負人共今度仕立候殺生人共臨差一切さし不申無腰にて餌鳥取可申候尤燒印札預け置候に付我儀成儀仕間敷事

右之品々急度相守少も相背申間敷候若違犯仕候は殺生人には不及申に八人之請負人共に何様にも可被仰付候此は後段々被仰渡候品も御座候は是又違背仕間敷候爲後日證文差上申候仍如件

餌鳥請負八人

同八年八月

巢鷹之儀御書付 但御代官は可尋御書付

巢鷹御用に付き近年持參候百姓共えは御金被下置其外巢元路次之入用等御代官より相渡候得共御用別大切に取扱候故か巢元之百姓共巢鷹相納候儀好み不申趣に相聞候夫故歟六七年已前よりは巢鷹出方少く有之候依之來年よりは別紙之通に可被仰付哉との御事に候尤右之通にて鷹出方多少如何候半哉との御尋之品にては無之儀外に差支候儀は在之間敷哉との御尋に候間其段之御答可申事

御別紙 但御代官可心得御書付

一 巢鷹之儀唯今迄は所々の御代官より指上候得共自今は巢元之百姓共之内直に江戸御代官宅え持参いたし夫より手代差添御鷹匠頭え差出吟味之上御買上に成候代金は直に御金藏より相渡候惣て江戸御金藏にて相渡管に候事

一 痛有之鷹は持参候ても御買上は無之候事

一 只今迄は巢元にて番人等付置之外諸入用等被下置候得共向後相止右代金之外は不被下置候間夫にても望に存候ものは御代官宅え持参可致事

右之通大久保佐渡守被相渡在府御代官え申談差支有之間敷旨巢元支配之御代官書付差出候に付其趣申上候處此通可相極旨被仰渡候に付御代官え申渡候

同九年四月八日

覺

御鷹餌鳥請負之儀去卯五月淺草阿部川町七兵衛同所清兵衛淺草西光寺門前久兵衛右三人に新請負之儀申付候處御用御手支に付當辰正月請負召放し候右代りとして淺草八軒町源右衛門小石川仲町重右衛門に請負申付候且又右請負人之内麴町

平川町四丁目五郎左衛門富坂新町平兵衛新右衛門町治兵衛去卯七月請負召放候跡下富坂町利右衛門同所三郎兵衛同所半九郎同所佐兵衛同所清兵衛右五人之内え品川步行新宿又七を差加え右之者共え請負申付燒印札相渡兩組之者共方にて殺生人仕立關八州之内にて餌鳥無滞取候様申付候依之右之殺生人共方にて取候鳥外之鳥屋共へは一切不賣渡管に申付置候間際候て外之鳥屋共方にて買取申間敷候若相背殺生人共より買取候者後日に相知候共急度曲事可申付候  
右之趣町中不殘可被相觸候以上

町年寄三人

同十年正月十五日

覺

舊冬親相濟候水鳥問屋十七人舊冬觸書差出し問屋定之儀可申渡と存候處十七人之外魚鳥問屋共申出候は今度吟味有之候鳥一式問屋と申候者之内鳥一式問屋にて無之申買又は魚商賣も成兼致渡世候者或は鳥問屋にて候哉不存ものも有之由申出候に付猶又吟味仕候處前方致鳥問屋候得とも近年不身上に付旅人方へ仕入金不罷成當時鳥荷物不參候者并在方より直に引受不申他へ參候荷物を請取致商賣其上自身居宅は鳥商ひ賣場向寄惡敷隣町之者見世を借致商賣或は鳥仕入金在方へ違置候處當年鳥拂底に付魚漁いたし候間右入金之代り魚荷物送り遣右魚は手前にて商賣不仕外え遣候由申候得とも仕入金之手前并先達仕入金遣候節荷主より證文に魚鳥脇送一切仕間敷との文言有之候然上は鳥商賣之仕入も仕候義にて鳥一式之問屋にては無御座候依之右紛敷分相除左之ものども問屋可申付候

瀬戸物町家主

甚兵衛

同所左右衛門唐

喜兵衛



本小田原町一丁目善六店

七 兵 衛

室町二丁目小右衛門店

七 左 衛 門

長濱町元右衛門店

三 郎 兵 衛

小塚原町

小 左 衛 門

右五人は鳥一式之間屋にて御座候

此者は先達て申上候通盜鳥之手筋存候もの故彌問屋に差加へ可申候

合六人

右之通當時六人にて問屋差支候義有御座間敷候若人数不足に御座候は、重て吟味仕人数相増候様に可仕候舊冬申上候人数より減少仕候間申上置候以上

正月

大 岡 越 前 守  
大 岡 越 前 守  
諏 訪 美 濃 守

右書上享保十年巳正月十五日大久保佐渡守殿え上る

折上如是承

書正月十七

日之上

書面之通鳥問屋六人相極可申旨被仰渡奉長候以上

巳正月十六日

大岡越前守  
諏訪美濃守

御城下二里四方當月より巢鷹參候旨之内雀餌鳥に堅取申間敷旨餌鳥屋共え可被申付候尤巢鷹參候は、其節可相違候間可  
得其意備

四月

右御書付享保十年巳四月十日大久保佐渡守殿御渡被成候

同年同月

鳥商賣問屋相極候に付御勘定奉行より御代官え相渡候書付

在々所々御留場にて盜鳥いたし候者有之江戸表え差出猥に致商賣候に付今度水鳥は問屋六人岡鳥問屋八人別紙之通相極  
め其外は仲買を初め脇店小賣之者迄一切鳥商賣停止に候間急度可相守候然る上は町々名主家主共迄吟味書面之外のもの  
應商賣堅爲仕間敷候右之鳥問屋共方え致吟味管申候候條其旨勿論其外之家主五人組名主迄急度可申付候以上

水鳥問屋 六人

岡鳥問屋 八人

巳正月

右之通御書付候間寫し遺候被得其意御鷹場村々え可被相觸候以上(享保九年十二月及寛延二年にも是れと大同小異の教令あり)

御勘定吟味役

御勘定奉行

同年 (不分明)

奈良屋にて町々名主え被申渡

水鳥岡鳥問屋十四人え被仰付候に付只今迄鳥商賣仕候者持居候鳥今日より日數立日之内に爲賣拂已來鳥商賣爲仕間敷旨被申渡候

同年(月日)不明

奈良屋にて町々名主え被申渡

町中飼鳥屋只今致所持候飼鳥何々有之旨書付明日鳥屋持參可致候且又向後山より直荷請候儀不罷成候先達て御定之水鳥岡鳥問屋方より飼鳥も買請候と可致商賣旨被申渡候

同十三年三月

野廻りの者の事

野廻りものは

戸田五助殿

下 縁

會 我 豊 後 守

野廻り鳥田清右衛門折原正助右の者義先達て御鷹匠小谷善四郎同心安藤八兵衛和田太助差圖いたし武州飾葛郡須賀村地内にて鳥殺生いたし候ものを爲差押候處清右衛門正助苗字名乗候ものに候哉自分も百姓にて野廻りいたし候ものに候哉難相分依之右兩人居村並に苗字身分等の義委細承知いたし度及御懸合候

申三月

武州埼玉郡小林後沼新田

島 田 清 右 衛 門

同州同郡久喜木村

折 原 正 助

御書面御問合被仰聞候野廻りかもの兩人居村右の通御座候身分の義は名主百姓に不限御吟味の上野廻り役被仰付勤候内苗字帯刀御免御扶持方二人扶持つゝ被下置候者は御座候依之下け札を以て及御答候

野廻りの者呼出候節は戸田五助え達書遣呼出候事に候

戸 田 五 助

同年五月廿五日

市ヶ谷御門より牛込御門迄の間御堀にて近年猥に魚釣候者有之や相聞候殺生御制禁の高札も有之處不届の至候此已後右の場所にて魚釣候もの於有之は急度可申付候  
右之趣請向え可相觸候以上

五 月

右書付申五月二十五日興津能登守より來る

同十五年七月

鳥殺生之儀に付一萬石以上え被仰渡候御書付

御奉揚之外御留揚之内城主領主一萬石以上之分先規は鳥殺生不致由に候得共今度は鷹遣ひ候儀御免に候但自身鷹遣ひ候節は鷹遣は御免に候自身不出時は雁鴨は致遠慮其外之輕き鳥取らせ候事は不苦候鐵砲は勿論鷹之餌之外もち繩にて鳥を取候義堅御制禁に候

右之通に候間常々手前役人をも相廻し鳥御禁之儀急度相守り候様に可申付候

同十六年二月十八日

覺

屋敷之内に蒿之巢有之候は、見當り次第早速爲取可申候向後共右之通り可相心得候

第十九款 鳥獸魚獵音類及鳥類

右之通り後町御奉行所被仰渡候間町中不殘入念可被相觸候以上

町年寄三人

同十八年十一月

かくし繩張等之儀に付御鳥見より綱差被申渡候書付

- 一 唯今迄御奉揚之内にてかくし繩張等不仕候へ共自今は不苦候間御成日も其儘差置可申候
- 一 飼付御用之場は同役中並繩差共可致指圖候御用相濟候は承合かくし繩張等可仕候以上

萬西掛御鳥見

延享二年六月(櫻町天皇 九代將軍実重)

御留場にて諸鳥の玉子取候もの御仕置の事

御留場にて諸鳥の玉子取候もの 過料三貫文

同年九月

鷹砲打候ものと馴合鳥獸商賣致し候者御仕置の事

可致家業ため鷹砲打候ものと馴合鳥獸商賣いたし候もの

寶曆四年六月十日(桃園天皇 九代將軍実重)

御鷹餌鳥屋共町々にて餌鳥とし候時分近來は心得違候哉相答又は鳥追散抔致餌鳥出方少く候此節は御巢鷹飼立の時分に江戸内近所にて取候鳥ならては御用に難立候間餌差共鳥さし候時分妨致さず勿論相答又は鳥追らし候事等致間敷候最餌差共町におゐてかさつかましき事不致御定の趣きに相違成儀仕間敷段急度申付候間此以後故もなく餌鳥さし候時分妨致候は急度可申付候此段町々不洩様可相觸候

戊六月

右之通從町御奉行所被仰渡候間町々裏々召仕等迄入念可被相觸候以上

町年寄三人

同五年六月十四日

御鷹野御場向寄大取捨候儀去戌八月中度々相觸候得共今以場所により觸の趣心得違候者も有之候哉捕候て打殺候義も有之様間々相觸候の趣きに相違いたし不埒に候曾て打殺申間敷事に候幾度も捕候て捨可申候兎角末々の者行届不申様相觸候何け度も取捨候様急度可相心得候

右之趣借屋店借裏々召仕等迄急度可相守候最名主月行事家主共より猶又無相違様時々可申付候

亥六月

右之通り從町御奉行所被仰渡候間末々町々迄入念不洩様早々可被相觸候以上

町年寄三人

同年八月

書留

御鳥見方え本所深川邊より差出候御鷹場證文並同斷筋外一通是は爲心得の黒江町助之丞扣を以記之候

御鷹場證文一札の事

- 一 海邊に於て不依誰人鳥殺生仕候者御座候は留置早々可申上候惣て怪敷舟相見え申候は早速立寄詮儀仕早々可申上候事
- 一 於海邊鳥殺生の道具持候舟御座候は舟頭共に捕置早々可申上候事
- 一 諸鳥共に落鳥病鳥其外怪敷義有之候は早々可申上候事
- 一 脇鷹は不及申縱御公儀様御成鷹共御支配の御鳥見衆無御案内して御鷹つかはせ申間敷候事

一 餌鳥札不持雁餌差急度相改可申候縦鳥札持候共雁鴨以上の大鳥は不及申鷹の類鶴川雁鶴雲雀等一切とらせ申間敷候惣て雁鴨居申候池沼川え鳥殺生の張切網はがもち繩仕候者捕置早々可申上候勿論御法度の鳥巢子とらせ申間敷候事右の條々拙者共觸下の者共に中渡常に心付油斷仕間敷候若見通に仕後日外より露顯仕候は、拙者共何様の曲事にも可被仰付候仍如件

寶曆五年夏八月

西葛西領伊奈半左衛門支配所

獵師町八ヶ町分

相川町

同十八日

熊井町

諸町

同

留吉町

同

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

第十九款 鳥獸魚鱗書類及鳥商

宮寺藤四郎様  
西尾多七様  
中村六右衛門様  
小野寺傳十郎様  
井田九藏様  
増井惣八郎様  
牧野金助様  
津田七藏様  
林重左衛門様  
麻窪吉左衛門様

大島町

同

佐賀町

同

清住町

同

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

月

名

同年十二月

御奉場へ内近來猥に相成候様に相聞候其上近頃怪敷疵馬杯も度々有之不ノりの様子に候鳥殺生の儀は勿論諸事毎々の通り可相心得候若如何様成義も及見候は、早速可申出候右の趣地頭より急度可申付旨右場所に知行有之面々え可被相達候

文化十二年十月(孝格天皇  
十一代將軍家齊)

野州小貫村地内放馬取計方何書

覺

一 見分書  
放馬一疋

黒毛年なし(男馬者牡馬と可談)

但丈ケ四尺六寸

裸 脊

右者私御代官所野州芳賀郡小貫村地内字吹田谷と唱候場所に去月二十九日放馬有之段訴出候に付爲見分早速手代差遣爲相糺候處 村役人口書「何方より放参り候哉村内者勿論最寄村々をも相糺候處見懸り候もの又者知もの等一切無之右に付心當怪我敷儀等無之旨村役人共一同申之等竟難用立者馬故放捨候儀にも可有之哉」受書村方にて大切に爲飼置毛色其外之始末巨細認め村外れ往還端え建札いたし尋來候もの有之候は、早速可訴出旨申渡置候此上如何取計可申哉此段奉伺候以上 此何近村相糺候趣と認無之候何れ近村々糺候趣村役人申立之外に認入可申候

御附紙 甲斐印

書面放馬之儀建札いたし被置候處猶又最寄村々え獨書をも差出候間被得其意六ヶ月相立候ても尋來候もの無之候は、札取除右馬村方におゐて飼置候様申渡證文取之可被差出候以上

九月

野州小貫村地内放馬斃馬に相成候に付何書

覺

一 見分書  
放馬一疋

(此但書に斃馬いたし候様子今少し認方も可有之哉)

右者私御代官所野州芳賀郡小貫村地内字吹田谷と唱候場所に去月二十九日放馬有之段訴出候に付爲見分手代差遣相糺候趣を以て村外れ往還端に建札爲致置其段先達て奉伺候處右放馬之儀建札いたし置候上は猶又最寄村々え御獨書をも御差出被置候間得其意六ヶ月相立候ても尋來候もの無之候は、札取除右馬村方におゐて飼置候様申渡證文取之可差出旨御下知相濟候に付右之趣村方え可申渡處右馬相煩斃馬に相成候段訴出候間早速手代差遣見分爲仕候處疵所等も無之全病にて斃馬に相成候段無相達相見候に付始末相尋候處 村役人口書並馬醫容體書「右馬當月二日頃より相煩候間馬醫相掛け治療仕候得共老馬之上半府内良と申病症にて難病に有之療治不相屆當月十一日斃馬に相成候段村役人並馬醫一同申立疑敷も相聞不申候段見分手代申聞候間斃馬之儀者取捨申付候右者最寄村々え御獨も有之村外れ往還端え建札致置候儀に付此上如何取計可申哉奉伺候以上

文化十二年十月

岸 本 武 八 郎

御附紙 甲斐印

書面斃馬取捨申付被置候上者建札取除證文取立可被差出候以上

十月

(放馬一件者見分もの歸府次第早速伺書差出候方可有之候哉御獨書も御差出被置候儀に付其段相心得可取許事)

天保七年(月日)  
(仁孝天皇  
十一代將軍家齊)

第十九款 鳥獸魚鱗畜類及鳥類

御鷹場にて鷹遣候衆有之候は、相改何方迄も附したひ宿を聞届御鳥見衆え御注進仕勿論其譯早速可申上候縦餌差之衆にても御法匠の鳥を取申候は、留置御注進可申上候事

同年(月日)

御鷹場は勿論御捉飼場におゐて鳥類殺生いたし候もの見付候は、郷中之もの搦捕早々可訴出若見聞遁候は、村役人小前共一同可爲越度事

附り 鐵砲を打候は、猶更之儀郷中より罷出遂穿撃搦捕可申事

(六ヶ所御鳥見御役宅之御證文毎年差上候村々を御鷹場と唱ふ其外を御捉飼場と唱ふ) 享保庚御鳥見様より御無違し仕候

同年(月日)

捨馬不仕前々之通相守可申候付然放牛馬有之は名主組頭立會養置早速可申出事はより以下年號月日不分明

御制法拔録

御當家御代々於大坂近邊以鐵砲不打鳥所々之事彌可停止之旨被仰出候被存其趣御領私領共以不可違背之由堅可被相觸候恐々謹言

三月十三日

稻葉美濃守正則  
阿部豊後守忠秋  
松平伊豆守信綱  
酒井雅樂頭忠清

内藤帶刀殿

保科彈正忠殿  
安部攝津守殿  
松平隼人正殿  
會我又左衛門殿

御制法拔録

從權現様靈德院様御代於大坂近邊以鐵砲鳥不打來所にて者彌不打様急度可被申付候此趣御領私領共以被相觸尤候恐々謹言

阿部對馬守重次  
阿部豊後守忠秋  
松平伊豆守信綱

阿部備中守殿  
稻垣攝津守殿  
久貝因幡守殿  
會我丹波守殿

官中秘策拔録

一 牛馬療治仕候者醫師口上書

右之通遂愈儀言上書並口上共委相認め以使者江戸え注進可有之候使者遣候者其場に立合前後之儀覺と見届けさせ候様に差圖可然候此時先々より御老中え申進差圖次第御用書え可申進事也大目付衆へは右口上不殘言上書共相添若年寄衆御老中へ一同に先々より差上候但是は口上等寫候て書紙は御老中誰殿へ差上置候由申上候て可相濟事也

官中秘策拔録

九七〇

猪鹿猿熊等獵師之外徒に殺し申事有之候は、早速牢舎申付置殺申候生類共々檢使を遣し能々相改め其所に入理其趣早々江戸へ注

官中拔策拔録

死馬之事

一 此方之馬途中にて風斗死候は、其所の屋敷又は町方へ相斷置御目付へ相届捨場え遣候事

此方屋敷前にて他所之馬死候事

一 早々こもを掛番人付置馬主之方より被相届御目付へ此方よりも爲知候様相届可申候先之留守居も同道にて御目付え可罷出候首尾可然哉

在郷馬屋敷内え參居死候節之事

一 右之節は早々御目付え容子可申出候死候は、尙以御差圖次第請取可申候尤馬主にも留置事專一之事

屋敷前にて病牛馬有之節之事

一 右之時は早々屋敷にて馬醫師を差出養生可仕候六ヶ敷候は、早々御目付に相届可申候事

柳營秘鑑拔録

御鷹之鳥巢鷹等拜領之次第

一 巢鷹は御在府之御三家え斗之進之

一 御鷹之鶴拜領ハ御三家松平加賀守被下之御三家え之上使ハ兩御番頭加賀守えは御使番被遣松平陸奥守松平大隅守在府之節享保十四年初て拜領被仰付其節在國之國持兼并壹年に貳三人程宛有以弟以宿次被下之

一 御鷹之雁雲雀御家門國主之面々准國主四品以上在府之時節になり右兩品之内一通り被下之四品以下之外様之大名も

家に寄拜領之南部修理大夫被下之御譜代衆は城主以上被下之何も上使御使番勤之

一 右雁雲雀老中松平右京大夫石川近江守若年寄衆有馬兵庫頭加納遠江守何も於御座之間被下之御奏者番寺社奉行詰衆者於殿中拜領之老中被傳之京都諸司代者宿次を以被下之

一 御三家御在國之時者招家來於殿中鶴被遣之

一 御代々初鷹之雁諸家と未被下以前享保三年戌三月御拳之鶴御料理被仰付諸衆老中之嫡子御奏者番に被下之右何も西湖之間並居御月見上意有之其以後御鷹應被成同年十二月御拳之鳥御料理被成下西々以下姓名略之

第二十款

田野

隠田切開添地等處分規則及ひ土地賣買讓渡規則等の如きものは必しも警察の範圍に非すと雖も蓋し之れか取締に至りては警察の職掌に歸せざる可らず徳川氏田野の法も亦た知らず識らず此に歸するを覺ふる也

慶長十四年八月四日 (後陽成天皇 二代將軍秀忠)

野におゐて草刈事此以前より入組に刈所に屋敷のまへと號或録目を付或境をもて草刈を留る儀曲事也所詮自今以後無其議可刈者也

同十七年九月朔日 (後水尾天皇 二代將軍秀忠)

黒田長政領國博多に立たる制札

掟

一 百姓不上ケ田畠押取作候儀に付田畠押取作候儀に付田畠荒地候は、可爲曲事也

一 百姓之家を明させ給人罷居候儀令停止候事

右於相背者并處罪科者也

長政書判

寛永十八年二月 (明正天皇 三代將軍家光)

御取箇并堤川除等の儀に付御代官え申渡

御書付拔録

堤川際申付候に他の御代官所并私領たりといふとも他領の田畑障に或不申候様に被掛吟味御費無之様御普請可被致事  
同二十年三月十一日



田畑永代賣買御仕置覺書

- 一 賣主半舎の上所追放家財欠所の不及沙汰本人死候時は子同罪
- 一 買主過怠半本人死候時は子同罪
- 一 但買候田畑は賣主の御代官又は地頭へ可取上之
- 一 買人過怠半本人死候時は子に構無之
- 一 買地に取候者は作取にして質に置候ものより年貢收動候得は永代賣同前の御仕置
- 一 但頼納賣と云

右の道田畑永代の賣買御停止の旨寛永二十年未三月十一日被仰出之

但百姓苗田畑山林等の外開發新田又は浪人待などの田地賣候儀構なし

延享八年九月十五日 (聖元天皇 四代將軍家綱)

當年は御廳使に被遣候儀相止候間於在々作毛不喰様に鳥をい申候にと御代官中へ可被申遣候旨今日堀備中守殿被仰渡候間被得共意右之段村々え被申觸かゝし致候て成共又は繩を張候て成共百姓勝手次第作毛不喰様に可被申付候以上

延寶八年申九月十五日

徳 五 兵 衛  
大 五郎左衛門

伊奈軍人殿

貞享四年四月 (東山天皇 五代將軍綱吉)

田畑頼納賣並永代賣買御制禁の事

- 一 質地取候者年貢不出の質地に遺置無田地の者方より年貢役に勤もの有之由相聞不届の至候堅停止の事

- 一 田畑永代賣買此以前被仰出不通彌以制禁の事

寛保十年十月 (中御門天皇 八代將軍吉宗)

潰地代金渡方書付拔録

鬼怒川新井敷地代金可被下儀上方の通所直段を以可被下哉を所々賣買直段吟味仕候處に上方と違ひ賣買質物入少く田畑上中下夫々相當直段附無之所々多殊に此邊は田畑廣狭も御座候哉又は場廣の所故田畑道の遠近多き故にて候哉直段所不相應に高下に有之不陸に付百姓前不相當に候其上直段附疑義も御座候へとも決定可仕様無御座御損失多き積り見へ申候御損失も平等に行渡候得は御救に可成候得共是以不陸に付百姓前損徳多く不相當の儀に見へ申候

下 札  
直段附疑義儀も有之旨申上候品は賣買直段高き分を書出下直成儀は書出不申或は賣買金高へ増金仕筋杯も有之様に相聞此段吟味可仕手掛り見當り不申候

寛政二年四月 (孝格天皇 十一代將軍家齊)

新田え無斷移り候者之事

新田え無斷家作いたし候もの家作爲取拂候上過料

同年同月

欠所之地所監候もの咎之事

欠所可成田畑地面於隠置にて名主輕追放但頭所拂

寛政年間 (月日 不分明)

田方植付後土用中不時之冷氣にて儀に暑氣強く候得者其所に寄虫付等有之事候由虫を防も品々有之先夜分畔にて火を焚明松を燈し歩行在をながしから鐵砲を打錢砲を打事ならぬ土地者花火を建鯨之油を一畝に二三滿程宛打そゝぎ鯨之油

無之土地者曉天風土より石はいをふりかけ根虫に候は、用水口より石灰を流し虫を防べし翌年地しまり候は、竹之葉麥  
わらを入切返し可申事

天保七年 (仁孝天皇 十一代將軍家齊) (不分明)

掛井堀落井堀井道をせはめ田畑を仕出し作毛仕付申候は、當人は不及申名主五人組まで何様之曲事にも可被仰付事

同七年 (不分明)

苗圃方者早魃又者木腐にて植付難成後候は、土用入候て者苗新根をさし候間根付不宜不生立事に候土用入四五日前に  
苗を取束ね流之外又者用水溜池杯え苗之根土に付さる様に途中に釣置新根を出さぬ様に手當いたし縦苗枯葉に成候共不  
苦間圍置兩ふり深田は水減し候節土用半過迄植付候一夜に根付實法候間無油斷心得尤其所之地味にも寄へく間平年に能  
様も置妙成事を辨ひ水旱之憂を免るへき事

同年 (不分明)

近來在方村々之もの共耕作を等閑にいたし却て困窮等之儀を申立奉公稼に出候者多く所持之田畑を荒置候類有之由相聞  
不埒の至に候以來高人別割合何人迄は奉公に出候ても殘人數にて耕作は勿論村方之差支無之哉否村役人共相糺實々無據  
子細にて奉公を出度旨相願候者有之候は、右割合之數迄は村役人共承屆年季を限奉公に出候様可致候若村方之差支を不  
願奉公出持田畑を荒置候儀等有之候は、當人は勿論村役人可爲越度事

### 第二十一款

#### 衛生

凡そ形而下の學問は世愈下れば愈進む故に醫學の如きも世愈古にれば其御愈疎なり殊に衛生の方法は醫術中尤も新し  
きものに屬すれば徳川氏の世衛生の密ならざる事論を俟たざるなり

慶安三年十月四日 (後光明天皇 四代將軍家綱)

疱瘡麻疹藪いも速慮の覺

- 一 手前に抱置候孫子親類疱瘡藪いも相煩候に付三度湯はけ候は、御番に出し可申候但屋敷の内を借罷在候親類縁者右  
の煩有之時構を仕切居住候は、不苦候御番に出し可申候事
  - 一 自分疱瘡相煩候は、相見へ候内より七拾五日過候は、御番に可出事御目見の者百日除候事
  - 一 自身麻疹藪いも相煩候は、見へ候日より三十五日過候は、御番に出可申事御目見の者は七十五日除申候事
  - 一 疱瘡相煩候看病人見へ候日より五十日御目見不仕候に付御供番右の日數除候事勿論當番の節御目見不仕事
  - 一 麻疹藪いも相煩候者病人見へ候日より三十五日御目見不仕候に付て御供番の節御目見不仕候
- 明曆四年六月廿八日 (後西院天皇 此年四月十三日 四代將軍家綱 日萬治と改元)

差上申手形の事

今度木藥屋並木藥問屋被召出被仰渡候通以來にせ木藥一圓商賣仕間敷候若隱にせ木藥商賣仕におゐては何様にも曲事可  
被仰付候尤上方より買下し申候とも吟味仕にも木藥一圓買申間敷候其上我共中間一年に一度宛寄合を付吟味仕可申候  
若醫藥種商賣仕者御座候は、急度御番所へ可申上候我等共不穿鑿いたし仲間の者の内にて醫藥種商賣仕者於有之

は其當人は不及申我子仲間の者共に御懸り可被成候爲後日手形仕差上申候仍如件

明曆四年戌六月十八日

何町木藥問屋

家持誰印  
誰店誰印

御奉行所

右の通町中立會吟味仕書上申候此外木藥屋同問屋一人も無御座候若偽り申上候は、何様にも可被仰付候爲後日名主目行  
事手形差上申候仍如件

何町

名主印  
月行事印

御奉行所

寛文五年八月十一日 (靈元天皇 四代將軍家宣)

覺

町中にて商賣仕候生纏古きを新しく見へ候様に手くろう仕商ひ候由其纏給候者は相煩又は不慮の仕合有之由に候間自今以  
後商賣仕候者共左様の徒等手くろう不仕候様に商賣仕町々名主月行事可申渡候以上

八月十一日

右御書付の趣奈良屋にて名主月行事へ被申渡候

延寶六年二月十九日

今朝土井能登守殿被仰渡候は麻疹病人只今迄三番湯掛候迄は登城遠慮仕候得共向後御役者相勤御成の筋は助を立相勤御  
目見無用に可仕の由被仰渡候以上

同八年十一月廿八日

疱瘡麻疹水痘遠慮の事

- 一 疱瘡病人は見へ候より三十五日過候て罷出御目見可仕候
- 一 看病人は三番湯掛罷出御目見可仕
- 一 病人相果候共忌明候て罷出御目見可仕候
- 一 麻疹病人は三番湯掛罷出御目見可仕候
- 一 看病人右同斷
- 一 病人相果候は疱瘡同斷
- 一 水痘疹同斷

右は御側の面々計外様の面々は御構無之先日中通御座候以上

貞享二年七月十一日 (五代將軍綱吉)

覺

頃日悪敷人參相渡候由相聞候間向後吟味致給敷人參堅く商賣仕間敷候若似せ人參賣渡候者有之候は、早々可申出臨置協  
より相知候は、急度曲事可申付候者也

寶永七年正月 (中御門天皇 六代將軍家宣)

一 疱瘡麻疹

右相煩候者三番湯掛候は、罷出御目見仕相勤不苦候看病人は行水にも不及候

一 水痘

右相煩候者一番湯掛候は、罷出御目見仕相勤不苦候尤看病人は行水に不及候  
一 疱瘡麻疹水痘相煩候面々より献上無仕様儀三番湯掛候以後は不苦候右表向此通り可相心得候以上

同年同月

疱瘡麻疹

右相煩候者御側向並奥向其外御廣敷向へ相詰候面々七十五日過罷出可相勤候右看病人は病人三番湯掛り候以後罷出可相勤候

水痘

右相煩候もの御側向並奥向其外御廣敷向へ相詰候面々三番湯掛候以後罷出可相勤候右看病人は病人一番湯掛り候以後罷出可相勤候

一 疱瘡麻疹水痘病人有之もの同屋敷の内にて相煩候共居所を隔候て病人一切見不申候は、不及差扣に候事

一 右相煩候面々より献上もの仕様儀は三番湯掛候以後は不苦候事

一 若君様方は相勤候御醫師疱瘡麻疹水痘相煩候者方へ見舞候儀可爲無用候事

右の外表向は子八月極り候御書付の通可被相心得候以上

正徳三年正月十日 (七代將軍家職)

覺

一 疱瘡麻疹候者御目通へ罷出候面々は一番湯掛候日より七十五日過罷出可相勤事

一 右煩候者御目通は不罷出輩は三番湯掛り候以後相勤させ不苦事

一 右看病所にて病人に付罷在候者は病人三番湯掛候以後罷出可相勤事

一 右看病所の者も御目通へ不罷出輩は不及差扣候事

一 水痘煩候者御目通へ罷出候面々は三番湯掛候以後罷出可相勤事

一 右煩候者御目通へ不罷出輩は一番湯掛候以後相勤させ不苦事

一 右看病所にて病人に付罷在候者は病人一番湯掛候以後罷出可相勤事

一 右看病所の者も御目通へ不罷出輩は不及差扣候事

一 疱瘡麻疹候水痘病人有之面々同屋敷の内にて一所に不罷在棟を隔候て病人一切見不申候は、不及差扣事

一 右煩候面々より献上物仕候儀は三番湯掛候以後は不苦事

右の通可被相心得候以上

同年十一月

覺

一 疱瘡麻疹候者死候時は看病の斷を申立病人に付罷在候者は病人死候日より二十日過候迄は御目通へ罷出候儀差扣可申候忌掛候者は右日敷の内に忌明候は、登城いたし御番にも可相勤候御目通へは右の日敷過候迄は差扣可申候

一 水痘煩候者死候時は看病の所を申立病人に付罷在候者は病人死候日より七日過候迄は御目通は罷也候儀差扣可申候忌掛り候者は右日敷の内に忌明候は、登城いたし御番等も可相勤候御目通へは右の日敷過候迄は差扣可申候  
午十一月

右の通可被相心得候以上

享保八年二月廿一日 (八代將軍吉宗)

小石川養生所へ可遣病人の義先達て看病人無之者許可差越旨相觸候得ども自今は看病人有之候共又は寄子の類たりとも極貧にて薬も給兼候程の者は可訴出候吟味の上養生所へ可遣候間其旨相心得可申候